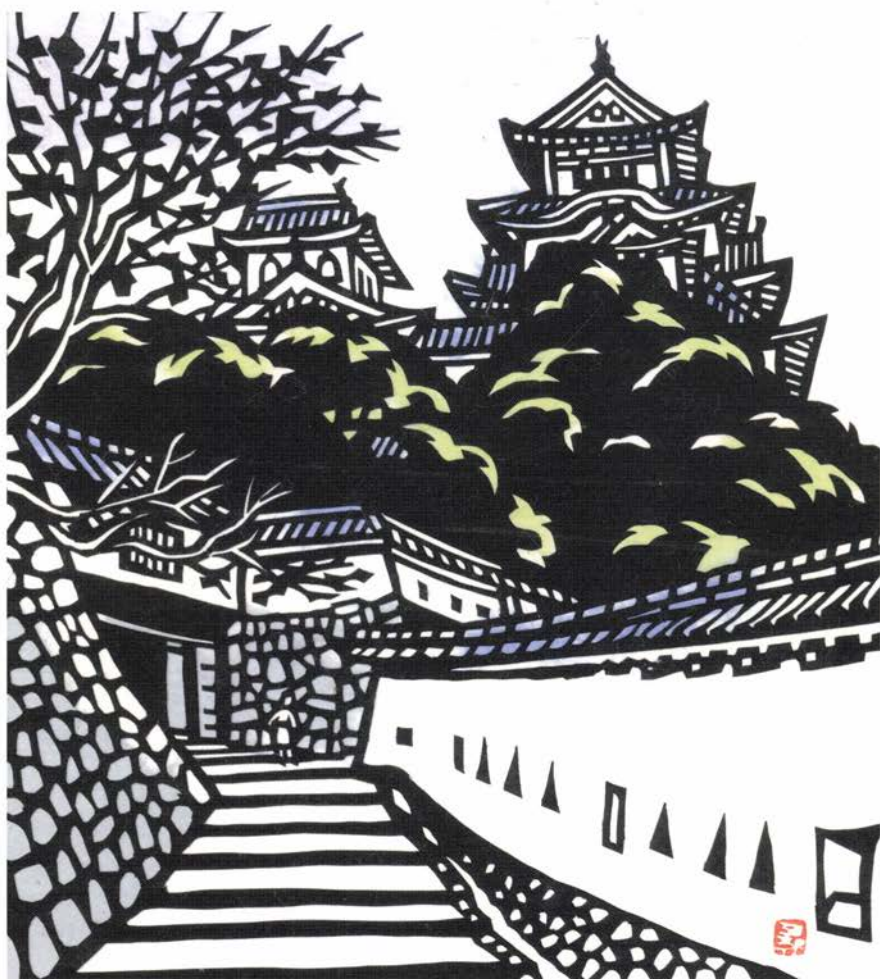


川柳塔



平成十八年六月一日発行 毎月一日発行
 創刊大正十三年 通卷九四九号

日川協加盟

No. 949

六月号

予告

第十二回 川柳塔まつり

とき 十月八日(日)

ところ アウィーナ大阪

◎ 詳細は後日お知らせいたします。恒例によって同人総会・各賞表彰・記念句会・懇親会を開催します。同人総会以外はどなたでも参加できますので、ふるってご参加ください。

残暑見舞広告

本誌八月号に掲載する残暑見舞広告を募集いたします。広告のスペースと掲載料は左記の通りです。よろしく願い申し上げます。

★個人 一口 二、〇〇〇円

(氏名・住所・電話番号など掲載)

★団体 次の四種といたします。

① 1/3頁 六〇〇〇円 ③ 2/3頁 一二〇〇〇円

② 半頁 九〇〇〇円 ④ 一頁 一二〇〇〇円

▼原稿締切 六月二十三日

〒545-0005 大阪市阿倍野区三木町二一〇一六

ウエムラ第二ビル二〇二号室

本年度の主な催しもの予定

●特別企画展 「戦後短歌の牽引者―近藤芳美展」

18年3月18日(土)～18年6月4日(日)

●第21回詩歌文学館賞贈賞式 18年5月27日(土)

受賞者

(詩) 入沢 康夫「アルポラード」(書肆山田)
(短歌) 稲葉 京子「椿の館」(短歌研究社)
(俳句) 深見けん二「日 月(ふらんす堂)」

記念講演 岡井 隆

●常設展 「戦後文学の中の詩歌―近藤芳美展に寄せて」

「教科書で出会う詩歌」※仮称
18年6月6日(火)～19年3月11日(日) ※予定

●詩人の集い ※仮称

俳句指導講座 18年8月3日(木)・4日(金)

●短歌実作講座 講師・館長 篠 弘

俳句入門講座 ●短歌入門講座 ●詩の講座

「詩歌資料ご寄贈のお願い」

当館は日本の明治以降の詩歌資料を、作者の有名な無名やグループの規模の大小を一切問わずに収集保存し、展示や閲覧、研究に資しています。皆様のいつそのご協力をお願いいたします。

大量の資料のご寄贈に関しては、事務局までお問い合わせください。当館の所蔵資料は、特別資料を除きホームページで検索できます。

【対象資料】

●詩集・歌集・句集・柳集、評論、研究、随筆、評伝などの詩歌関連図書全般

●同人誌・結社誌、グループ誌などの詩歌雑誌 ●その他

【収蔵資料】(平成18年2月末現在)

●図書・雑誌：約92万点

●特別資料(原稿・直筆資料・写真・遺愛品)等：約6万4千点

【休館日】

●毎週月曜日及び年末年始(12月28日～1月4日)

※4月・11月の月曜日は、山口青柳宅(雑草園)・展示室・井上靖記念室のみを公開。

日本現代詩歌文学館

〒024-8503 岩手県北上市本石町2-5-60 TEL 0197-65-1728 FAX 0197-64-3621
URL <http://www.shiikabun.jp> E-mail shiika@shiikabun.jp

「近頃思うこと」

河内 天笑

二〇一〇年（平成二十二年）九月号で川柳塔誌は輝く一〇〇〇号を迎えようとしています。大きな通過点となる九五〇号は来月に迫りました。九五〇号を飾る記念行事として企画致しました誌上大会には、同人・誌友をはじめ他柳社の柳友の応援を賜り七三〇名という多数となりました事をご報告し、厚く御礼申し上げます。

昨年の秋の同人総会に於て主幹及び理事長の選出方法に「選挙制度」を採り入れる事に決まりました。（本号78頁参照）これまで主幹・理事長は、代々前主幹の指名によるものでしたが、時代の趨勢もあり制度を変えることになりました。常任理事以上主幹に至るまで七十五歳の定年制を取り入れた事も定着しています。これら制度が、川柳塔社のよりよい方向づけになることと確信しています。

「ところ変われば品変わる」という格言がありますが、四月から五月にかけて小句会を六ヶ所お邪魔して参りました。その感想が「ところ変われば味変わる」であります。

す。勿論人間味や句の味の事でありますが、地元堺や本社句会とひと味違うたのしさを味わってきました。逆立ちしても出て来んような着想や、思いがけない発想を耳にするとき「やっぱりええなあ川柳は」とつくづく感じ入ること頻りでした。

それと、うれしいのは柳人仲間とのコミュニケーションです。毎月の句報を見せて頂いても、お名前や作品の味わいは分かっている、顔だけ知らないというジレンマが拭えず、やはり足を運べばそれだけ得るものがあります。「ささゆり句会」（能勢町）ではまた来てね、なんてみなさんと指切りまでするあたたかさを頂きました。

初心の頃に戻ってあっちこっちと句会を駆け回る虫がまた目を覚ましました。しかしこれも健康に動き回れる体力があつての事です。酒をつつし、粗食して目方を減らし、スマートな胴まわりで各地の句会に赴きたい——というのが今の一番のユメです。

自選句

古い常識をなさけなく思う日も

恥をかくことを怖がらないように

楽にして天衣無縫に泳ぐべし

わが道を行かんやなんて烏滸がまし

すぐ勘定してしまつてる情けなさ

天笑

ク ク ク ク



座右の句

人の世や嗚呼にはじまる広辞苑

(薫風)

私の句

ドーナツの穴は天使の食べた跡

水野黒兎

川柳塔 六月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「姫路城」

■巻頭言「近頃思うこと」

河内天笑……(1)

師を追いかける……

川端一步……(2)

川柳塔(同人吟)……

河内天笑選……(4)

川柳塔の川柳讃歌(18)……

木津川 計……(51)

自選集……

板尾岳人選……(56)

水煙抄……

板尾岳人選……(56)

主幹・理事長の選任について……

板尾岳人選……(56)

愛染帖……

板尾岳人選……(56)

誹風柳多留一 一篇研究 10……

板尾岳人選……(56)

檸檬抄「懐かしい」……

板尾岳人選……(56)

師を追いかける

川端 一步

「川柳大阪」の句会にいつも来て下さっていた神谷凡九郎さんが、生前「家を改築するのでだれか川柳の本を買ってくれないか」と言われ、古書蒐集が趣味の私はいちばん先に手を上げその幸運を手に入れました。

それはダンボール五個の分量で多くの句集と共に「川柳雑誌」No 306号から終刊のNo 460号まで、川柳塔誌は2号(途中から川柳雑誌の通し番号に)から763号まで実に38年間分を貰い受けました。

中でも麻生路郎追悼の460号は宝物です。まだ交通局の現職だった私は連日路郎先生の巻頭言を貪るように読み、川柳塔誌は葉先生の巻頭言と句は自選集を読みました。

そのうちにいつしか自選集の智子さんの句に魅かれ、「娘二人はこんなお母さんになってほしい」と見たこともない智子さんのファンになっていました。定年退職の送別会には金太さんをお願いして智子さんに来ていただき「おはなし」をしてもらいました。

話の中で中尾藻介さんのことを「中尾藻介先

「蛙」	須郷井蛙選	(86)
一路集「湿気」	佐藤治代選	(86)
「長閑」	西内朋月選	(87)
初歩教室「歯」	三宅保州	(88)
秀句鑑賞「同人吟」	高橋岳水	(90)
水煙抄	山口光久	(92)
銀髪よ永遠に——本間満津子さんを偲ぶ	神夏磯典子	(93)
五月本社句会		(94)
■新刊紹介「遠き人へ」奥田みつ子著	田中正坊	(97)
各地柳壇(佳句地十選/小谷集一)		(99)
柳界展望		(113)
六月各地句会案内		(114)
■編集後記(ひとこと/居谷真理子)	楓楽・恵子	(116)

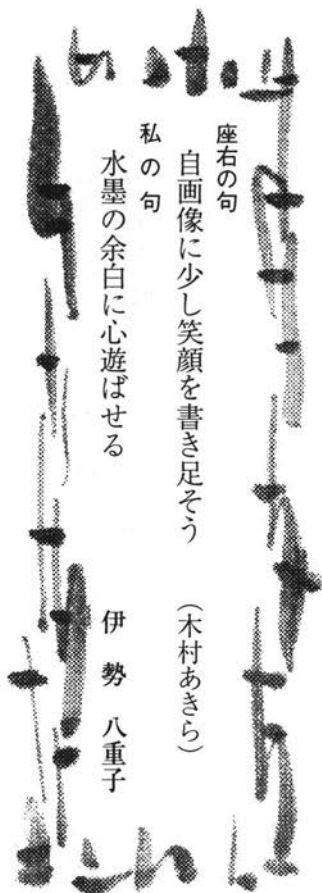
座右の句

自画像に少し笑顔を書き足そう
私の句

(木村あきら)

水墨の余白に心遊ばせる

伊勢 八重子



生の句が好きで、先生が選をされている句会にはみんな出席しました。その柳誌をとりました。先生の句を選んで何度も読みました。先生の句の呼吸を学ぶ、句風に近づきたいと思う、その中で自分の句風が出来るのではないかと思います。帰りにお茶をよく誘っていただきその時の先生のお話がよい参考になりました。先生は食事の箸紙に、「決して先をいそがない」、「他人は他人、比べない」、「(真似をしない)」、「(喋りたいた時には喋らない)」、よく自分の意見をいいたくなるがいつべん考えてから意見を述べる。と書いて下さいました。

話を聞いて「自分の目に狂いはなかった」と嬉しくなりました。でも智子さんのように私は師と思う人を追っかけただろうか：忸怩たる思いをしました。

おだてにも乗ろう鞭にも打たれよう

智子

大阪弁の川柳が上手だった凡九郎さんは、戸田古方さんを追っかけ、先生の講座録「私の川柳」をボールペンでギツシリ小さい字で書き写し一冊の私製本にしました。B6版・94頁、原稿用紙にして300枚にはなるでしょう。ただただ頭が下がります。

ただ泣いてあげるしかない思いやり

凡九郎



河内天笑選

大阪市 米澤 俣子

平和ほど贅沢は無し花の下
ときめきの数だけ若さと戻す

健やかで人の輪にいるしあわせよ

日本人せめてきれいな箸使い

背景が変れば発想が変る

柚子風呂に思案の長い仕舞風呂

橿原市 居谷 真理子

命短し入りたければ昼の風呂

しゅるしゅると蚕泣かせて締める帯

冬空に百舌が吐きたる一行詩

杖を持つ何かを捨てて杖を持つ

大海を知らぬ泉の清らかさ

さあ本を読もういそいそ手を洗う

和歌山市 上地 登美代

拉致された子等を待つて常夜灯

背負い投げ一本したい人がいる

真夜中のベルに方向見失う

貯蓄あるうちは避けたい突然死
らつきよう漬母の匂いを引き戻す
現行犯で逮捕しますぞ夜盗虫

長岡京市 山田 葉子

イチローが場面場面で出すオーラ

着飾ってお好み焼きを食べる羽目

新品のジーンズだとは思えない

お静かに脱皮しているとこです

飲むんなら御飯を減らせなんて無理

母と娘にちよつぱりほしい車間距離

熊本県 高野 宵草

廃品回収お酒よく呑むお宅だな

人形に破れジーンズ着せて売る

苦労かけた妻看取るまで竹を踏む

春と秋待つて齢を積み早さ

木漏れ日の運命に負けぬ花が咲く

杖はまだ僕の若い気許さない

高石市 浅野 房子

愛の讃歌うたつて愛に恵まれぬ
死に花を咲かせておくれ宝くじ

思わせ振り言つてわたしを迷わせる

玉手箱開けて白髪になりました

うっかりの一言それが本音かも

他人故親切を言う事もある

東大阪市 谷 口 義

最高のおしゃれは笑顔だと思ふ

平日は平日らしく日を過ごし

大阪のはしつこで見る昼の月

とりあえず眼鏡を拭いて家を出る

現在過去未来喧嘩の種はある

駅弁は持つて帰るとまづくなる

西宮市 西 口 いわゑ

ためらわず明日の扉をノックする

親切が悪のささやきとは知らず

つらかった昨日を糧に虹をかく

光つてゐる人がみんなを光らせる

哀しみを誰にも告げず花を買う

夕ざくらあの世この世の区別なし

香芝市 大 内 朝 子

笑うこと特効薬にして生きる

志 子等の荷物にならぬこと

懲りもせず自己中心の空まわり

恋するとてもかわいく尽くす魔女

おもいきり泣いて心の煤落す

健康な人にわかつてもらえない

富田林市 藤 田 泰 子

過ぎたこと忘れなさいと花盛り

春寒しお若い方のお葬式

着信音大きな大きな古時計

パソコンになれてしまった筆不精

身のうちにあふれる想いさくら咲く

年齢を忘れてしまうことがある

河内長野市 坂 上 淳 司

二日酔い妻のソプラノには参る

ロダン作考える人二日酔い

近寄つては危険鮮やかなルージュ

ハンサムな人が忘れたアデランス

素っぴんの方がいいのに女高生

見てみたい歯医者の方マスクとった顔

京都市 都 倉 求 芽

年寄りのゆとりを狙うサギやタカ

花の下みなくつろいでみな他人

さくら散るころに同調する離婚

背の幅に合った想い出だけ背負う

ど肝抜く話はみんな四月馬鹿

うっかりと怪我した息抜きの部屋で

高槻市 瀧 本 きよし

山車の屋根男の夢が跳び回る
励ましの優しい声に酔ってます
下駄箱にまだ履けますと禿びた靴
山の神に触らないので崇られる
吹き抜ける風の音にも芯がある
金メダルたったひとつを許すのか

堺市 石 堂 潤 子

薔薇垣の家です すぐにわかります
手がつぶれそう再会の握手され
本当の味方は多く語らない
人間が嫌いになった事がある
サイダーの泡のようです物忘れ
ベット可のマンションうちは縫いぐるみ

鳥取県 佐 伯 や え

新緑の大山飾りことはいららない
童話の森ハトもツグミもきて歌う
木琴の音色素直な春となる
花は絵に木々のみどりは詩になる
きた道をふりかえりつつまだあるく
呑みましよう唄いましようと花の下

寝屋川市 坂 上 高 栄

寝て食って泣いて笑ってまだ米寿
メス入れぬ体閻魔にひけらかす
年金は三途の川の渡し賃

献血もドナーも賞味期限切れ

呼吸器を外すは医者ジレンマか
性善説曇らぬように経を読む

藤井寺市 太 田 扶美代

人生の節目で一つ旅をする
好きは好きバランスなんか気にしない
やがて春色鉛筆を揃えよう

愛か義理かわからないままチョコレート
このままにして下さいと野のスマイレ
地域デビュー友達百人できるかな

海南市 三 宅 保 州

ご病氣と見えまへんと言う他人
身から出た錆がくすりになりました
ゼニカネじゃねえと啖呵を切りたが
たかが菓子されど葵の御紋入り
仕切り前に立つて出方を確かめる
マジシャンの鳩も強いられダイエツト

池田市 栗 田 久 子

ハクシオンとくしゃみしてもひとりきり
あと出しをしたじゃんけんて負けている
まず酔わな会話のはずまないお方
何をどう変えれば楽になるという
風の向きふつと出逢いを予感する
幸せと気づく枇杷から熟れはじめ

竹原市 石原 淑子

竹原市 森井 菁居

彩雲の儚い奇蹟しかと見た
花嵐天守閣まで桜いろ
千姫の化粧櫓の息づかい
花冷えに春雨桜試される
ふたありの来年誓う花の下

竹原市 岩本 笑子

再スタート学校の門くぐる娘よ
散るための花を自分に置きかえる
路のとう去年はあつた散歩道
ええなあと瀬戸を一日見てあきず
母と娘の電話十分二十分

竹原市 正畑 半覚

私の眼で私を見ることに
私のまが一句になる不思議
川柳の東西南北風が舞う
教科書に載せる一句がまだ出来ぬ
川柳にはまる私にのめり込む

竹原市 時広 一路

掃除機も週に一度で一人居る
包丁が危ながつてゐるだろ一人
コンビニで買う弁当の持つ孤独
労ってあげよ日曜知らぬ靴
一と一足したら今日は三になり

焦げついた金が戻って来るも運
良くほえる内気な犬を飼っている
やぶ蛇になるからあげ足止めておこ
自信持つことからはじめまる仕事運
てきめんの罰へ因果を思い知る

美祿市 安平次 弘道

助走ばかりして決断がまだつかず
問診表書けば余命を覗かれる
よどんでた空気が落ちる落し穴
逆転のドラマ戦後の修羅がある
逆らえぬものがガラスの底にある

宇部市 平田 実男

口だけは歳を取らないので困る
編み棒の先へ子の顔孫の顔
人焙りながら飲んでる縄のれん
きっかけはママゴトだった共白髪
健康のパロメーターに酒の味

熊本市 永田 俊子

にこやかに本音を包む箸袋
過去伏せて女が探す青い鳥
ふり返ったのは整形美人の方でした
性氾濫婦道の言葉も死語になり
やさしい顔してマゲマためている

熊本県 岩切康子

自己紹介それぞれ持病抱えてる
序でにと二三か所寄る道の駅
竹の子を根気よく掘るお手伝い
シートベルト鯨出そうなどで締め(韓国旅行 2句)
置き去りの崩れ石垣見て巡る

唐津市 久保正剣

路地裏でこんな綺麗な花に会い
少子化で川の真ん中ボチかタマ
千秋楽ロシアモンゴル睨み合う
夕風に男波女波のラブソング
二次会に誘ってくれぬベアルック

唐津市 坂本蜂朗

ずーっと友達でいてねと切れた糸
上中下名簿の友を並べ変え
友達の顔で招かぬ客が来る
元氣かと聞かれ飲んでるよと返事
発言をひかえてや々と生き残る

唐津市 宗水笑

ふる里の灯り街より淡く点く
母の味越せない嫁の順送り
物真似で師匠になれる芸の道
性分の安物買いをまた嘆く
特老に笑顔園児の豆しほり

唐津市 市丸晴翠

杖になる介護保険が重くなる
へそくりの辺りを夫片付ける
黄砂止み梅雨明けを待つ紫外線
パソコンもメールも打たぬ太い指
まだ生きる意欲に診察券が増え

唐津市 井上勝視

ジコチュウの多弁世間を狭くする
形見より今欲しいのと嫁の胸
いい出会い老いてますます感謝する
外面の良さに内助が耐えている
手術台思わず拝む神仏

唐津市 山口高明

陰膳で子の息災を祈る母
表具師も俺一代と嘆く老父
大空の神秘を語る大熊座
郭公の声聞く会で森へゆく
名物の駅弁食べて気まま旅

唐津市 樋口輝夫

粋がったあのホリエモンベソを掻き
青竹を割った御仁とおだてられ
太っ腹と言うが勘定やかましい
節々の痛さにヨイシヨドッコイショ
小咄をマクラに入れたいい祝辞

松山市 宮尾 みのり

大洲市 中居 善信

人形のようにいやいや侮れぬ
衣更え祖母もこだわらなくなった
氣象図の通りに空が動きたす
舌の上で本音ころがし飲み込んだ
モノクロで鬼籍の人が生きている

松山市 高橋 宏臣

内緒ごと共有してるまあいい輪
履き癖がついて履きよい靴になり
買いたいが付いてはいない値下げ札
あなたの嘘わたしの嘘で中和する
やさしさを隣の猫は知っている

松山市 古手川 光

満開の桜がおいでおいでする
古木でも命の限り咲くさくら
ふる里自慢川柳みかん野球拳
少子化へ未だ大学は増え続け
一億円あげた側だけ咎められ

西予市 黒田 茂代

森は楽器風が木の葉を掻き鳴らす
手放した株価しばらく気に掛かり
絵ごころは無いけど画廊巡り好き
明け方の森鷲のコンクール
郵便の音に弾んで椅子を立つ

エゴかもね一人よがりのところがある
味のある人だほそほそほそと言う
眉のないお面を妻が持っている
髭を剃る時だけ鏡覗いてる
五七五これは私の叫びだよ

東かがわ市 池内 かおり

葬列は年金貰う顔ばかり
杉花粉春さきがけのファンファーレ
カーナビが教える道でまた迷い
手が離れ不良オヤジになり果てる
歯を抜いた鬼が仏に見えて来る

東かがわ市 原 賢

いい夢の話が笑顔を集めてる
休みなど主婦の辞書には見当たらず
騙された振りもしてみる生きる知恵
歳月に忘れることを教えられ
したたかに生きて日課をこなしてる

東かがわ市 伊勢 八重子

路地裏は少しレトロな匂いする
薬箱今日も安心持ち歩く
許し合う友が孤独を遠ざける
言葉より素直になれるメモが好き
真実の心を計る術も無し

東かがわ市 川崎 ひかり

感激を忘れてしまふ三年目
傷口を見せると他人につつかれる
床柱もはや男のものでない
惚け防止ジュゲムジュゲムを覚えよう
的確な言葉を探す広辞苑

東かがわ市 神保 坊太郎

ご先祖を懐に入れ花の山
ガンバリの仁王に似合う大ジョッキ
目覚めると浄土と思う花の頃
自我を折り曲げて妥協の道さぐる
だんまりに拍手さすが役者だナ

東かがわ市 成重 放任

素人の手品の種が見え隠れ
ほこりほど溜まってほしい諭吉さん
難問に心の牙を研いでゆく
行きずりの人に小さい春を見る
一台の事故数千の車止め

東かがわ市 清川 玲子

めぐる忌にかなしみ新たな花蕾
幼な児も真似してみせるイナバウアー
法医学の鋭い目からとけるナゾ
カミソリの異名にはない人間味
口ポットのような教師は願ひ下げ

高知市 小澤 幸泉

巨木倒る桜静かに散る朝に(同志E氏を悼む 1句)
ガラクタで見つけた父の古茶わん
御守りを大切にしてお疎に生き
生真面目でいつも損する話べた
心音の嬉しいほどによく聞こえ

高知市 小川 てるみ

桜満開一番のりの高知城
軽快に春の音符に乗って見る
咳き込んで高い薬を買わされる
誘い水だろう合鍵置いてある
少し変野鳥が庭に来てくれぬ

高知県 赤川 菊野

鐘の鳴る丘に青春おいてある
春一番吹いて野山が始動する
冬眠の私を急かすパスポート
独り居は年中無休ひまがない
ニイハオと黄砂が春を連れてくる

砂川市 大橋 政良

杖止めてしばし佇むさくら散る
残り火のわずかな余白かき立てる
玄関を開けると歩き出すドラマ
美辞麗句グラスの中に咲いていた
肚黒い笑いを投げる影法師

弘前市 高橋 岳水

春一番北の呪縛を解きに来る

記念樹を仰ぐと霞み出す昭和

身二つになる日待ってるカレンダー

迷ったら初心に帰り四股を踏む

浮き沈み重ね人間味が熟れる

転校五回 予科練で要領得

朝礼の機敏に対処する余裕

親の勧めで受験 合格する医専

授業料は奨学金に助けられ

引き揚げ者の辿り着く運 噛み締める

弘前市 櫻庭 順風

弘前市 宮崎 ヒサ子

漬物樽みな洗い終え春とする

そそわと花見の話題出始める

桜餅食べるとははが顔を出す

二人ぼっちを仕合わせ気分にする苺

陽の長さ感じて日々が楽になる

八時間ゆっくり眠れる幸がある

単一民族これほど嬉しい幸がない

定年を待ってましたと町の役

眩きを聞いてしまった化粧室

売込みの電話昼寝をしておれず

弘前市 須郷 井蛙

弘前市 高瀬 霜石

嘘つくと少しひろがる鼻の穴

胸をなでおろす子供のいない人

定年がきても年金もらえない

反対の人がいるから会議でしょう

お嫁においてインターネットとおやつ付き

疑問符の解けて胸底風になり

補聴器の聞かないことにするはなし

分相応イメチェンをするみだしなみ

ワラビ摘み夕餉のレシピ一つ増え

ザクロジュース医師のすすめたがん予防

弘前市 岡本 花匠

弘前市 福士 慕情

解禁日車を止める場所がない

溪流竿雪踏みしめて行く穴場

ミミズ箱捨てられている釣マナー

雪代の川に鱒の子群れている

雪の舞う川で竿振るバカである

名残りの雪 上野のサクラ北上す

藁さげて庇の裏に孕み鳥

道のべに袴をつけてつくしんぼ

初蝶の白さがよぎる野のひかり

ちゃんちゃんこ野辺の地蔵も衣替え

弘前市 今

愁女

弘前市 相馬 銀波

さいたま市 八田 敏

娘に欲しい服をカードで思い切る

雑草も雑魚も仲間のみちくさに

鳴き砂の旅をと靴は二足にし

間違いが続き耳打ち欲しい亀

ストレスを酒に頼った日が続く

十和田市 阿部 進

喜びをわけあうような子に育て

あの頃のような笑顔をとりもどす

若わかしく生きて行きたい何時までも

茶柱が心にゆとりくれました

年老いて親に似てきた性格好

黒石市 相馬 一花

義理人情などは気にせぬように生き

孫たちに苦労話は伏せておく

焦らずにゆっくり口説く実力派

兎より赤い目をする飲み疲れ

失恋で女見る目が肥えてくる

平川市 小寺 花峯

パソコンに勝てないが真心の筆

青い海記憶に沈む少年期

荒れ狂う海へ潜っている子蟹

花束が雨に泣いてる曲がり角

年賀状取り出している計報欄

景気回復朝刊だんだん重くなる

団地内空地に花を満たす夢

花よりも冬至芽が好き菊作り

まだ散らぬ勿体ないとまた花見

花冷えのお蔭桜を堪能し

さいたま市 星野 育子

偽メール七十五日もう忘れ

世界一不安ばかりの長寿国

英語より敬語やマナー教えたい

七割の平常心を心懸け

尊敬は花の名すぐに言える人

日高市 根岸 方子

満開の桐生の桜師を偲び

夜桜が二人の肩で円舞曲

約束を違え病と気をもませ

去る人を黙って送る愛もある

バス路線またひとつ消す合理主義

佐倉市 岡井 やすお

言いがかりに隠せず立てん日章旗

日の丸は国旗寄せ書きなどすまじ

国語さえ碌に使えぬのに英語

勉強でも世界を目指せ日本の子

イチロー氏に贈ろう国民栄誉賞

東京都 岸野 あやめ

わたくしの心を誰も買いに來ぬ

東京に多いモダンな老婦人

中流の中が下流の上となる

半額の苗も次々蓄持つ

パソコンも知らず老いゆく生命です

東京都 小川 賀世子

桜咲くまだまだ私頑張るよ

百花繚乱しばし酔わせて下さいな

未練かな八重桜まだ咲いている

ポカポカの陽気に弾むスニーカー

絵手紙に凜と椿の息づかい

東京都 清原悦子

一生を解けぬパズルで生きている

風花が舞って始発の駅に立ち

戻らない日々を背負って前を見る

明日への扉となった厚い壁

幸せな陽が膝に差す日向ぼこ

武蔵野市 亀井円女

神さまに欲が無いなとほめられた

八十五なら中の上さと自画自賛

人間よりも犬が好きです内緒です

心は少女よ死ぬまで夢を見たいから

二〇〇六年まだ生きてますお邪魔さん

八王子市 播本充子

春風がピンクに染める心字池

花の下二歳が好きな水たまり

懷に飛び込まれると弱い鬼

金の事ばかり言ってるお金持ち

宿題を出さぬカルチャーだから好き

横浜市 菊地政勝

妻にだけ聞こえるようにひとりごと

勝ち運に恵まれぬまま共白髪

回り寿司妻が感激してくれる

鍵穴の視野で中流意識持つ

伐採の大樹のうめき聞きもらす

横浜市 小野 句多留

貧富の差あれど市民のプチ平和

寝化粧に時たま見せる女っ気

下戸に酒強いて醉えない酒になる

ゆっくりと歩く老いたと見られてる

下馬評は総理は運が強いだけ

静岡県 蘭田 猥 杏

何億の保証御殿でも建つか

潤滑油効かなくなった膝小僧

警告を無視仕方なく逮捕する

先生も汗にじませて始業式

日曜日子供の何故が果てしない

可児市 板山 まみ子

セールスに日变りの嘘ならべたて

一本の桜があれば足る花見

コンビニの弁当買つて行く花見

来世も女が良いと女の輪

開店に先ず行つてみる暇な靴

愛知県 早川 盛夫

早起きをして雑草と根比べ

妻だけが喋つて終る晩ごはん

友情の証見ぬ振り知らぬ振り

山下りる頃に青空見え始め

頬杖をついてこの世は金次第

大津市 中 宗明

人間の聖域犯すロボットだ

刺客テロ平和を乱す嫌な奴

運試し一途にねらう福袋

ホルモンの過剰で悩む肥満体

いきいきと園児悩みのない笑顔

八幡市 結城 君子

少し良いカルテに春の声をだし

満開の桜の下で飲むくすり

女性騎手 馬も夢中で走るだろ

夢のない人だバラまでねぎつて

かくし包丁に知った嫁の愛情よ

京都市 高島 啓子

何ごとも鵜呑み素直な感光紙

主流から離れて投げる紙つぶて

変人と林の道も知つてゐる

網棚に花束忘れるのは男

魚釣り上げても掴めない子ども

亀岡市 井上 森生

若返ろうちよつと真似だけイナバウアー

ボケまいと文字も英語も電子辞書

二百円安いシニアの散髪屋

いく度も神の合図はあつたのに

信念の強さが顎の縁にでる

大阪市 前 たもつ

目標をはるかに仰ぐ薫風忌

目が覚めて今日の日にちを言うてみる

握手して負けたと思う太い指

中途半端な七十代を通過中

芸人ひとり送る吉本なみだ節

大阪市 古今堂 蕉子

思考はプラス体重マイナスが希望

乾燥した心に三粒ビタミン剤

素気ない返事だ聞いてない夫

胸踊る動悸と違う動悸する

ハネムーンはるばる越えてフルムーン

大阪市 川 端 一 歩

正直にバカがついても一直線
充電の効果があつた去年まで
自分にはだんだん甘くエゴの首
酷税の国とは知らず新生児
新聞をじっくり読んでウツになり

大阪市 鶴 田 遠 野

完璧のアリバイを妻信じない
塩漬けの恋はいっぱい持っている
愛だけでいいと女の独り言
命まで賭けてもよいと嘘をつく
中流の意識はあるが発泡酒

大阪市 奥 村 五 月

竜宮は知らぬが宇宙行つて来た
娘の世話にならぬと過疎で母元氣
強い事言えぬ妻には借りがあ
水平線夕日のキッス待っている
老舗には魅力ないのか子は継がぬ

大阪市 神夏磯 典 子

誕生日なんにも欲しい物が無い
食卓でいばっています豌豆まめ
私も猫になりたい大欠伸
核心にそろそろ入りそう黙る
運不運神さまのせい昼寝する

大阪市 板 東 倫 子

花散ればも早菖蒲を待つところ
遺産争い親の情けが仇となる
若者のエゴは叱らず知らぬふり
貧乏も不運も格差のせいにする
気の合うた友とひねもす馬鹿話

大阪市 川久保 睦 子

寒い夜ははずれた唄を湯に聞かす
突然の雨に生まれた恋でした
少子化の校舎に並ぶ古机
バラ一輪もらつて自惚強くなる
とじ蓋のお似合い鍋が先に逝く

大阪市 小 糸 昭 子

啓蟄だそろそろ脳から何か出る
大変だ運命線が消えている
俺ら猫流行なんざ気にしねえ
整形をしても素顔は子に遺伝
女より綺麗に化ける旅役者

大阪市 小 谷 集 一

生き様を見せてよく食べよく眠る
すぐばれる嘘に綺麗な衣を着せ
金借りた方が楽しく飲んでい
マンションという空間に巢を架ける
嫁さんに弱い息子を悔しがり

大阪市 安 達 はじめ

一生の不作と知らず結ぶ神
母さんの涙にみんな押し込まれる
仏彫る母のイメージ抱きながら
つつましく生きて一人の皿洗う
この人も善人らしい下手な嘘

大阪市 清 水 絹 子

早合点いつもの癖に悔いしきり
おめかしの偶のスーツに風邪二十日
蟹の意地わが信念と横歩き
春風もつれて花見の新年度
喜怒哀楽株価ごときに操られ

大阪市 津 守 なぎさ

こうのとりのゲージ出されてひとり立ち
お花見へ不粋な雨と一軒家
満月が古寺に顔出す薪能
子沢山ハラハラさせてみな元氣
ホームラン風も味方をしてくれる

大阪市 津 守 柳 伸

真夜中の風呂ご近所も深夜族
束になる香りで迫るヒヤシンス
べつたりは公園だけにして欲しい
こぼれ種休耕田の花盛り
ひとりの絵描いて淋しさから逃避

大阪市 松 尾 柳 右子

春雷に夢希望などからませて
花満開雨もまた良いカメラアイ
大空に咲き誇る花めげぬ杖
春野菜料理楽しく鍋唄う
カタツムリ見つけましたよ繁華街

大阪市 榎 本 日 出

見栄張って伸ばす背筋が疲れ出す
高齢化遊ぶ時間が増えました
けんかして回りがよく見えてくる
百までは大丈夫かと足に問う
痩せなくていいこれからは若さだけ

大阪市 星 野 きらり

春が来た余生に咲かす花選ぶ
回想は忘れて生きる今日ひと日
梅園の古木に貰う咲く勇氣
鏡拭く心の中も見透かされ
朝の経今日はアルトで恙なし

大阪市 西 川 更 紗

こつてりと絞った税で無駄を買う
自我を沈めて少しずつ丸くなる
正面からスポット浴びるイナバウアー
デイサービス姑いきいきと手を振って
定年がなくても主婦業追われてる

大阪市 町田達子

友との別れがとつても辛い四月です（本間満津子さん亡くなる）

遠くより近くの花見公園へ（城北）

香煙が絶えない堤防の地蔵

たこ焼きが売れてる私も小を買ひ

お愛想を添えるかに咲く雪柳

大阪市 小泉ひさ乃

何の夢見たのか動悸する目覚め

こぼれ種競う事なくひそと咲く

そら豆の皮から抜けられぬニート

くだらない話意外とおもしろい

限界の酸素不足で輪を抜ける

大阪市 津村志華子

たんぽぽの綿毛に乗って来た噂

母の荷が届くと愛が溢れ出る

のどかです風が囁く無人駅

一言の波紋が胸で渦を巻く

神の杜不運の絵馬が雨しとど

大阪市 中村れんげ

招かれて先ずのし袋考える

人生のほころび閉じる釘を打つ

ピンボケが重ねた歳をカバーする

怪しいよ雲行き見てる歳の功

ゆるゆると生きるつもりが超多忙

大阪市 中村叡子

あの人の句が好きどんなお顔やろ

大阪はお好み焼で御飯食べ

東京は御蕎麦處で酒を飲む

デパ地下で好きな豚饅御座候

春雨が雷電を連れ荒れる

大阪市 榎本舞夢

約束を違えぬために手帳見る

天気予報聞いて外出チェックする

トラブルを起し本人知らぬ顔

穏やかな言葉の裏に毒がある

つきを呼ぶ空の青さに祈ってる

大阪市 大川桃花

鉛筆の持主わかる削りあと

年明けに貰い行き場のない暦

税務署に行く時外す光りもの

もぐら叩きみたいに変わる痛いところ

老いたるか少し薄れた羞恥心

大阪市 渡部さと美

銀髪の氣品に遠くまた染める

日本の桜歌聞き酒に酔い

十人十色 芽ぶく緑も個性もつ

大阪場所おとなり声をとばしすぎ

もの忘れ防ぐ反復名前追う

大阪府 川原章久

縄のれんの中にもあった指定席
ごめんねと言えずにそつとにが笑い
生き甲斐はこれから貰う喜寿傘寿
お日さまの通路さえぎるビルが建つ
小さい嘘見舞の客が置いてゆく

大阪府 伊藤博仁

早仕舞い女雛の割を食う男雛
引き続き馴染みの鬼に部屋を貸す
宅配はもなかと決めてまたつまみ
ごみ収集ベントの写真ドイツ旅
いい格好して花冷えて風邪をひき

大阪府 井丸昌紀

いよいよとなるまで立たぬDNA
本物の木かと確かめ痛かった
大あくびして澄ましてる朝の月
偽ダイヤ気後れせずに光ってる
わがままな寒波暦をあざ笑う

大阪府 升成好

特価品あとでやっぱり損と知る
居眠りが佳境に入ると駅に着く
口止めとセットの酒が胃に凭れ
無駄ばかり反省ばかりくり返し
ウォーキングノルマにすれば続かない

大阪府 岡本久峰

海越えてピンタに耐えた星一つ
メガネ外し奥歯を噛んで殴られる
情け無用バンドで殴る古年兵
殴られたおかげで自殺などしない
五臓六腑五感に医者の方鼓判

大阪府 近藤正

食べられる実にも仕掛けの種がある
眼と腰と歯科で半日潰される
ひもじさも耐えて星見る青テント
勿体ない心集める古物商
さようならブラジル蝶の羽に乗り(本間満津子さん追悼句)

大阪府 岩崎公誠

満点に足りない分は知恵搾る
人間はみな雑草という輪廻
新聞に赤ペン入れて今日を終え
艶然と笑いライバル蹴りおとす
ロボットの犬は尻尾に名札下げ

大阪府 福岡末吉

背を丸め抱えてまもる主の座
お叱りか怒りか師の目が応えてる
叱られつ技と気質に酔い痴れる
行く末も講和の翳り心して
諦めと根負け辿る和解金

和泉市 西岡 洛 粹

許す気の妻の背中が丸く揺れ
正直を一途に生きるひとりっ子
居酒屋の隅で負け犬氣勢上げ
泣き笑い七転び八起きの陽が落ちる
不器用な脳にも朝がやって来る

和泉市 横山 捷也

風呂敷が七変化する母の知恵
携帯の電源切って春の道
予定表空欄のまま過ぎた春
足さばき色気残した古希の女
いざこざを越えて何となく夫婦

泉佐野市 山本 蛙城

詐欺電話まだこれほどにお金持
ひよつとこの面は気楽に世を渡り
良い友でいたい返信すぐに出す
都々逸を唸り音痴が見直され
香水を添えて出したい日の封書

茨木市 藤井 正雄

顕微鏡覗けば菌の万華鏡
練りすぎた策で己を見失う
散り際の美学を習う花いかだ
負け犬が覚えておけと吐く啖呵
酵母菌杜氏の歌に浮かれだす

大阪狭山市 矢野 梓

クラス会ばつと桜が咲いてくれ
一瞬に空白埋まるクラス会
歳月が柔和な友に変えている
押しのけて奪った服をもて余し
札束の魔力が全て奪い去り

交野市 山川 日出子

薫風師の似顔絵寂しメモノート
弓道で孫の姿勢を直す祖父
祖母の指物差し代り孫まねる
珍しい二連の虹に大歓声
青い目が日本語乱れ困ってる

交野市 森本 弘風

使い方簡単がよいシニア向け
母の味思い出しつつ釘煮炊く
血圧計可愛いナースに跳び上がる
残された自画像の父若いまま
妻の留守馴染の店のない苦勞

交野市 田岡 九好

妻の靴揃える今日は誕生日
年金で遊んでいるというひるみ
様付けで呼ばれるほどでない私
色と泡見ずに飲んでる缶ビール
大相撲しこなに国旗つけてほし

河内長野市 井上喜醉

河内長野市 水谷正子

浮世にはファンが多いお釈迦さま

機中泊天へ向かつて祈る妻

平成の豊かな香り出す新茶

機嫌よく匂う一輪部屋の隅

健康で達者な足が春に酔い

河内長野市 村上直樹

飽きるほど人間やってまだ小僧

それもよしアンバランスという調和

塗りたくり削り取っては隠す恥

悪知恵が働くうちはまだ元氣

いざや古希もうしがらみは捨てました

河内長野市 山岡富美子

過去燦々花も嵐も越えてきた

平穏な暮しは過去の贈り物

胃の壁にノルマを追った跡がある

騙し絵を追いかけていた後遺症

青い鳥追うとひらりと身をかわず

河内長野市 植村喜代

世の中も進むにつれてややこしい

春の足元雪もそろそろ解ける頃

しょうもない話も出来る友が良い

成程と読ませてもらう他人の句

今満開そしてもう散るさくらかな

王ジャパン大輪の花世界一

イナバウアー今更ながらやってみる

増税に引き落しなる魔術あり

通り抜けテレビ機敷で我慢する

何時までも過去責められる我が祖国

岸和田市 原さよ子

心込め私らしさのプレゼント

励ましの言葉選んで送り出す

童心にかえり兎と戯れる

顔のシミ塗つても消えぬ歳を知る

よそ行きの顔確かめる鏡見る

岸和田市 森元ふみよ

菰脱いだ牡丹の彩が目刺さり

湯煙りの向こうで響く君の声

恋も無し年金暮し超スリム

阿呆らしいテレビ消せず何故観てる

不肖の子絆切れない父母苦悩

岸和田市 土橋房枝

句が生まれ私も生まれ変わる日々

川柳しましょ友達百人出来るかな

生きいきと川柳詠んで自己磨く

川柳がほんのりしてる友が好き

ブルーな日ブルーな川柳詠みました

岸和田市 井伊東吉

親知らず遂に観念抜くを決め

善意だと思ふ心にある驕り

球春に新監督の泣き笑い

始まった水茄子漬の予約取り

筋肉の衰え告げる大腿骨

岸和田市 岩佐ダン吉

俗受けをねらい俯くことになる

六十年今日も富士山撃たれてる

ばたばたと母さん走る皆走る

対案も出さず文句をひとくさり

馬鹿丁寧な言葉の裏を読んでいる

岸和田市 林力子

トンネルを抜けて活気の出た職場

ご無沙汰を詫びて何う里の友

参拝の拍手を聞く絵馬の群れ

願ひ事多くて絵馬もつかれざみ

半分ずつ仲良く濡れて夫婦傘

岸和田市 雪本珠子

散歩道春をみつけたボチと僕

花見時街の灯りもさんざめく

シヨウウインドーお洒落心をかき立てる

欠点を魅力に変えた生さる知恵

親切の裏に魂胆あるらしい

堺市 志田千代

屈辱の顔で受けてる銀メダル

一線を越えた親しくなりすぎた

言わぬが花鮮やかに切り返される

隣よりお向かいさんへ橋がある

スラスラと言えない九九の七の段

堺市 近藤豊子

いつまでも焼け跡うかぶ森の宮

梅の園アパッチ族のでたあたり

しだれ梅あかいたもとへ触れぬよう

梅の實の写真あおお植木市

あおいままふくらんでゆくチューリップ

堺市 西村りつえ

開店に目玉品だけ手を延ばす

さくらさくら想定外の計が続き

微温湯に慣れて奏でる母子笛

奇行癖のらりくらりと風を待ち

雨ごとにパワーを見せた木の芽和え

堺市 柿花和夫

ちよつとだけ騒がしてみた老いの恋

遺言をそろそろ書けと足が言う

粉飾はしないと決めた自分史だ

不意に來てそそくさ帰る男親

楽しみは寄り道にある月参り

堺市山本半銭

あの仕種鳥獸戯画を見るような影が出て親の光を気付かされ脳細胞の崩れる音を聞くような無機質な部屋暦だけ移ろうて墓まいり烏ゆつくり従いて来る

堺市國見蘭香

吹き出した芽を育てんと今朝も雨ドーナツの穴から覗くキスシーン知っていて知らんぷりする難しき新人生いまはズボンが落ちてない新人は手怖い相手と睨んでる

堺市齋藤さくら

葉桜になっても誘いまだ来ない安かった服の自慢をしてはしやぎ雨おんな外出したら降り出したヨン様を金持ちにした美女の群れ外出に五分で化粧済ませてる

堺市加島由一

知恵熱のようだと年次休暇とる妻はまだはいと返事をするこゝも虎になる手前でそつと席を立つ蛭狩りまだくちびるが奪えない母さんの着物が増えるお入学

堺市矢倉五月

童顔の同級生が外科部長感染をしたいあなたのその笑顔言葉揺れ心の揺れを見透かされ動物も花も数えている曆思いやり思いがけない人がくれ

堺市奥時雄

激震は想定外の家に住む会釈して幼馴染が嫁ぎ行く目の玉をたまに涙で洗つてる仕方なく友と疎遠になつてゆく争いの火種のこしてドンは逝き

堺市源田八千代

桜散りピンクの歩道雨無情絵文字入り楽しい孫のEメール新緑と薨の似合う鯉のぼり雑草と根っこはびこる芝生剥ぐ功名が辻反省猿で見えています

堺市村上玄也

五十年飾つて偽と知った壺罪意識ふつと感じる昼の酒自信なく手を上げている日和見者広辞苑に淑女はあつて熟女なし酔い回るまでに何度も念押され

堺市 神原 文

鶯の笹鳴き庭の木が踊る
ライラック愛の芽生えを持つて来る
いざ野球弾む心を隠しえず
風光るきんきらさんの服を買う
中年はまだ若いんだ赤は着ぬ

四條畷市 吉岡 修

書いててもご利益のないお経だな
その時はその時とまた飲んでいる
大国がまた難問を出す予感
仏様指先の丸あれですか
知らぬ間に妻の筆筒が増えている

吹田市 太田 昭

駄菓子屋のいっぱいあつた良き時代
生きている証しに今朝も蹴躓く
七癖も五つに減つて丸く古い
美辞麗句並べる舌も纏れだす
反省を阻む中央分離帯

吹田市 野下 之男

ワシントン風を起せばなびく葦
返り討ち泣く子も黙る永田町
金メダル汗と涙を忘れない
春眠に可愛がられて遅刻する
千切れ雲遙かな友を呼んでいる

吹田市 瀬戸 まさよ

咲くときは一二の三で咲く桜
春爛漫頭の中で旅をする
仏壇の父母も百歳越えました
私が見せたくはない棺の顔
老化には何事もメモそれがい

吹田市 穴吹 尚士

お互いにばやきながらも共白髪
手が触れただけで痴漢を見る目なり
釈明をすればするほどボロが出る
人類の驕りを神は許すまい
お見舞は万病に効く金にする

吹田市 早川 棲世

変わる世をしのぐにしまつしか知らず
無駄なこと言う能がなく世におくれ
絶叫が聞こえそうなる踊り食い
テレビつけひとりの部屋を温うする
医学書の目次ほど病みまだ老いず

吹田市 山本 希久子

六月の唄雨雲を吹きとばす
ひとりより二人浜の夜景に溶けこもう
命育くむ血縁地縁からませて
コーヒー豆熟女が午後を熱くする
六月のバラと未来の話など

吹田市 大谷 篤子

なんぼでも泣いて女は頑張れる
子の心絆強める図書カード
タイミング悪く虫歯が痛み出す
むなしさに鍋の豆腐もつかみかね
ふわふわの布団お日様添寝する

吹田市 木下 敏子

髪染めて春の空気を吸いに行く
こち良い酒汲み交わす花の下
足のため瘦せたらいいと軽く言い
引き摺って前へ前へと向かう足
大腸の中覗かれているのち

吹田市 須磨 活恵

阿弥陀仏おわすが如く座禪草
自己主張負けず嫌いの肩パッド
焦っては自分自身を見失う
ちよつといひ話を聞いたうまいお茶
優しさは強さと勇氣だと思ふ

高槻市 富田 美義

浮き沈みあつて人生おもしろい
ピンとキリ俺の生き方どつちかな
嫁ぐ娘へ何時もの知恵と違う母
前向きに暮すとやはり金がある
返す当て無いが借りある妻の愛

高槻市 生田 義一

何気ない一語ににじむ人情味
ガセネタを信じ自ら墓穴掘り
大相撲モンゴル場所を見てるよう
世界一列島歓喜の大嵐
忘れずにやつと咲いたね庭のボケ

高槻市 井上 照子

地図広げ豪華な船の旅は夢
リーダーは博い知識が欲しいもの
皺 白髪元気な声の合唱団
作法など疾うに忘れて茶会席
餌食べて逃げずに雀いておくれ

高槻市 西谷 治三郎

定年後こんなはずではなかったに
ベランダで吸う一服の幸福感
総入歯欠伸するのに気を遣い
三千歩あるいた帰りに湿布買う
栄養剤あれこれ梯子して肥満

高槻市 執行 稲子

にぎにぎをしてベビーの反応見るお婆
信じ合う友と醍醐味ふぐ茶漬
出不精の雨上がっても腰浮かず
親ごころ蘇るのも里の味
有り余るお菜に想う芋の蔓

高槻市 佐 甲 昭 二

幾山河越え鮮やかに幕を引く
それだけの男とわかり諦める
母さんの十八番がはずむ仕舞い風呂
窓際の机は主がよく替る
相談に呼ばれて愚痴を背負い込む

高槻市 左右田 泰 雄

父の日は母の日ほどに騒がれず
やわらかい春の和みを運ぶ風
散りぎわの桜が似合う会者定離
電線に並ぶ燕の四分音符
ペランダの布団新婚さんらしい

高槻市 乙 倉 武 史

歳月は虚し恩師の一周忌
出る杭は打たれ傷つくのが掟
ライブドア教訓遺し株消える
肩の力抜けば何でもないこの世
死語増えて日本情緒が減ってゆく

高槻市 指 宿 千枝子

ゆつくりと古希の坂ゆく春帽子
のぞみに乗る夢は捨てないおばあちゃん
よくゆるむ頭の捻子を今日も巻き
磨汁をミルクですよと花に言う
春の夢小さい庭に咲き溢れ

高槻市 傍 島 克 治

呑み仲間ドクターストップひとり酒
老いらくの恋には戀の字が似合う
つく度に昔飛び出す紙風船
CMにすぐ反応の妻がいる
何気ない素振りのなかに見る好意

豊中市 水 野 黒 兎

父白寿母は卒寿の八重に咲く
やわらかな雨をうらまず散るさくら
人間の記憶さくらが散るように
黄砂には負けはしないと飛ぶ花粉
四つ角を曲ると風が新しい

豊中市 藤 井 則 彦

安らぎを覚えるたまのお留守番
人の名を思い出せずにアイウエオ
独り言とは分からずに受け答え
覚え書仕舞った場所が分からない
エンディングノートに書いてから元氣

豊中市 吉 田 あずき

花だより解かねばならぬ懷手
春の陽が当たれば溶けてゆく邪心
パンフレット見ているだけで旅疲れ
ブーム去りまた残骸になつてゆく
閻魔でも騙されそうな手口なり

豊中市 安藤 寿美子

富田林市 池 森子

一日をありがたく生き夜の雨
写経して心清しい朝となる
独り居はいいな読もうと唄おうと
老いてから心配事を心配せず
貧乏な私にキモノ買えと言う

豊中市 江見 清

アメリカも日本も国技乗つとられ
ハミングし好きなお方とアンダンテ
競争を終えた男は優しすぎ
新しい自分探しの迷い道
奥床しい方といわれて喋れない

豊中市 山門 タミ

梅桜変奏曲におどらされ
幽玄のしだれ桜に見られます
おしゃれしてシダレ桜に逢いに來た
夢を呼ぶ桜並木の蕾たち
その道の達人の顔神々し

豊中市 岸田 知香子

北は雪 南満開長い国
子の自立大賛成し夢画く
移る季の三寒四温持て余す
うらかな春に向かうが動けぬ身
病癒え余生にかける八十七

胸襟を開いて春を待ち伏せる
わたくしも春の花びらそして蝶
反論も出来ずに微笑だけ返す
輝いてみたい女の第二章
条件が揃い過ぎてるのが死角

富田林市 片岡 智恵子

狂うかも知れない手紙書いている
ふところの深い男の胸の疵
無駄と無駄の間にみえてきた誠
クラス会仕切る男の丸い鼻
郵便受け何も届かず日が暮れる

富田林市 中井 アキ

淋しくて携帯弄る事が増え
何くわぬ顔で十葉が芽吹く
古稀の春迷いは深くなるばかり
プライドを擽る声に負けている
どこまでも一緒とたわいない帽子

富田林市 大橋 鐘造

正論を吐けば冷たい風が吹く
儂なさは夢が叶ったそのあとに
一線を守り友情つつがない
夢一つ抱いて走って來た命
甘言で腹の底まで狙われる

羽曳野市 安芸田 泰子

主婦業を天職として割烹着

同情を踏台にして立ち上がる

身の丈の暮らしに慣れた市場籠

人間のエゴで育てる鉢の松

薔薇咲いて老人の家かがやけり

羽曳野市 三好 専平

みなさんのおかげとお世辞忘れない

まけてんかという楽しみのない売り場

パソコンもケイタイもない良い暮らし

死ぬ覚悟できていますと酒を飲み

善人と信じているからやりにくい

羽曳野市 酒井 一壺

蹴られたり踏んだりされてつく度胸

刻んでもまだ許せない憎い奴

再会へ余韻にひたる帰り道

帰らないよりはましだと午前五時

和解するチャンスくれた児の寝顔

羽曳野市 吉川 寿美

着飾った声でライバルから電話

アドリブがひとり歩きで困らせる

生き方は定規をあてたような夫

女とはレタスキヤベツを山盛りに

終点は間近悟りにほど遠く

羽曳野市 徳山 みつこ

爽やかに命をうたうホーホケキヨ

せせらぎにストレス流すスニーカー

年のせいですと自分に甘くする

なにそれエーッなんぞが増えていく不安

不戦ならこそその寿命は世界一

阪南市 森村 美花

ベゴニアの一鉢部屋が和んでる

風の色今日は優しい春連れて

気のおけぬ仲間と流す汗が好き

年一度姉妹が集う墓参り

日本の医療危なくなっている

東大阪市 笠井 欣子

瘦せたかと計ればいまだ3L

テレカ持ちあちこち探す青電話

愛子様パパもお付きの御入園

五人部屋千羽鶴にもある遠慮

教師辞め念願叶いたこやき屋

東大阪市 佐々木 満作

リフォームで新婚気分春ウララ

花粉症私も遂に仲間入り

鳴りひびく櫓太鼓や大銀杏

ローカル線途中下車して花の旅

借金がないのに首が回らない

東大阪市 西村 哲夫

こちらの迷いご先祖様は迷わない

招かれて来たわけで無い恋心

香水の間に匂う恋敵

車椅子押すもの同士笑み交わし

雄叫びは用事がすんでからにする

東大阪市 中岡 妙

チューリップ風と素直に握手する

聞き流すことにしましたあれやこれ

輪にとけたジョークで人と人つなが

物忘れ増えたへそくりどうしよう

独り言増えて飼ひ猫耳立てる

東大阪市 米田 水昇

君が代を歌えば過去が息を吹く

新曲を歌って若さと戻す

曇っても晴れてくるから楽しいの

抽象展ふわり宇宙にいるような

細路地を抜けて通った恋の道

東大阪市 北村 賢子

安楽死命奪った訳じゃない

金欠になったらひょいとやって来る

点在する島にそれぞれある暮らし

ああ余生好きなことだけして生きる

お互いに先に逝くと言う姉妹

東大阪市 安永 春

タイミングよいしよこらしよと嫁姑

お世辞上手出世頭になる部長

ホテルにも定食があり椅子の順

子の夢を風に吹いてくしゃボン玉

囃し立てネタにされてる飲み仲間

枚方市 伊達 郁夫

冬眠の目覚めにだるい春の鬱

スランプと自覚してから長い闇

裏道を知らない靴に泥がない

風邪の床息子が炊いた粥の味

仏壇にお供えをする愚痴の山

枚方市 海老池 洋

春風にしゃきしゃきしだす古時計

きつちりの日時にゴミの収集車

どれがどのカードと探すほどカード

打出の小槌でないとカードに言い聞かす

初対面どちらにも少し買いかぶり

枚方市 丹後屋 肇

朝刊に溜め息が出る負けゲーム

スバルタに慌てる教育委員会

古池をソメイヨシノが敷き詰める

擦れ違い夫婦にかさむケイタイ料

週刊誌頭に乗せる俄雨

枚方市 森 本 節 子

一斉に花ニラ咲いて春登場
カロリーが多そう半分明日に分け
花の下八十路を越した老姉妹
昔がたりあの人この人みんな逝き
鏡の中欲目に見ても年は年

枚方市 安 達 忠 央

あの人の嘘にやさしさ覚えます
ものごしにそこはかとなき優しさよ
おこしやす愛想のよさに引つ張られ
無菌室そだち危ないぞ危ないぞ
納豆菌に拍手送ろうではないか

枚方市 二 宮 山 久

再職の日々もだんだんなれてくる
桜満開カラオケ仲間コップ酒
ライバルがどこにもいてる職つとめ
幸せは妻の元気がすきいです
四国路の旅を始めたバスツアー

枚方市 寺 川 弘 一

腹一杯を夢見てファイトつないだ日
恋泥棒ならば根こそぎ差し上げる
時間とは命の長さ計るため
ストレスを道連れ気ままに一人旅
自分史は手漉きの白紙用意する

枚方市 宮 川 珠 笑

ツアアウト満塁ベンチはガムを噛む
金婚が一族の旅費負担する
メロドラマ老妻快いびき
宅配にサインで好いと急かされる
医者がもうあかん言うたら飲ましたろ

藤井寺市 高 田 美代子

深呼吸さて後編へどう繋ぐ
日記帳腹立つことも書いておく
迷うことないのに友の苦勞性
酔眼朦朧乙姫さまに見える妻
いい風を待つてわたしの帆を上げる

藤井寺市 楠 昭 子

影だけは裏切らないと信じてる
冗談のように本音を吐いて見る
気心が知れて弾んでくるジョーク
家中の笑い聞こえる子供の絵
我が家でも少し豊かになったゴミ

藤井寺市 若 松 雅 枝

亡夫宛にまだ沢山の手紙来る
生きるぞと干し場なおしてくれたのに
一駅を歩いて今日の活貰う
夜更かしを叱ってくれる人も無く
化粧して待っていたのに誰も来ぬ

藤井寺市 鈴木 いさお

年金暮し三食足りて良しとする
飽食を極めた果てのインスリン
出戻った娘可愛いおまけ付き
老いたかな朝の目覚めが早過ぎる
こんなにも主婦の仕事があつたとは

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

この服も着てあげないと可哀相
近道も遠回りにも桜の木
黴菌を流す四十度のシャワー
今日だけはわたしに鈴を付けないで
好きだから上手に炊けた豆ごはん

藤井寺市 中島 志洋

忘れたい事を覚えてゐる小指
反論が出来ず弱気な目をそらす
金婚の妻に贈ろう我慢賞
成程と頷いて聞く年の功
任せたと云つてあれこれ口を出す

寝屋川市 平松 かすみ

ポケ封じポックリ寺へバスの旅
お賽銭はずみポックリ頼み込み
又兵衛の桜みてます向こう土手
バスツアーなのに歩いた九千歩
物干しで晴れたら踊るベアルック

寝屋川市 森 茜

卒業写真未来見つめてゐる瞳
合格の知らせしばらくは腑抜けに
目覚しをなぎ倒しても眠つてゐる
野良猫も持つてゐるお気に入りの場所
窓の灯のひとつひとつの泣き笑い

寝屋川市 富山 ルイ子

悪態を肚に納めて輪を抜ける
先のこと何も約束できません
そろそろとへそくり出番来たようだ
宝ものの心にそつとしのばせる
春の陽にエンドウの花真つ盛り

寝屋川市 太田 とし子

諭吉さんの皺で切符が買えませぬ
設計は出来ても建てる金が無い
愛一途島を跨いだ鯉のぼり
残飯を食つて元気に生き残り
城跡のさくら現世をふくらます

寝屋川市 籠島 恵子

散り初めてさくらはホツとするのかも
雨かぜに耐えた桜が散つてゆく
夫には聞かぬと決めた草木の名
睡眠は二の次明日もあさつても
妹がうるさくなつた春の鬱

箕面市 出口 セツ子

長男がバエリア作つてくれる風邪
熱の妻にうどん作れと言う夫
病氣した時優しさが身に染みる
人生の至福優しい子が二人
魂の休養もする風邪休み

守口市 井上 桂 作

不足なき老いと思えどふとわびし
自己責任無に至るまで人の世は
大観の童子は無心歳とらず
桜散る花びらうけて通り抜け
すねられたいとしの孫も高校へ

八尾市 長谷川 春 蘭

葉桜やベンチ一つの山の駅
一杯の煎茶に癒やす花疲れ
五階まで落花届けてくれし風
暮れ初めていよいよ白し夕桜
笑う時口かくすくせ春シヨール

八尾市 吉村 一 風

ささやかなゆとり晩酌出来る幸
感謝しながら飲ましてもらう酒うまし
死の重さ生きる重さも知る八十路
他人だからついつい話すこともある
前向きに生きて笑いを忘れない

八尾市 村上 ミツ子

咲きだした桜後悔する寒さ
桜びつくり仰天突然の雷雨
もう誰も祝ってくれぬ誕生日
脈ないとわかつてよけいもえあがる
正座してあなたの嘘を聞いている

八尾市 高杉 千 歩

黄砂舞うさくら満開人に酔い
よく伸びる爪切った日をマル印
正解が出るまでトイレ我慢する
私流思想で新聞読み耽ける
要するに相手が欲しい老いの耳

八尾市 山本 宏 至

洗濯に晴れ間が待てぬ子沢山
こだわって嫁を泣かせることになる
後悔を治す薬が高くつき
白い歯を見せて笑うからだまされる
正面から向かう男の潔さ

八尾市 宮崎 シマ子

大皿に見事な嘘が盛ってある
お団子に犬サルキジが寄ってくる
夢の続きみたくて安定剤をのむ
招いたら招かぬ客も連れてくる
猫ふんじやった朝の忙しいときに

八尾市 生嶋 ますみ

貼りぐすり痛い背中へ手がのびぬ
愛らしいばあちゃんなんてとても無理
うっかりと言ったこの口悔やまれる
独り居は気楽だけれどややこしい
答えたくないのに根掘り葉掘り聞く

大阪府 澤田 和重

生かされて地球の隅にへばりつく
大変だ勝ち気な母が泣いている
ずばりより皮肉のほうが堪えます
階段の一步へ老いは身構える
網棚で予報はずれの傘眠る

大阪府 初山 隆盛

念入りに髭剃りをしてゆく花見
花の下自転車でゆく老夜警
雪柳春の絵になり詩になり
日日好日酒が伴走してくれる
しなやかな柳に学ぶ処世術

大阪府 前田 ゆい

孫たちと幸せ刻む富士の山
朝霧のたちこめ富士は姿消す
健やかに再度訪ねん富士の峰
久米田池今柳友と立つ不思議
六十年目久米田の池で観るさくら

大阪府 野田 栄呼

増える皺生きた証といとおしむ
目立たぬよう髪で隠してイヤリング
歳重ね丸くなるのは体だけ
目で見ることが見てないから忘れ
成長期たのしい孫二十皿

大阪府 桑田 ゆきの

春風に湿気欲しがる老いの肌
花粉症国民病になって来た
お開きは同期の桜花の下
脳トレを律義にしている指にたこ
風見鶏黄砂花粉にまみれおり

神戸市 山口 光久

まごころが固い扉を開かせる
自分との約束守るのが大事
子ができて徐徐に広がる守備範囲
出直しは過去の染み抜き終えてから
タイムカード僕の自由を取り上げる

神戸市 木村 貴代子

五十年縫って生きた師の言葉
うっかりと生きた一日悔いて寝る
花活けて花に救われ一人居る
代金を払い品物おいて出る
テレビもう見たくもないとDVD

神戸市 山口 美穂

濡れ落葉花びらとても同じよう
今年またあなたに会えた通り抜け
交友関係までも知ってるうちの犬
思ったことが出来ないままに今日も暮れ
赤を着ているのに座席譲られて

神戸市 田中 章子

逝ってから父が身近に感じられ
逆転もある人生をあきらめぬ
ほけたふりちよつと楽しむ歳になり
ニッポンの春だ桜とにらめっこ
葉よりよく効く君の笑い顔

神戸市 山田 婦美子

春なのに冬の衣裳がまだ脱げぬ
菜の花の便りに香りついて春
釘煮した匂いとれない割烹着
鍋の中いかなごの目に睨まれる
前世が見えたら生きておられない

神戸市 伊勢田 毅

志望校一途三浪サクラサク
シニアゴルフ技より口で勝負する
癖見抜きアメリカじわり攻めてくる
登下校保護者が囲む世の乱れ
火に油女上手に飛ばすデマ

相生市 中塚 礎石

蟻の列冬は何しているのかな
時代劇見ても涙を出す八十路
爪の色変えて人生切り替える
ジープの穴の不思議をじつと見る
回り道だからついに見て回る

芦屋市 黒田 能子

回るだけ回れば噂消えていく
ほんやりと見えるレンズも時によい
ほんのりの記憶の中の母となる
うっかりが同じ親しみ湧いてくる
おしゃべりのバランスとついている無口

尼崎市 春城 年代

手さぐりで来た人生の幸せ度
列島の桜だよりに包まれる
ふるさとの京の都の花盛り
笑いじわ歳に負けない花咲かす
エイプリルフル騙された振りしてあげる

尼崎市 春城 武庫坊

日本中喝采埋めた王ジャパン
老寿なお故郷の山に思慕をよせ
老化の日々余生これから気が抜けず
体調が狂うとすぐに怠け癖
校門の桜に向かうランドセル

尼崎市 軸丸勝巳

風邪をひくまだ阿呆ではないと知る

八十路坂たかが風邪とは言えぬ坂

お花見の弁当もらう風邪の床

景氣回復まだ届かない花の下

日本海やがて埋まらん黄砂くる

尼崎市 長浜美籠

南無大師白木蓮が一つ咲く

反抗も行きつく先は神仏

本当の愛は明かさぬドアのノブ

一日を感謝で閉じるひとりの灯

コンセプト通りにいかぬのも浮き世

尼崎市 林昭三

袋小路に気心知れた乙な店

飲んでいる後で薬も飲んでいる

鮎の骨私の骨も抜かれそう

重箱の隅に特種潜んでる

新入社担いでくれよこの日本

尼崎市 松下比ろ志

場所取りのロープが邪魔な花の浪

風光る春と向き合う花時計

ジীবンの穴から青春零れてる

身から出た錆に自由を縛られる

どちらにも転べるように氣を配る

尼崎市 田辺鹿太

皆が皆しあわせそうな花の下

八十を過ぎてても切れぬ赤い糸

逆境を竹のしなりで跳ね返す

占いに自分の弱ささらけ出す

ほっとけばニートも生きる術を知る

伊丹市 山崎君子

梅開花松に向き合う一つの絵

白い月花の目覚めを待っている

黄砂予報花もダンゴも氣になつて

王さんの涙の万歳世界一

握手握手嬉しい涙の小沢さん

川西市 西内朋月

路のとう天婦羅にして春を食べ

赤丸を付けて忘れてる暦

日の丸で送った駅は覚えてる

ウィルスを運ぶと知らぬ渡り鳥

真夜中に酒の肴を探してる

川西市 米原雪子

接戦の球児の粘り称えたい

スポーツのチャンネル選び忙しい

ひびき合う心の笑顔食事会

拾われて初めて氣付く落し物

ライバルと並ぶスタート入社式

三田市 堀 正和

誠意とは金のことだと念を押す
アホなこと言うてとジャブを外される
解説者まで気に入らぬ負け試合
赤恥の跡が染みてるパスポート
持っているところだけ見る株価欄

三田市 石原 歳子

屑籠をひっくり返しメモ探す
初夏の風センスアップにデパートへ
食間のくすり時どき飲み忘れ
ニレの樹の新芽の艶は輪島塗り
無料パス使いはじめはお医者まで

三田市 久保田 千代

浮世絵のたもとに絡む春の風
一瞬の春爛漫を捕まえる
春眠に時計の音の煩わし
双方を立てて納めるヤジロベ
青春の自画像に吐くひとり言

三田市 北野 哲男

孫が来る大きな鍋を洗つとく
老犬の上目づかいは嫌な顔
どのペアも女が弾むフルムーン
朝寝して二食ですます贅もあり
口でなら応戦するが手足無理

西宮市 坪井 孝一

人生には和の一字がよく馴染む
逆らった握り拳に残る悔い
天職を少し逸れたが詮もない
頑固だけはとても勝てないおやじの背
父の料理褒められ哀し割烹着

西宮市 緒方 美津子

納豆菌もてはやされてパリにまで
美しさ保つ手立てに棘を持つ
歯ざしりを子守唄にする歲月
遠耳のつば心得たい笑い
忘れてほしい事覚えてる夫

西宮市 井上 松煙

医術より話術で受けている名医
薬にも毒にも菌と縁切れず
暗誦できまつせ皇紀でも寿限無でも
黴菌も生生流転死滅せず
百ワットの下でうたた寝する若さ

西宮市 片山 忠

長所はと聞かれ答が出てこない
言い訳の出来ないミスが目立ちだす
謝れば不利だと頑と突っぱねる
あら探しだけで溜飲下げている
貧しさが負の出発点だと悟る

西宮市 秋元 てる

ピカピカの一年生に父母祖父母
病む子への祈り水やる花の鉢
貴方だれ老母を見舞えば訝かれ
六十年互いに気まま許し合う
胸底にふるさとカード秘めて生き

西宮市 菊池 トミエ

ひな祭り近所の子等も揃つて
ひなあられ菱餅重ね皆楽し
あこがれは南の国で住む予定
卒業式バラの花束戴いて
春彼岸墓参を兼ねて花見する

西宮市 亀岡 哲子

仏の座ほろほろ咲きぬ父母の墓
新聞をまとめ読みする春うらら
瀬戸浦に友あり四季の海の幸
一つ病み一つ皮剥け春が来る
サブリメント五七五が効いている

西宮市 牧 潤 富喜子

荒々と雨戸をたたく春しぶき
変らねばもう間に合わぬさくら咲く
うっかりと派手な帽子を春に買う
風邪をひく暇がないなと勇ましい
信号待ちへうなぎのけむり容赦ない

西宮市 門谷 たず子

グアムの海あくまで澄んで孫の婚
美しく愛実らせていまKISS
一シーン小さなチャペルの花吹雪
新婚の部屋ガーベラもはにかんで
まな裏のさくら並木に会いにゆく

西宮市 山本 義子

席を譲られ素直に礼の言える歳
守備範囲狭くなったがいい皆
歳相応動いたあとのひとり風呂呂
熱帯魚やつぱりボクは吠えられぬ
若葉風いっぱい浴びる幸がある

姫路市 古川 奮 水

白酒を舐めて酒豪の仲間入り
春雷の喝に伸びてる庭の草
顔合わす仮病同士が通り抜け
剪定の鋏が初夏に歌いだす
縁先でナイターを観る今日の無事

兵庫県 大谷 幸次郎

栄転も左遷も並べ送別会
人生の始まり告げる呱呱の声
若布刈り明日解禁の鎌を研ぐ
等圧線混めばざわざわ波騒ぐ
救急車去りざわざわも散ってゆく

奈良市 米田恭昌

熟年離婚決めかねている打算

ババママに決めてもらった受験校

三浪のきばり鉢巻締め直す

お花見の洒落にもならぬ木枯しよ(歩く会)

老男女連れもて迷っていた夜道(夜桜見物)

奈良市 天正千梢

深呼吸めつばう涙もろくなり

幸せの原点なりき海苔茶漬

しょうこりもなく木に竹を接いでいる

青い鳥に囲まれていた楽天家

芸みがく男こやしにしています

生駒市 飛永ふりこ

成し遂げた安堵脱臼虫食まれ

いきすぎた親切ふつと身構える

善人への演技見破る紅辛夷

真つ新な夢を名札に一年生

入学式親子の頬つべ桜色

橿原市 安土理恵

失くしたところ思い当たりのあるピアス

後悔は化粧落してじわじわと

涙涸れたら消えるだろうか泣きぼくろ

いざという時わたしの入る穴がない

雨だれが凹みをつくる胸の底

大和郡山市 坊農柳弘

正論を吐けば疑惑に突き当たる

言い訳は止そう負けたんだから僕

もう何も引かぬ足ささない粗衣粗食

紫陽花の含み笑いにある誘い

カーテンはスカイブルーの風通し

奈良県 渡辺富子

エネルギー全開朝の目玉焼

徴はえたコントを吊す梅雨晴れ間

体制にかみつくコラムからやる気

認知症の母につこりとわらべ唄

ゆつたりと流れに任せているいのち

和歌山市 桜井千秀

たぶん貴方も俄か詩人の花の下

矛盾だらけも納得しつつ生きている

鉢植えの野菜一人のお味噌汁

二階で花見庭のさくらは今盛り

先々を読んで気苦労背負い込む

和歌山市 木本朱夏

微笑みの大地アンズの花盛り(美しのスペイン)

街角の黄色いポストから旅情

フラメンコの靴の先から散る火花

中世ヘタタイムスリッパする坂だ

落書もさすがピカソを生んだ国

和歌山市 田 中 み ね

几帳面も君ほどほどにほどほどに
他人のこと言った矢先の誤字脱字

呆けたかと聞けば領く影法師

保険金もとは取ったよ転び癖

皇室典範のように気になる秋半ば

和歌山市 松 原 寿 子

魔法の笛が胸を満たして蒼く風く

いつもの席で偲び珈琲飲んでいる

ラブレター指紋いとしく胸に抱く

風紋に惹かれ砂丘へ足が向く

雨斜めぼっかりあいた胸に降る

和歌山市 宮 本 三喜夫

和の力さが最後に実を結ぶ

よく耐えた王ジャパンが世界一

肩すかしメール説明落ち着かぬ

議員さん国会権威落ちました

国会も頼りないこと暴露する

和歌山市 武 本 碧

平凡な世界が似合う井の蛙

お茶代りなどと陽気な左党

玄関にさりげなく置く鬼の首

留袖の黒へ華やぐ女紋

らしくないことをするから蹴躓く

和歌山市 玉 置 当 代

ワンセグへ事故起こさねばと願うのみ
うどんにもまたそれなりの自負がある

九十七歳母は昔のはなしする

逝った娘の歳数えまます誕生日

涙そうそうまだ唄えない三回忌

和歌山市 福 本 英 子

苦勞など遠い昔と貫禄で

丘よりも大きい高原だから好き

机上論なんでも一人歩きする

メンバーが揃うと黙ってて決まる

雑草ひきは何といっても五人組

和歌山市 松 尾 和 香

写経筆洗う安らぎ春彼岸

ヘルシーに悠々自適七合目

旬を盛る嫁の献立食べる幸

生き方を陽気に変えた趣味の道

花の下今年も飲んでリフレッシュ

和歌山市 楠 見 章 子

ゲジゲジの眉をうまーく整えて

ゴトゴトと洗濯機まですねてくる

花咲いて悩みひとつがとれました

笑いすぎつかれた午後のチューリップ

しサイズ一度普通を当ててみる

和歌山市 細川 稚代

凱旋の子等へ拍手のありつたけ
街路樹が萌えて多年の恋みのる
誰にでも愛想いい犬飼ってます
亡き人を偲んで歩く法善寺
ケータイが飾り物かと笑われる（いつも充電台）

和歌山市 堀畑 靖子

年齢を言訳にして身をかわす
句読点打ち春だものリフレッシュ
ウンコラシヨ重たい過去を整理する
ヤットコサ古い常識脱ぎすてる
被写体はお古カメラはピッカピカ

和歌山市 喜田 准一

リハ―サルなどは要らぬという自信
雨降っている中金を出しに行く
マイペースばかり強調するでない
ひと押しの出来ぬ弱さを持っている
上品に食べると旨くないのです

和歌山市 山口 三千子

鉢花に水やり毛虫退治する
介護保険上がり年金また下がり
夕暮れになれば見上げる涙そうそう
春雷に冬のなごりか電が降る
突然の訃報昨日会った友

和歌山市 榎原 公子

男女平等夫が叫びだしました
認めたくないが疲れが倍になる
負けるが勝ち友と慰めあっている
痛いとか切った話は遠慮する
箱はまだか周りが姦しい

和歌山市 古久保 和子

トーフ一丁ネギの一把も買えぬ街
大きくて深い器がよく響く
ばあちゃんの散歩コースに歯科眼科
なつかしい顔だいじめっ子の顔だ
大判の風呂敷役に立ってます

海南市 堂上 泰女

火傷せぬ位置で自分を磨いている
小利口で仏を拝むのがうまい
姉妹でも心の鍵は似ていない
少し棘持ってピチピチしてる薔薇
幸せは一枚岩になれる友

鳥取市 春木 圭一郎

雑談で心と心ほぐし合う
あいづちを打って笑って聞き上手
質問はソフトに具体的に
押しつけにならないような言葉選る
心にもない言葉など言う言わぬ

鳥取市 山本 益子

日本へ黄砂の旅はふらり来る
迷いから一途の道を外す破目
前向きに自分らしさの開拓を
婆さんよ呼ぶ声甘い落し穴
粘り腰傘寿のじじはまだ元氣

鳥取市 中村 金祥

粘り腰老母の姿勢を見て覚え
ほんのりとさせる仕草に救われる
春風へ僕のホルモン乱れだす
食卓が安らぐ場ではなくなった
無投票知事も市長も魅力消え

鳥取市 夏目 一粹

すまないと言やつと口にする
やさしくされると涙が先にでる
叱るもの猫しかおらず黄昏れる
おお妻よ愛しく思う時もある
夕焼けの空をばらまくヘリコプター

鳥取市 福岡 庸二

逆風も受け止めようで追い風に
聞き上手相手の心つかむ術
子育てに忘れ去られた愛のムチ
良い出会い来て欲しくない別れの日
すぐ頭下げるトップにあきれ顔

鳥取市 吉田 弘子

僕よりも三日長生きせよと言う
歳だなと思う失敗多くなる
死ぬまでをつき合う薬二病あり
シワのない諭吉出て行く新学期
よろこびの陰でこっそり涙拭く

鳥取市 福西 茶子

子は宝唱えて少子高齢化
難点はあるが子宝三つもつ
よくキれる前頭葉が未熟らし
一坪の畑で育てる仏花
ボケ防止夫婦喧嘩もたまにする

鳥取市 有沢 せつ子

月毎に願いをめくるカレンダー
ぼんやりと過ごし知力もゼロになる
齒科の椅子耳には麻酔効いてない
ムード歌謡せつない恋をふと思う
O脚にロングスカート有り難い

鳥取市 倉益 一瑤

一服のお茶で正論まるめられ
罪の香をほんのりさせて美しい
腕白で泣かされた子に介護され
やせ馬の背中に乗っている妻子
情熱はあるがときどき息が切れ

鳥取市 永原昌鼓

見栄張ってみても振る袖しれたもの

黙ってる方が実権持っている

豪雪に人の非力を知らされる

粘り腰また寒風が南下する

初孫を囲み幸せ彩になる

鳥取市 岸本孝子

少子化だ高齢化だとさわがしい

手付かずの明日があるから寝るとする

顔に出ることを忘れて盗み酒

香水を変えて四月の風を切る

うぐいすが上手に鳴けて春深む

鳥取市 岸本宏章

現代の刺客鋭いペンを持ち

どう見ても熊には見えぬ七つ星

一円をATMは妥協せず

穴あきの器に予算盛ってある

不器用に生きて道は外さない

鳥取市 西川和子

ちぐはぐな音で始まる二重奏

音程を合わせる事も知恵の内

五十年こんなもんだと言いつけ

辞書開き余生をうたう符を探す

外出のたびに雨雲追って来る

鳥取市 奥谷彩子

パレットに明るい夢を溶いてみる

有り難う濾過した話だけ貰う

蛍の光涙でうたういい門出

勇敢な意見もあとで悔いている

くすくすと噂溜めてる火消つば

鳥取市 加藤茶人

原因は忘れたままに夫婦揉め

何億もあるなら俺は昼寝する

浮浪者の朝は早いな駅ぶらり

死神のささやき聞いて武器を持つ

妻の腹離婚延期は金目当て

鳥取市 林露杖

市長選投票場の閑散と

遠からず参りますぞと募洗う

ゆつたりと卒寿のバイク風は春

九十歳次のハードル決まらない

思い出せぬひとのハガキに出す返書

鳥取市 田中瞳子

母を看る持てる力を出し合って

目に見えぬ痛み気付いてもらえない

能力の不足を満たす努力の日

もういいと思うまだだとも思う

背伸びなどしなくてもよい定年後

鳥取市 宮 脇 道 子

鳥取市 土 橋 睦 子

遅れ桜蕾弾けて咲き始め

花筏平和を乗せて流れ行く

喜寿祝子等を集めて酔った母

名札下げ田舎のエリート昼休み

髪染めて束の間気持若くなり

鳥取市 福 永 ひかり

言い訳をしていて前に進まない

思い切り剪定勢いよく新芽

今できることだ畑と孫の守り

平均寿命にらみ保険をかけなおす

祝い事小さい計算では足りぬ

鳥取市 平 尾 菜 美

嫁さんの愚痴をもらって壺に入れ

またとない雨に恵まれ寒稽古

父さんの哀しみ放つホームラン

ほどほどに生きてプライド花の芯

礎を築く私の裏年表

鳥取市 福 田 登 美

贅沢な気分にはさせる散るさくら

明日よりも今日を大事に生きている

ベダル踏む少女の春は輝いて

街は春動き始めた光る風

年寄りが多い病院そのひとり

どつぷりと脳内汚染する雑誌

人の世の定め静かに法話聴く

残雪の中で芽吹いた淡い彩

幸せの予告か朝の茶がうまい

初夏の風一番好きな人に逢う

鳥取市 富 山 檳榔樹

ちっぽけなフアイトを燃やしマイペース

喜びも悲しみも抱く母の風

老いの身に暮らしの風のむごさ知る

今日の風明日吹く風も夢がある

海抜けた風は潮騒連れて来る

鳥取市 録 沢 風 花

神さまがきつと宿っていた勝利

いざごは波にのませて春うらら

花粉症猫のクシヤミも愛おしい

春雨の音符を聞いて日が暮れる

人生のドラマ始まるウエディング

鳥取市 埴 寛 子

へそくりという味方までやせ細る

通販とへそくりにらみ合ったまま

ピッカピカ期待背負ってイッテキマース

選挙戦過疎には遠いラッパの音

正義感だけでしゃべっていいのかな

鳥取市 田村 邦昭

だんご屋の匂いが買えと追ってくる
顔中が蜂に負けたと書いてある
蜂の巣を襲う勇氣は過去のもの
慈しみ知った猫には母の膝
すり寄って愛想ふりまく猫の知恵

鳥取市 近藤 佳子

鳥たちの囀る中の畑仕事
春風に撫でられている父母の墓
薬の家消え賑やかな街になり
北方領土へ桜吹雪よとんで行け
探してもいない失せ物ひよいと出る

鳥取市 植田 一京

何という当ては無いけど化粧する
生きてゆく謎はますます深くなり
寝てはゴミ起きてはゴミを出している
身の内の鬼がときどき目を覚ます
ほどの距離で続いて居る友よ

鳥取市 西村 黙光

夢覚めていい勉強になりました
将来の夢へ煌く虹の橋
欲しい物なんでも買える夢の中
夢多彩笑い袋の修理する
過去の夢記憶薄れる侘しさよ

倉吉市 山本 玲子

爺さまを相手に玉露飲んでます
雪国育ちしかし風花には見惚れ
臆病な雛に巣立ちを急かす親
水囊を取り替えながら少し泣く
深読みをしたら依怙地になっていた

倉吉市 猪川 由美子

同じ空気を吸うのもイヤだ別れましょ
二人の孤独より一人の孤独まだマシだ
防犯カメラ個人保護との兼ね合いは
イチロー選手自分をさらけ人気出る
セキュリティー堅固なお宅気が重い

倉吉市 最上 和枝

お手玉を子どもに教え昼さがり
黄砂飛び洗濯物が咳をする
サンシュの黄目に染み春を歌ってる
生きる知恵教えてくれる野の芽立ち
動かずに右脳で金を増やす知恵

倉吉市 野口 節子

女々しいがポストを覗く日が続く
梅干しになるまで生きたDNA
プロポーズ ソフトタッチで断わられ
情熱をセーブして行く喜寿の坂
丁寧な筆を洗って今日を暮

倉吉市 米田幸子

一徹な父も近頃角がとれ
迷わずに大きい方に手をのばす
何時までも生きて重荷になつてきた
人が人食べるこの世がうとましい
終の日も私笑顔で締め括る

倉吉市 牧野芳光

誠実に生きてゐるのにけつまずく
流れ弾当たらぬように酒を飲む
選拳速報競馬より面白い
使わない健康保険掛けている
野に山にトランペットが鳴って春

倉吉市 松本よしえ

飽食の猫十キロの肥満体
単追う事も忘れた猫の爪
雪柳乱れ強風注意報
逢いに行くスカーフゆれて花万染
バレそうな嘘の上塗り四苦八苦

倉吉市 山中康子

やがて知る母と姑の味加減
ふつくと色艶増したステロイド
据膳に愛の一字が込めてある
野心抱くニートの眼にも春の風
安くても女よろこぶ宝もの

米子市 光井玲子

何事も包みかくさず二人住む
この先も波風だけは立てませぬ
本箱のとびらはいつも開けている
ジंकスを信じこむから進まない
好き嫌いない老父にただ感謝

米子市 永井三津子

ご利用は計画的にしてみました
ホワイトデーあんなにチョコを撒いたのに
花弁に祈り占う恋の明日
受診待つ不安の渦と戦つて
自営業余暇と自由の文字が無い

米子市 木村春枝

花疲れ雨が癒しの贈りもの
ストープに労ねぎらつて倉庫入り
真心も一緒に包む贈り物
神様にチャンスをおねだるお賽銭
微笑んで幸せの種招き入れ

米子市 門脇晶子

もくれん咲いて春のいぶきを深呼吸
病床にボケ二りんほど赤く咲く
痛み止め打つておんなの顔になる
春近くひらめき出した花の精
春風に私の病氣とばしそう

米子市 中井 ゆき

米子市 林 瑞枝

お陽さまを拝んで今日を立ち上る
招き猫たまにはごろりねたかうう

民族を越えた楽器のハーモニ

遠い日を招いてくれるおぼろ月

ひきだしで待ちくたびれたハーモニカ

米子市 野坂 なみ

雑草の芽さえ宇宙へ向いている

一せいに出了た芽が背負う運不運

丸洗い煩惱の芽は残ってる

自然への祈りを忘れかけている

よもやの発作お世話になった救急車

米子市 青戸 田鶴

朝夕に薫風さんの色紙見る

芽を出した花芽に暗示かけてやる

華やいで帰ると炊事待っている

前向きに心の窓をあけておく

若い友にいつも教わる事多し

米子市 白根 ふみ

桜には迷惑かけた春嵐

悩むことなど桜とて葉ざくらに

万の芽をいだいて枝は枝らしい

焦ったり躓いたりが多くなる

お相手を理解はするが許されぬ

つつじの朱万葉びとになり仰ぐ

とっておきの神話を青い海が抱く

他人さまのことには触れぬ通り雨

星空にちちとはは居るおぼろ月

胸の内明かさず凜と紅椿

米子市 政岡 日枝子

代々の指紋が残っている器

一日を花に溺れたにぎりめし

外国の魚も食べる港町

花吹雪余韻の風に酔い痴れる

移り気でもう新緑へ心とぶ

鳥取県 深田 倶久

国旗にも敬意はらわぬ輩でき

万国旗好きになれない旗も吊る

ぶっちゃけてあなた良い人わるい人

山里の芽吹きに冴える祭り笛

天国と話せる携帯作れぬか

鳥取県 石谷 美恵子

対岸の桜に癒やすわだかまり

魚獲るイロハ教える子が居ない

案の定けんかしながらフルムーン

厄介な雲行き猫も座を外す

子を産んで下さい若いお母さん

鳥取県 太田 幸枝

露天風呂手足のばしていい湯だな

花の下気の合う友で盛り上がる

しぶしぶにもらった嫁に看取られる

思い切り泣いてあきらめついて来た

威張らずにへりくだらずに老い生き

鳥取県 盛田 夢路

初ものが膳に載るたび元氣出る

リサイクル出来ぬ中古の石あたま

愚痴弱音吐くから酒がばかにする

丁寧に生きて余生の艶を出す

朝刊は夫の後から読んでいる

鳥取県 山本 正光

桜咲く花壇日に日に忙しい

愛くれた亡妻の恩義がいとおいしい

独り身は氣楽なものと負け惜しみ

大山に勇氣もらってまだ呆けぬ

両手とは人が輪になるためにある

鳥取県 蔵本 悦子

春よ春メールの戦終らない

国会の隅に刺客を飼っている

中古でも口のエンジン快調だ

容赦無く春だ春だと花粉飛ぶ

ウキウキの春は三歳若くなる

鳥取県 下田 茂登子

発掘で冬眠の虫傷つける

虫だつて命があるさ捨てきれぬ

大声で喋るおんなに裏はない

金持ちが他人の意見封じ込む

リストラに夫婦の縁も切れました

鳥取県 澤 裕子

連れ添って短所補う術も知り

友達と仲間微妙に違つて

援助です介護保険も年金も

ライバルが逢いたい人の横にいる

望郷へ想いがつのる祭り笛

鳥取県 竹信 照彦

牛乳の廃棄青田を刈るに似る

ドライバー農家泣かせの弥生雪

入学式にピシャリと合わせ咲く桜

水仙が連鎖反応して増える

ひな飾り納めて武者の出番なり

鳥取県 谷口 次男

蛇行して川の流れが息をする

ニッポンを支えておくれ竿竹よ

球根と暮らしを結ぶ庭に雨

ニッポンの宝物なり老いの知恵

どうしてかこころの折れる若者だ

鳥取県 国 森 武 子

生きてゆく力がいかに大切か

わからんでもないのに苦しみ与えられ

本を読みテレビを見ても心憂し

一抹の不安がなぜか抜けきらず

世の中はなるようになるあきらめた

鳥取県 山 下 節 子

風の子の子供が外で遊べない

困らせた子供いちばん役に立つ

ジャンケンにあいこがあつて策を練る

わが家には私の席はちゃんとある

正体の見えぬ足長おじさんだ

松江市 小 川 注 湖

すくすくと伸びた印の柱傷

春風が微笑んでいるミニの脚

太陽は楽しい春を盛りあげる

ひとつ二つ捨てたい記憶持ってます

入社式ライバルと聞く社長訓

松江市 三 島 淞 丘

残り火を燃やせと煽る向い風

ふるりの母によく似た国訛り

三世代リズム合わせのシンフォニー

雑音の中で己を見極める

木も僕も同じ自然の恵み受け

宙に舞う本音さぞかし虚しいね

さあ謳歌浮き浮き春だブギウギだ

警戒色挨拶すると逃げだす児

グッドナイトじゃあ雑音よ癪癪よ

一休さんのひとえな言葉 慌てない

松江市 佐 野 木 み え

絵手紙展ひとつ一つに愛着が

二百年の枝垂れ桜に乾杯を

花の雨無情な空を見上げてる

満開の花にも少し悔いはある

梅雨空に鬱の心をもて余す

松江市 川 本 畔

今君を振り向かす鈴探している

打ち寄せる波にわたしの回顧録

小刻みに動く口惜しい膝がしら

想像はレンガの壁の向こう側

冷めた目が集まっていって動けない

松江市 津 川 紫 晃

百人に百の花咲き百の色

善人をつい怒らせた四月馬鹿

咲くまでは秘密わたしの胸の中

秘めた愛そつとはころぶ紅椿

身の丈に合った暮らしの色を着る

松江市 松本 知恵子

出雲市 小玉 満江

果てしなく地球に吹く風黄砂来る

家出猫のはらで星を見ているか

とりあえずだんごを食べて元氣出す

行商の老女にもらう人生譜

幸せな音がこぼれる夕べの灯

出雲市 吉岡 きみえ

せせらぎの音も五線譜奏でてる

春だから余計なことは考えぬ

羽根伸ばそ花は満開散らぬうち

年金があくびするほど貯まらない

梅干しをしやぶり朝の氣をしめる

出雲市 伊藤 玲子

キラキラとサヨリの青に春もらう

葱坊主春の指揮棒振っている

草に寝て四月の空をひとり占め

ありがたや今年も桜花に逢えました

眠りから覚めたか森が唄いだす

出雲市 小豆澤 歌子

冬のウツ流して弾む春の川

呆けてない人の名がすぐ言えるから

神様に背中をそっと押された日

春の雨たつぷり飲んで草弾む

春の陽を浴びると浮かれ出すトカゲ

赤ちゃんを抱かせて貰う宮参り

戦病死夫の笑顔ずーと抱く

赤富士を背にして同行ハイポーズ

検査室一人待ってる気味悪さ

ピーポーが近くで止まるとんで出る

出雲市 小白金 房子

健康で生きる姿を子に残す

吊棚で花のいのちがこぼれ咲く

仏壇の造花かなしい心見る

普段着で行ける老舗の味を買う

プライドを捨ててやさしい女になる

出雲市 多久和 敬子

ちよつぷりの幸せ求めまわり道

都合良く忘れたふりで和を保ち

花粉症花より先にやって来た

私を忘れた母と握手する

久々のラジオ体操肩がこり

出雲市 岸 桂子

不意に問われて思わず本音吐いている

日記書く今日のペン先さわがしい

生きた証に献血をしておこう

ノーと言う勇氣を持とうやぶ椿

老斑の手に一行が重すぎる

出雲市 富田 蘭水

百選の桜が胸に根をおろす
太陽と握手をさせて種をまく
散るさくら一期一会を深くする
陽光に皮一枚を剥ぐ新芽
花散つて緑ふかぶか押しよせる

出雲市 園山 多賀子

褒め言葉敢えてジョークと思わない
山茶花の朱散り急ぐ幼な恋
挫折する貧乏揺すりする男
頑なに誘い水など受理しない
もう卒寿まだ卒寿だと捻子を巻く

出雲市 持田 多輝子

今日のオベ途中でミスはせぬ自信
テロという言葉にひびく核の影
都合よい時には歯切れ良い返事
運命を変えたあの日の交差点
まほろばのマグロに賭ける男意気

出雲市 石倉 美佐子

五円玉池に沈めて内緒ないしょ
内裏びな白酒少し召し上がる
長持ち唄めでためだの田舎道
一刻をちゃんづけで呼び喜寿の会
乾杯もアイラブユーも出雲弁

出雲市 佐藤 治代

太陽と輝き跳ねる老いの靴
植木鉢出して慌てる春嵐
手作りの饅頭好きな友見舞う
不器用な子を案じてる老婆心
月末が駆け足でくる貧しい日

出雲市 森 茂美

穂の芽がもうとられてる裏の山
冬炬燵まだ片づかぬ日がつつく
路の臺摘んでお隣法事とか
春の陽を背中に受ける俺の歟
活き活きと米寿を生きる人の肩

雲南市 毛利 幸

油断して心の梯子はずされる
春うららゆとり探しに旅に出る
背後から嫌な花粉が追ってくる
裏表あつて人生色がつく
いらいらが相手の顔に影落す

鳥根県 伊藤 寿美

胸の内晒してわたし見て貰う
吹き溜り昨日の風が置いてある
風ソフトふと振り返るひとりぼち
再版の子ビクロサンボ孫と読む
春になったら亡父の峠まで行こう

岡山市 井上 柳五郎

美作市 小林 妻子

小学校幼稚園へと曾孫たち

戦友からの淡路くぎ煮を賞味する

卒寿での呼吸でこなす身の周り

平等にある運なのに掴めない

好物は平気で食べる賞味切れ

倉敷市 撰 喜子

恵まれて我慢のできぬ子が育つ

泣くことも策略と知る三歳児

雑念を払い真実見えてくる

栄転という左遷地へ一人行く

道具ばかり増え永続さしない趣味

真庭市 国 米 きくゑ

針動き希望に背く体重計

ひらがなで綻びを縫う母の針

かけ声で動く体に苦笑い

開発という名山川傷付ける

真ん中に笑顔の母が居て温い

真庭市 福 嶋 智恵子

ご婦人を嬉しがらせる美人の湯

おおらかな皺や白髪顔合わせ

気遣いに心の傷が何時か消え

親切なお節介かは気にしない

しらん顔これも暮しの一ページ

長生きへ段々増えるのし袋

一銭五厘の赤紙だった若かった

負けいくさの語り部となり反戦歌

子等巣立つあつからんとして二人

大海を忘れた雑魚のまま老いる

美作市 大石 あすなろ

でこぼこの道でパワーをつけてくる

まんまるい言葉で傷を彫りに来る

胸の炎を消す熱冷まし下さるか

イケメンの鬼と握手をしてみよう

駅裏でふと哀愁とすれ違う

美作市 山本 玉恵

会者定離合点はしているはずなのに

逢うた日を想い出させて小糠雨

雑草に急ぎ立てられて鎌を持つ

乗り過ぎた話の先の落し穴

灯を消してねむれぬ夜にさいなまれ

美作市 福原 悦子

錆びている過去が他愛なく崩れ

逆境を碎いて支えた自負がある

子離れの人の情けの裏表

もみじ手もやがて幸運掴むかも

身のほどを支配されてる欲の数

川柳塔の

川柳讃歌

⑬

木津川

計

もうボクを起こしに來ない朝である

坪井孝一

何時まで寝ていようが自由な定年の「サンデー毎日」の朝であります。孝一さん、長い間「苦勞様でした。かつての話題本『定年後』で岡田誠三さんは、定年を「莊嚴に営まれる生身の葬式」と言われました。が、孝一さんの句には葬式どころか、人生をこれから楽しめる喜びが溢れています。＼なんにもなくてもしよい／口笛吹いてゆこうよ。迎えた老春を氣儘に輕快に生きてください。

職安へ昔をみんな捨てにくる

早川盛夫

私の知人は京大大学院卒の修士です。定年後、職安ではねられるのも高學歷が邪魔をします。ですから「高卒」で臨むのですが、泣きたくなるような職種ばかりだと言います。僕はある生涯学習「短大」で「学長」なるものを務めています。こんな方に出会うので

す。リタイアして何年にもなるのに現役時代の名刺を使われます。「〇〇株式会社専務取締役」の右上に小さく「元」と書き入れられています。みんなから敬遠されておいでです。

時は金半額シール貼る待つ

加藤茶人

薄給で暮す若い夫婦に尋ねました。「ちゃんと食べてるか?」すると嫁さんが「夕暮の魚屋さんで山盛り一杯の鯛を百円で買ってきますねん」。それを刺身で食べ、フライにし、煮て「三日持たせます」。涙ぐましい生活防衛策であります。

茶人さん、正に「時は金」であります。「待てば海路の日和あり」で半額になるので、さりながら、金とはいえ時ばかりあり余る悲哀もまた如何せん、であります。

添いとげるつもりあくまでもつもり

安土理恵

昔は二世を誓ったものです。「お吉物語」天津羽衣の「夢も見ました恋もした」二世を誓った人も居た、の如くであります。ですが、時実新子さんは正直に「愛せうとしたのよずっとずっと」と過去の真情を詠みます。が、理恵さんは将来を約束しない当節の女、ころを伝えて新子さんの上をいつたのです。かくなりますと一切の誓いも「あくまでもつ

もり」。理恵さん、人はいったい何を信じたらいいのでしょう。

人間のにおいを消して闇に棲む

小谷 是るみ

容易ならざる言動です。はるみさんの身辺に尋常ではない何事かが出来たのです。他にこうも詠んでおいでです。「人生が火の輪くぐると変わるはず」「歯止めさえ効かぬ恋路をひた走る」「ふる果には戻れぬ女ひとり生き」。突然炎の如く、の人生です。そしてもう一句「オレオレと言えなくなつた午前様」。展開のすべてが読みとれます。はるみさん、闇に潜まなくてもいいのです。あなたのおいであなたが生きればいいのです。

逃げてゐるのにきつちりと誕生日

中川 楓

名句です。座ついても腹は空きます。仕方なく生きていても税は取られますし。せめて若さを売り物に、と楓さんは思われたのですが、寝てる内に可哀相に年をとり、来んでもええのに誕生日はきつちりやつてくるのです。追いつかれない方法は三つ、即ち、誕生日を一刀両断に迎え討つか、時間よりも早く逃げるか、「時よ止まれっ!」でストップさせるか、さて楓さん、どうしましょう?

『上方芸能』誌代表

自選集

土橋 螢

万緑の中のみどりを食べている
真心をこめて真つ赤になる椿
難しい字は片仮名で書いてある
修身を忘れ胡座で飯を食う
百歳に八千五百日の距離

西出 楓 楽

アルハンブラ光と影が戯れる（スペイン紀行）
ジプシーの魂叫ぶフラメンコ
アンダルシアの空もやもやを吸い上げる
騎士団が現われそうな街トレド
もう若くないと悟った旅八日

仁部 四郎

そしられてやつと気がつく下心
説明は用意してある下心
判ってはいた政治屋の下心
言い寄ってナイと伝える下心
ばあちゃんの背中であつた下心

波多野 五楽庵

たてがみがヒユルヒユルヒユルと北へ向く
安楽死までの長さをもて余し
私に愛想笑いをしなくても
トンネルをギンギン抜ける冬の貨車
連絡船飢えを満たした事がある

芳地 狸村

丁髷がビールのんでるロケ現場
鮮やかにトンボを切った初舞台
産声に感謝している控室
関取りのゆかた姿にある誇り
生い立ちが小学卒の社長さん

宮口 笛生

八十路坂腰も曲らず畑仕事
八十路坂ダウンする日を考える
達者です大阪ひとり行ってくる
アテナンカ要らんと空けるワンカップ
晩酌のうまさに今日を無事終る

宮西 弥生

感動と発見見せる花吹雪
冬の底脱して部屋が狭すぎる
ひらがなで花散らし雨降ってくる
建て売りのすき間耐震抜いてある
茶柱の行方信じて靴をはく

森 下 愛 論

早寝して自問自答の老いの日々
まん丸い月を背負つて影を踏む
雲動く月丸くなり四角なり
バーの隅カンバンでつせと追い出され
春うらら遺失係へ多い人

八 木 千 代

太郎太郎と不安従え松江まで
循環バス回る結界跨ぐかに
太郎の絵に入り太郎の声を聴く
彩色の粘り胃壁に付着する
心細かった旅も来世のリハーサル

八 十 田 洞 庵

悲しみもう癒えたかと六地藏
剣が峰立つて男の顔が出来
口紅が真つ赤すぎるよモナリザよ
言いすぎてころりころがる晒し首
肩書きを外せばただのむさい髭

両 川 洋 々

十字切る指で引き金引けるかい
離農に泣くこの手も足もいとおしい
あの日から疑い深くなる鍵よ
九条改正ハトよお前も淋しいか
翔ぶ気です女ピンクの地図を買う

阿 萬 萬 的

マンネリに踏ん切りつかぬ臘月
自己嫌悪それから孤独な日が続き
強引に遣り込めて見て淋しい夜
おっちょこちよいいだけ小まわりきく男
ご自由にと言われ一層肩が凝る

石 川 侃 流 洞

鈍刀とわかりケガせぬようにあしらわれ
チューインガムだけは駄目です総入歯
煙草やめ孫が吸い取る煙草代
赤色で塗つても還らぬ北の島
薬一本渦と吞まれた一大事

板 尾 岳 人

鳩尾にあなたがくれた不発弾
土砂降りの街の花屋は不眠症
美しい妻だと思ふ不整脈
その内に逢いに行きます小糠雨
誕生日バラ千本を送ります

奥 田 み つ 子

今が花と思えば楽し日々楽し
花の下 花の呼吸と合わせおり
日の当たる道を歩けばよく転ぶ
写真との会話つづけてもう五年
どこかにきつと私を待ってくれる椅子

河井庸佑

観点を変えると見えてきた灯り
お互いに仲裁待っている喧嘩
人知れず流した汗が報われる
回復の兆しへ弾みついた試歩
突然のスピーチ承知する余裕

木村あきら

節水の宣伝カーのゆく暑さ
三猿に徹して丸い輪を作る
ライバルが頭半分先をゆく
黒潮に乗って椰子の実泳ぎ着く
論客を万年筆で薙ぎ倒す

小島蘭幸

明日嫁ぐ長女よ夢を見ているか
チューリップが咲いたお嫁にゆく朝に
泣こか笑おか花束が近付いて来る
一世一代の演技だ泣いてみせようか
新渇史子という扉が光っている

小西雄々

芥川賞読んで秋刀魚を焼く準備
無位無冠のんきに見せる気を遣い
正論を神が無視した日のあせり
火種まだ燃える牡丹もまだ褪せぬ
掻き乱す男ごころに潜む愛

小林由多香

効くというくすりはみんな飲んでみる
仲直りしよう一本提げてくる
趣味でめし食えないものかふと思う
母が塩ちよつぱり足して出来上がり
竿一杯梅雨の晴れ間が忙しい

斉藤 姦

若鷹に羽ばたく空をあげようよ
九十の画布のびのびと朱の絵筆
剪定の音も鋸研ぐ音も春
伐らないでやがてさくらが舞うのです
豊穣太鼓ドンドン大地打つように

塩満 敏

ご心配かけたワイフが退院す
パソコンをこき使う夢を見た
マイカーで日本全県回りたい
その内に国産横綱出来るだろ
ニッポンの九条やはり大物だ

新家完司

死んだ友にすまないけれど花見酒
生酔いの欠伸がだるい昼の酒
マジックは終わりましたと桜散る
青空にハイタッチして深呼吸
雲形の家を建てよう丘の上

朱と緑ポインセチアに小さい花
 サクラ散り緑のシャワー浴びに行く
 気張らないがんばらないで生きている
 栄光の過去はなかった古机
 八十の父を五十がなぐさめる
 しんどいしんどいと生きてゆくいのち
 しやあないなもう離せないこの薬
 一番が好きな男の不整脈
 エンゼルの微笑にネジをしめなおす
 諍いはよそうよ飯がまずくなる
 老いた町話の種が落ちている
 卵かけご飯話はうわの空
 よろよろとうしろ姿がよく似てる
 和ませる話のネタは持っている
 散策の足止めさせた草いさけ
 あほらしい信念神風など吹かぬ
 ポケットの財布余生が淋しそう
 ケータイにルール違反を監視され
 もう怖いものなし歳がいやになる
 一尺の苗木も春を咲いて見せ

遠
山
可
住

恒
松
町
紅

玉
置
重
人

田
中
正
坊

第9回鳥取県川柳文芸大会

日時 7月9日(日) 午前10時開場

場所 新日本海新聞社 5階大ホール
 (JR鳥取駅南口から徒歩3分)

兼題と選者 「気」 木本 朱夏 選
 「額」 足立千恵子 選
 「粒」 長谷川博子 選
 「肥える」 鈴木 公弘 選
 「活」 倉益 一瑤 選
 「ひねる」 細田 裕花 選
 「手頃」 竹内 朋恵 選
 「骨」 両川 無限 選

席題なし 出句各題2句まで

当日出句締切 午前11時30分

会費 当日 2,000円(軽食・大会誌呈)

欠席投句 1,000円(大会誌呈)

表彰 1句1点方式 総合成績上位10人まで呈賞
 (出席者優先…同点の場合上位句のある順)
 午後4時00分頃閉会予定

欠席投句 締切: 7月5日(当日消印有効)

用紙: 自由(事務局により清記)

あて先: 〒680-0074 鳥取市卯垣1丁目110 夏目一粋
 第9回鳥取県川柳文芸大会実行委員会事務局

主催 鳥取県川柳作家連盟

第1回松江市川柳大会

日時 7月22日(土) 午前10時30分開場

場所 松江テルサ (JR松江駅西側)

兼題と選者 「松」 恒松 町紅 謝選
 「城」 佐々木 裕 選
 「ほのぼの」 政岡日枝子 選
 「集まる」 金築 雨学 選
 「橋」 竹治かし 選
 「始める」 松 彬 選
 「菓子」 長谷川博子 選

各題2句・出句締切 12時00分

披講 13時20分

参加費 1,500円(記念品・発表誌呈)

弁当 500円 80個準備(先着希望者)

欠席投句 投句先

〒690-0015

松江市上乃木9-23-22 三島浜丘宛

投句締切 7月10日厳守

投句料 1,000円(小為替)

主催 松江川柳同好会

水煙砂

板尾岳人選

倉吉市 前田 三津子

真つ白な心が難を切り開く

まだ痛む胸が抱いている火打石

旅立ちには想い想いに無口なり

円を書く指がだんだん細くなる

目の毒にならぬ程度の美人です

お手数をかけます未だ生身です

和歌山県 柏原 夕胡

逢うてきた余熱を抱いた赤い薔薇

葉桜になるまで続いている微熱

おんなです泣きたい夜もあるのです

捻子ひとつ無くした愛が黄昏れる

傷ついて少しおとなになれました

真つすぐな想いは重荷なのです

鳥取市 中宇地 秀四

口惜しさを袋に詰めて蹴り飛ばす

褒めるだけ褒めては見たが唯の石

この命妻が洗ってしわ伸ばす

貧乏神わけも言わずに住みついた

灯台になれぬ親父の赤のれん

ひまわりと心開いてにらめっこ

八尾市 平川 幸枝

さくら咲くことしも笑顔だけの芸

いい言葉直ぐに反応して使う

自己主張している文字の几帳面

路地裏の雪ダルマにもならず春

生命線いたわりながら生き延びる

合格の機嫌よろしき肩たたき

相生市 村木 信子

休耕田野良着のわたし呼んで

土愛し野良を愛している命

くたびれた仮面を替えにふる里へ

子育ての挽歌を溜めた丸い背よ

忘れたい愛の序曲よ春の風

忍従の母のとり火へ落し蓋

大洲市 花岡 順子

東かがわ市 赤澤 貞月

重心を変えると心軽くなる

未練まだ終わりの文字を刻めない

落人の里涼しげではかなげで

昨日から習う明日が物足りぬ

風さやか伸びる緑に手を貸して

今治市 渡邊 伊津志

中指はお誘いなくて閑なこと

嘘ついたついたと小指追って来る

ありのまま生きる中指姿勢よし

美しい白い指には影がある

人を指す人指し指をたしなめる

高知県 百田 幸

満足と言えるほどでもない夫婦

風除けに時には杖になり夫婦

泥に生き泥に染まらぬ蓮の花

貸し借りもなくて余生の波静か

何事も善意にとれば晴れてくる

香南市 近森 功

多数決握り拳が汗をかき

枕木で終った父の丸い背な

九条はどうあれやはり鯉幟

辞世の句出来るまで待て閻魔様

宇宙酒で遊泳をする花の下

お世辞だと知っていますが聞く我慢

老松は移植いやだと駄々をこね

風呂を焚く夫の執念まだ続く

春嵐桜も意地を見せて咲く

後ずさりしながら聞いた長話

札幌市 三浦 強一

ただの石磨き馬齢を重ねてる

団塊の世代心に上野駅

プライドを捨てて下流の住み心地

居酒屋で変身をするかたつむり

卓袱台を囲んだ頃のイモかぼちゃ

取手市 葛西 清

老いと暇うまく使って日々新た

上等の靴下をはく爪切って

受けた恩流しきれずに手繰り寄せ

聞こえぬと答えは老いのせいとする

天窓の朝に元気を貰ってる

国分寺市 野崎 勝

妻の友来る日の僕はプチ家出

メーターの上がる手前で車降り

ごみ捨てを担当してる停年後

役目終え椿の花が地に還る

虫たちの食欲満たす無農薬

昭島市 野口 忠

そのたびに目減りしている脳ドック

ないなりに遺言だけは書いておく

どう生きる自己責任が付き纏う

嬉しくも寂しくもある妻の留守

玄米の湯気が元気をくれました

東京都 長谷川 康子

亡母の味フキもわらびも筍も

奥方へ今日も言葉を飲んでいる

嘘のある暮しどこかでひび割れる

二次会へカラオケ自慢ばかり寄る

児の笑顔頬がほころぶ写真展

横浜市 長島 亜希子

もう歳とまだ若いよを使い分け

花咲いて桜こんなにあると知り

十年後僕と分かるかパスポート

電話の声ほめられ会わせにくくなる

要りもせぬ飛行場へも税払う

横浜市 川島 良子

物差しが違ふ常識非常識

取りあえず結果出さねば進まない

折れましょうキミが幸せ掴むなら

結婚はゴールとおもう勘違い

転ばなきや理解できないこともある

横浜市 巖田 かず枝

友元気いかなご届く嬉しい日

夫から貰った宝子が二人

大事な英語と国語さあどっち

少子化に産科小児科どこへ行く

揚げ物の好きな夫の医者通い

岐阜市 平野 あずま

原点に戻りてにをはから学ぶ

すぐメモに書かねば記憶霧になる

タイミング合ったジョークに場が和む

地に落ちて美学を通す紅椿

前例をしっかりと守る天下り

浜松市 杉浦 恵夢

携帯を握り一億レポーター

幽霊になつてウロウロする名簿

傑作を撮る瞬間の電池切れ

メモの文字確かにわたしなだけど

思い出のふちにちよこんと紅生麦

大山市 金子 美千代

春の陽にうれし恥ずかし磨く窓

ジんクスを信じる母を笑えない

余震まだ続く覚悟はしていたが

ほんほりの灯に浮かれだす花の精

言い出せぬままに別れた花吹雪

犬山市 関 本 かつ子

手のひらの小銭こだわるお金持ち
宿命のように医者の子医者になり
子の背中大きく見えてからの老い
遺伝子に札を言ったり嘆いたり
真つすぐな意見目線を攻めてくる

愛知県 八 木 百合子

遣り繰りへ無駄はないかと夫の目
何か変サブリメントに頼る食
車椅子押す妻の背も丸くなり
酒たばこ賭事もせず煙がられ
平凡の良さに気が付く五十路坂

京都市 西 村 益 子

孫自慢やつと私も仲間入り
誰にでも消したい過去が二つ三つ
訂正印捺して人生変わるなら
いつの間にかきまった席のある茶の間
いい土になれと生ゴミ埋めておく

京都市 清 水 英 旺

二五〇歳衰え知らぬモーツァルト
鉛筆の芯とがらせる憂き心
自分史のきょう白いまま床につく
六十を越して阿吽の夫婦道
結婚日思い出させたバラ一輪

京都市 三 宅 満 子

省エネはこれしかないと二度寝する
今年また逢えた桜と友と酒
生きてるよ古木の幹に咲く桜
散り際を雨が無情に引きとめる
追い出されなくても外へ桜見に

大阪市 森 田 明 子

呼びとめて寂しがり屋の沈丁花
花開くその重たさに耐えている
れんげ草タイムトンネル抜ける道
草も木も艶やかに化け春祭り
蝶になる幻想覚ます試着室

大阪市 三 浦 千 津 子

古稀過ぎてまだ先走る好奇心
聞き役のよさに孤独がこぼれ落ち
遠い日のくすぐる恋も老いたまう
通り抜け花に溺れて花に酔う
爛漫と咲き未練なく散るさくら

大阪市 尾 崎 黄 紅

居酒屋の前のポストと決めてある
言うた言わんと老いにある忘れあい
笑い皺悲しいことの多過ぎる
金がないから粗衣粗食しています
待ち合わせ場所に離れて待つ情け

大阪市 中村 忠敬

出張日何故か女房嬉しそう

人よりも張り切っている警察犬

留守番に役立ちそうなロボット犬

言い訳にうそを半分まぜておく

自販機もまいどおおきに言う浪花

大阪市 吉田 富美

ふるさとの季節包んだ道の駅

美しいことは抽斗入れたまま

笑い声聞いてあじさい色変わる

思ひ出の駅が戦禍の露と消え

楽しみもまた悲しみもある余生

池田市 北出 北朗

ひとひらを肩に梅見の女坂

春野から古代の姫が手で招く

水溫むお玉じゃくしは四分音符

春風とダンスしている柳の芽

老いたりと言えど気持は吾亦紅

池田市 多田 契子

木々の揺れやさしくなつて春を知る

思ひやり仏の方に向けた花

降りしきる雨にハートが握手する

ほんのりとお酒が犯す花の宴

ほんのりと感じた夕陽或る祈り

池田市 上嶋 幸雀

何事もなかったように消える雪

春うらら妻は女へ衣更え

日本も広いと思う花便り

喧噪の中で喘いでいる桜

好きで散る訳ではないが散る桜

門真市 矢阪 英雄

肩に舞う桜やさしく撫で下ろす

桜散り器の水面舟にする

開いてるページに桜夢伸ばす

桜散り葉を礼讃の老いの群

腰を入れ甘味引き出す串だんご

河内長野市 木太 久正 一

散歩道変えて広がる町の視野

町内会役の順番めぐりくる

道往く人に愛でられ家の岩牡丹

気前よくブレザー買えと妻が言う

歩けなくなる日がきつと今日歩く

河内長野市 黒岩 靖博

大胆と無謀はまさに裏表

大漁に昨日も今日も酒に酔う

呼ぶ声も暑さに負けず蟬しぐれ

常識も恋には勝てぬ非常識

シャボン玉虹の色して青空へ

岸和田市 坂口英雄

高槻市 杉本義昭

職安にも少し嬉しい春の風
風の子が外で遊べぬ世の中に
水平線越えるともめる国と国
関空のそばの魚がよくふとる
金になること以外には動かない

堺市 大久保伸子

寝屋川市 森田麗

少年に風化させたくない戦
追憶の野に咲く花を数えてる
楽しみを毎日探し茶を替える
争いは止せとせずかな小鳥の目
栄光の裏に努力のつまかさね

堺市 荻野像山

寝屋川市 北田ただよし

絵手紙へ野菜ばかり乗せている
手料理を褒めて外食させぬケチ
何やかや言うて増税ほのめかし
改革は弱者いじめで終るなよ
格差拡大思い通りですか総理

吹田市 早泉早人

八尾市 寺川はじむ

長雨をぼんやり見てる万歩計
裏切りを水に流せず今ひとり
反論に諍い避ける妥協癖
ときどきは試してみたい迷い箸
母さんの手料理弾む晴れ予報

一寸の虫に貫く意地があり
ひとり旅なのに仲間をさがす癖
やることがある生き甲斐が命綱
流れ星祈る女の運不運
生き上手勝手気儘で擦り抜ける
茶柱の一つが今朝の顔になる
怪しげな風に誘われ花筏
無理矢理に約束させて待たされる
約束をカレンダーにも覚えさせ
棚の奥飲まずに逝った酒がある
よく聴くとラ音がひびくラッパユリ
信号の黄では渡らぬ蝸牛
水仙のジョーク聞いてた春の風
クローン花ためしたくなる狂い咲き
防犯灯近頃子らを見かけない

着飾りの女房をさりげなくほめる
和解した目がこんなにも柔らかい
いたわりは無用と芽吹く零れ種
目には目をしつかり主張する無口
歯車が合うていないが共白髪

八尾市 田邊 浩三

大阪府 高木 道子

パソコンが子らを路地から奪い取る
隠しても全部寝言でばれてます
筋いいと言われ冷や水飲んでます

定年で知った夕陽の美しさ

へソクリを挟んだ本の題忘れ

八尾市 赤木 妙子

やれやれの次はヨイシヨとドッコイシヨ

便利さに馴れて心身疲れ気味

外堀を埋めてはじまる自己主張

吹き溜まりに脱皮うながす風が寄る

子に従い平穩誓うのはわたし

八尾市 脇 俊子

楽しいこと目の前にある歩けそう

良い夢を枕にそつとノックする

腹一杯とてもとてもと箸のスト

底抜けに笑い上戸で活性化

老いという言葉を少し薄めたい

八尾市 松葉 君江

ワンカップ五臓いたわる温め酒

声かけて路地裏塀を低くする

吐きだして心の傷を浅くする

感動をふやし若さをとり戻す

ストレスを発散させる泣き笑い

せせらぎが花びら負ふい子守唄

六十路坂急ぐことない蝸牛

いぬふぐり瞬く星に似て愛し

足音のとても優しい春の雨

一杯のコーヒわたしをたて直す

大阪府 畑中 節子

子育てのむずかしさ知る世に変わり

畑の雑草我が物顔に春うたう

老いの身にブレーキきかぬ気の若さ

忙しい中にも花見忘れない

春うららメモ多かりしカレンダー

大阪府 伏見 雅明

一割に回る話に騙される

保育器で元氣いっぱい自己主張

創業の苦しさを知る古机

意気地なさつい優しさを取り違え

失札と帰りかけてはまた喋り

神戸市 木村 忠義

世界地図眺めて世界旅行する

スーパーで妻を連れぬようにする

取り替えるのできぬ体をつい忘れ

怒るのは元氣な証拠かも知れぬ

定年後僕のロボット化が進む

神戸市 岡川 無限

病人のブライド立てている笑顔
アリバイの団子を先に買っておく
思い出し笑いを猫に覗かれる
美しい指は約束守らない
優しさが純な男を迷わせる

尼崎市 桑原 東園

洪滞を見下ろし渡る歩道橋
挫折した希望に向けてUターン
媚びる瞳で指もからませ得た予約
入学を待つ児ら嬉々と春を呼ぶ
赦しさも泣く児に弛む親心

尼崎市 河津 正治

姿見と会話が弾む一張羅
理屈には負けても隠し玉がある
引き返す勇氣理屈など要らぬ
抜擢の椅子に孤独を噛みしめる
巷にも泳ぎ上手な出世魚

加東市 安達 厚

耐えることそれが総てと釈迦の知恵
乗り換えに迷い下車してまた迷い
座禅して人は必ず死ぬと知る
五十年添うてちぐはぐする意見
登ることだけ心得て一人ぼち

篠山市 谷田 多美子

春和菓子どうぞとひときとめる
春彼岸亡夫と食べたい菓子ばかり
いい目覚め口紅うすく眉うすく
オクターブたかい続経のありがたく
窓越しに桜がさそう急がねば

宝塚市 丸山 孔一

そうですか己むを得ないと曲げた意地
甘酒にちよつと生姜で活を入れ
門を出て鍵確かめに引き返す
言えませんがきつとあなたが嘆くから
カッカする癖直してと妻の愚痴

奈良市 尾畑 なを江

ピカピカの一年生にもある悩み
だんだんとたとえ話でふくれゆく
桜にも咲き散り時の運不運
命までかける事ないことばかり
月光に底の底までさらけ出す

和歌山市 坂部 かずみ

紫陽花に晴の予報の雨蛙
ジャンケンでけじめをつける皿洗い
古里に座ったままの影法師
空箱がたまりこの世の音がする
台所で発酵を待つ味噌造り

和歌山市 土屋 起世子

桜さくら弾んだ毬がかえらない
別れからいいことばかり春の風
大器かも今日も道草して帰る
食べて寝るだけに時計の針回る
景品の服が届いてダイエット

和歌山市 寒川 武

家事労働妻が寝込んで思い知る
責任が無いから好きなことを言う
大半は母に遣った初任給
株のこと知らずに株を買っている
ライバルがいちばん助言してくれる

和歌山市 たむら あきこ

饒舌な男と回る花疲れ
絶叫をするから耳にはいらぬ
影だつてひなたぼっこがしてみたい
曳いてきたきのうを畳む夜明け前
にんげんに入門ずっと未完成

和歌山市 山田 侃太

主のない部屋で時計が仕切り出す
窓際の雲が自信を持って言う
政争と知らせていないぶぶ茶漬け
ころろし母はお百度参りする
親指が疼く行くなと言うている

和歌山県 辻内 次根

病名が三つひとりで見えるサクラ
メモ帳へ忘れぬように春うらら
泣く鳥で刻の目安をつける朝
虹でなく渡っているのは丸木橋
争いは競技に限る広い空

和歌山県 木村 徑子

ふる里の山に変らぬ亡母の風
森に来てじっくり語りあうリュック
世界遺産の神秘を抱いている樹林
四五枚もあれば陽気になる財布
花の野を諸手で謳うもつれ蝶

和歌山県 森下 よりこ

心までピンク色して桃畑
菜の花の海で不安に襲われる
キッチンの改造ならば出来そうだ
茶柱を見たくて自家製の番茶
わらび摘むこんなたのしみあるわたし

田辺市 大峠 可動

収斂の神と逆転劇を計り
第九条抱いて見飽きた地図を観る
花冷えの後も冷えます介護税
節々に信号無視の神経痛
紳士淑女よ笑い袋が持てますか

鳥取市 山口 千代子

派手に見え主役になれぬカスミ草
信じつつ愛をはぐくむ夫婦花
春はいい夢と希望に萌えて跳ぶ
桜咲き楽しみ求め若がえり
命戴き今年も桜逢えた幸

鳥取市 谷岡 清子

吾が庭の桜満開吾が命
チューリップ咲いてうれしく礼を言う
遅咲きの紅梅めでる青い空
花々に元氣貰つて生きる日々
あじさいの新芽は青く時を抱く

鳥取市 岡田 信恵

菜の花が黄色一面春染める
絵心が人情深い肖像画
ちぎり絵に和紙の造形生きている
お見舞いに赤い苺を添えて行く
定年後妙にバランスとれてきた

鳥取市 山岡 紀子

お隣のけんかは楽し春うらら
腹一杯食べてけんかを忘れた子
父さんが頭かいてる口げんか
こっそりとメール打ってる夫の背な
有給を夫がこっそり取っている

鳥取市 近藤 秋星

燕夫婦どれが夫でどれが妻
お花見は土手の桜で我慢する
山奥の桜見られぬままに散り
春や春わが腰痛はいつ治る
菜の花の化身か紋黄蝶が舞う

鳥取市 横田 春名

梅雨空は消したつもりの鬱にじむ
遠い日のロマン忘れた顔となり
情熱を燃やした人の背が丸い
厭なこと笑顔で聴いたふりをする
思うよう流れなくても明日がある

倉吉市 酒井 芙美子

馴染むのが下手で何時でも蚊帳の外
四月馬鹿天下御免の嘘に酔う
仲人の嘘八百が見抜けない
言い訳のしどろもどろで舌もつれ
もつれてもすぐにほどける赤い糸

倉吉市 福光 京子

海山の好きな友より春貰う
気紛れの虫が住みつき落ち着かぬ
身の周りシンブルにした開放感
雑音を消すと心が遊びだす
行き届く廊下の艶に主婦の顔

鳥取県 岩崎和子

風呂の中おなか揉んだり抓んだり
猫の目のあやしい光目をそらす
其の年の潮流に乗り生きている
調子者おだてられてはやる気出す
花持って私なんだか幸せそう

鳥取県 小飼和代

潮騒が心の迷いかき回す
人の耳悪い噂はよく聞こえ
ナイーブな心に花は良く似合う
満月へ充電しよう心の灯
浮き雲を追えばロマンの限りなく

真庭市 矢谷富士野

三代の水着姿を撮るハワイ
世の矛盾洗い流している笑顔
働けど赤字覚悟で田を守る
三禽の叫び野山に春を呼ぶ
亡き夫のかけ声遠く遠くなり

松江市 山根邦代

年重ね丸くなってる言葉尻
大口を開けて笑えぬもどかしさ
ふるさとおいでおいでと花便り
気心と歩幅合わせる花の下
春日和笑顔に会えた黄水仙

松江市 松浦登志子

日暮れまで喋り続けてデパ地下へ
これからの夢語る妻同い年
よそ見せずいつも通過の商店街
揚げたての蓮根つまみ佳話
東京で小津作品の親演じ

出雲市 川島和歌子

藍染める芽吹く柳の高瀬川
倅せは朝寝かしむ日曜日
流れ星願いもむなし通り過ぎ
火も水もくぐって生きた昭和の日
音痴でも恐れぬ度胸歌い終え

雲南市 武島ちよえ

啓蟄ややつと私も動き出す
縦横の糸を繋げば血の絆
仲直り傷口そつと舐めておく
ライバルが居るからやる気湧いてくる
逆らった風も逆らう壁があり

雲南市 福岡博利

世界一日本国中のめる水
ほしいものなくなりましたエンマさま
孫に脛髻られうれし乱れ箱
悪友が少なくなつて酒のぐち
生きてきた行間にある預金帳

メルボルン 藤原 ボン吉

気をつけてお茶をすすって手は火傷
盗まれて困る物とは子供だけ
お茶漬けの隠し味だね和の心
十円を握りしめてた時想う

シドニー 内山 佳代子

胸張れば気持ち自然に上を向く
靴下を履いて寝る夜冬間近
ひんやりと秋の夜空に深呼吸
花香り過去の思い出よみがえる

シドニー 三谷 たん吉

勝ち組は心豊かな律義者
負け組は汚い金でかざる奴
胆石のオベと花見の二重奏
ハラ切られにらむ桜は土気色

シドニー 坂上 のり子

桜ない日本考えられますか
相撲観戦眉涼しげに座す着物
背筋曲げ伸ばしして聞く長電話
反逆の精神だろうタバコ吸う

唐津市 岩崎 實

行きましよう一週間の桜です
わだかまり解けて握手がまだ固い
あれこれと仕上げた妻について行く
都庁舎四十五階五十五秒

東かがわ市 中塚 寿々女

自然界怒って地球の危機を告げ
天命と思いい流れに逆らわぬ
長い冬堪えて柿の実春を待つ
悠久の都に友と紅葉狩

香南市 桑名 孝雄

制空権の争奪妻に握られる
しよばくれた顔でトボトボ妻のあと
暖衣飽食なんとかしてよ教基法
九条と組んで右四つハッケヨイ

今治市 塩路 よしみ

輪の中でおんな一会の風になる
まっとうに気軽に生きて世に恥じず
生き様をみんな知ってる影法師
舞い終えた桜見事な花吹雪

東かがわ市 向山 治延

夫婦道晴れや曇りや雨も降る
野仏はさぞつらからう排気ガス
生命線じつと眺めて今は何処
耳すませ徳利ふる手に桜散る

雲南市 菅田 かつ子

青い空見たくうずうず箱の靴
ちよっぴりとハートを揺する風に会う
ハミングの後ろ姿が嬉しそう
夕食のメニュー決めたらはっとする

日立市 加藤 権 悟

さくらさくら日本の貌で咲くサクラ

花の宴みんな羅漢になるばかり

反論のろし末席から生れ

ジョーカーを拾つてからの風の向き

草加市 飯土井 健 翁

良き友に恵まれ知識ただ貰い

自信ある話努力の末に出来

根性で歩く明治の百の杖

詳細に読めば新聞からも知恵

柏市 河野 桃 葉

愛を知り生きる気力を取り戻す

美の極地桜ふわりと散り急ぐ

満開の桜に肩の荷を降ろす

虫干しに母の形見がよく語る

東京都 笠原 乃りこ

終電の窓に整形決意する

苦を苦とも愚痴らず母はどこで泣く

手八丁 口八丁で上の空

手を焼いた子の札状に誤字がない

東京都 井上 つよし

イーゼルも歩き出したい良い天気

春一番裾を乱して駆け回り

何気無いひと言五寸釘に化け

晩酌は一期一会の味がする

横浜市 金森 徳 三

一週間ほんとに七日あったかな

ボケ開花まだまだ俺は呆けないぞ

寂しさはモンゴル同士覇を競う

あか切れが出来たと主夫の誇らしげ

高岡市 青井 はつえ

ドア叩く音にも容赦ない響き

親子連れ桜も祝うランドセル

ぐちるなら止めてしまえと叱られる

腹いっぱい食べておさめる腹の虫

静岡市 中西 雅

涙目をかくす喪服のサングラス

弁当の蓋の飯粒まず拾う

白寿まで頑張りたいと年賀状

お椀から鯛の眼にらみかえしてる

北名古屋 片岡 文 男

葉はたんに臺が立ちかけ冬終わる

コンビニの団子祖先へ義理をたて

薄墨の桜は悲し松葉杖

限界を予告するのも医者腕

佐渡市 高野 不二

神様も首をかしげる絵馬がある

年金の口座利子には無関係

平均年齢目前にして急な坂

通帳は五冊あっても利子はなし

可児市 鶴留百合

週末はギッシリ春の忙しさ
春めいて雨の周期も近くなり
よく滑る舌こっそりのアルコール
日帰りの荷物網棚座席下

大山市 吉田幸子

テンションが高くなりますいい出会い
優しさがずれても愛の心地良さ
待ち合せ携帯切れているシヨック
禁煙を即座に決めた理由ひとつ

尾張旭市 三浦きぬ

死ぬことは怖くはないが医者通い
戦中の初恋相手主人です
亡き夫に似た人ついに見付からず
悲しいね情性で生きているなんて

大阪市 平井露芳

水槽でメダカの学校しています
ビル風で大阪駅が渦を巻き
桃園で色とりどりの桃に逢い
九条は知らん私は葱とすえ

大阪市 吉川弘泰

遊んでも昔良かった朝帰り
料亭は器の良さで常連を
水掛けの青苔ほどに願をかけ
湯の旅で失恋の気を癒しつつ

大阪市 池上清治

叱られて覚えたマナー忘れない
溜息が出る銀行の低金利
綺麗でも危険が潜む銀世界
寒暖の不順桜を惑わかし

大阪市 寺井弘子

花いかだ花がとんで来る平和
宝くじ当ればたと寄付します
詠えの服が合わなくなる病後
こつてりを薄味にして生かされる

大阪市 吉内福世

満開のさくらの下で愚痴こぼす
春の花共に咲きたいのち抱く
あれこれと誘い笑顔で受け歩く
曲げられぬ私の癖も古釘も

東大阪市 大塚サキ子

ニートとは自分愛せぬ人と知る
よく降るね言える所に住んでいる
花見酒空気枕は主人用
妹は切り替えるわねと長電話

大阪市 平嶋美智子

また会いましょう握手の温み今もなお
ブラジルに飛んで句作りしてますか
一年を十日で燃やす花の意地
腹立ちを鎮めに町を一回り
(本間満津子さんを悼む 2句)

大阪市 中井 萌

うらかな春に水さす花粉症
はな丸を曆に付けた誕生日
夢ばかり追う子に若き日を想う
短めの経に喜ぶ痛い膝

泉佐野市 備後 三代子

天空を見上げみんなで待つさくら
満開のさくら豊かさ妖艶さ
水面にも花びらの浮く閑伽手桶
この世かもあの世なのかも花吹雪

泉佐野市 稲葉 洋

赤がいい老いのこの身に活くれ
出世よりたつしやがいいと寄る仲間
極限の節約だった戦中派
道楽はみんな悪いと言わないで

泉大津市 助川 和美

化粧品コマーシャルから春が来る
年金を手にするまでは別れない
妻の口マナーモードに出来たらな
古里の荷物広げるお付合い

柏原市 伴 洋子

涙目で必至に耐えている欠伸
また同じ話あくびを噛み殺す
女傑の噂妙に納得してしまう
真っ新な明日にそなえてオフボタン

河内長野市 宮守 正博

次の世も一緒と遺書に書けと妻
咳一つ気にしてくれる妻がいる
ボケたまねしているうちにボケがくる
黙祷をしながら少し目をあける

岸和田市 堤 植代

今が旬今が旬だと生きている
何事も口出ししない老いの知恵
楽をしているのに何故か物足らぬ
来なくてもいいのに黄砂とんで来る

岸和田市 中岡 香代

まわる寿司どのネタ見ても多国籍
手八丁口八丁も今介護
振り返る方法がある砂時計
喜びは手の平にのるだけで良い

堺市 阪井 智之

イチローに大和男の気概見た
ドロップを舐めて子供に舞い戻る
あのひとが逝った報受け星拝む
妻の目の届く範囲で遊んでる

堺市 羽田野 洋介

七色より白が眩しい古希の春
どっこいしょ苦勞をばねに今日がある
空よりも心の晴れる日がほしい
金婚に妻にやりたい金メダル

吹田市 二宮 栄子

怒るより褒める先生したわれる
割り勘の飲めない酒に誘われる
干し大根煮て古里を近くする
国会が近くになって面白い

高槻市 大崎 侑子

母なれば沈んだ声を聞き咎め
クラス会苦労話の自慢会
顔も名も浮かばず声に聞き覚え
花の京湧いて出てくる人の群れ

高槻市 安田 忠子

すぐそこ言われ歩いた一時間
OB会現役どおり席に着く
スキーから帰ったとたん花粉症
津和野路の丸いポストに会った幸

豊中市 荒巻 夢

憂き日には鮎玉ひとつ転がせり
隠したい心のありて厚化粧
褒められて素直に嬉し歳となる
歯に衣着せてどうにか保つ仲

豊中市 源田 啓生

落花よし我が生軽きを耐えている
効く効かぬサブリメントに迷う春
言葉ひとつ飲み込んでいる花の下
ヒルズ族そんなクラスは夢として

富田林市 古田 千華

七重八重心の姿垣間見え
訳ありが出処進退決めかねて
夫婦して作る料理に利害なく
凄いゴミ残して去ったピエロたち

寝屋川市 長濱 賢山

似たような内容ばかりテレビ界
公的資金聞こえはいいがみな税金
ごみの山不景気なんか寄せつけず
反抗期暴れまわって成長期

羽曳野市 永田 章司

口論の絶えない夫婦楽しそう
二の足を踏んで奈落を救われる
不景気もどこ吹く風の人の群
机上論いつも甘めに出る数字

羽曳野市 松本 静子

私にも意地がありますやり通す
童謡は心の中のこる詩ばかり
春休み子供の声が聞けうれし
ボランティア自分のためにしているの

羽曳野市 森下 一知

落ちこぼれなどと言わせぬ種の意地
定位置に胡座をかいて居るウサギ
失敗の勇気がコツを掴まえる
馴れ合いが積る埃を叩き合う

羽曳野市 吉村 久仁雄

気晴らしは雨に散歩の花粉症
人間を続け涙が乾かない
今にして父の拳固の温かさ
熟年の妻モナリザの笑みが増え

枚方市 二宮 紫鳳

幸せは孫と添い寝の夢の中
列島を桜前線衣替え
山菜の芽吹きにパワーをもらう春
食卓におふくろの味春づくし

枚方市 小川 良吉

老いてなお怒りの虫が蠢く
春風が老いの心の窓開く
距離おけば軽く暮らせる老いの知恵
嘘や愚痴僕の口からひょいと出る

藤井寺市 伊藤 アヤ子

どん底と言ってるあなた笑ってる
あの山も桜の花の裾模様
這い上がる気力をくれた春の風
ぬるま湯に甘えた人の頼りなさ

藤井寺市 津田 シルク

成功への道鈍行もよしとする
磯釣のみやげは高い鯖一尾
セピア色した想い出を大事がり
コート一枚脱がせ上手な春の風

藤井寺市 俣野 登志子

春の風黄砂にとける桜花
花いっぱいどこに飾るか誕生日
やさしい言葉萎えた心に染み透る
黙ってただけの私にとばかり

藤井寺市 吉田 喜代子

我が世の春大見得切っている桜
よろしくと頭を下げているさくら
おはようと迎えてくれるつくしんぼ
連休も毎日続く自分流

藤井寺市 西村 栄一

近すぎてあなたの影をふみすぎる
センバツに母校の名あり春がくる
泣いたらあかん歳がばれます厚化粧
辛抱がモンペを履いた母だった

箕面市 寺井 柳童

お隣も静かに宴カニ料理
鶯の声にも覚え良い悪い
赤信号生めや殖やせの大合唱
七十年生きた重みの独り言

八尾市 西川 義明

寂聴の法話に消えてゆく迷い
路地裏で遊んだ頃のおき昭和
靖国へ外野の野次も耳に舐脂
精神鑑定増えるニュースが多すぎる

八尾市 中島春江

大阪府 神野千恵子

華やぎの最中の愁い花吹雪
他人様後の祭りを言うてはる
知恵袋ほころびて縫う糸ほしい
本皮の犬に化繊の服着せて

八尾市 笹倉ひろし

大阪府 西川冷子

吉本のように話が進まない
今日もまた青息吐息救急車
アルバムに内気な頃の妻がいる
自画像が褪せてどうにも直せない

八尾市 田中トシエ

大阪府 島田誠一

賑やかで歳を持たない女です
ふんぎりの悪い頭の冬帽子
携帯に伸びてしまった冷しそば
定年のない老妻のストライキ

大阪府 小栢こずえ

大阪府 大屋敷婦美子

根気良く付ける記録に励まされ
人相を表わすように木々の芽が
買わないで店見て歩くウォーキング
恥じらいを脱ぐよに皮をぬぐさくら

大阪府 若月祐作

神戸市 武田恵美子

老いたとてときめきながら生きていく
晩酌は明日のパワーと信じてる
悪びれず三代続く古時計
退職の記念時計はリズミカル

朝露がきらり何だかい予感
指きりの小指の先にある故郷
約束に背中押されてまた明日
春風と約束交わし咲くさくら
逝く時は乗せて頂戴花筏
手に馴染み感謝の筆の供養塚
年金ギヤル動ける間これで行く
八方美人あなたの本音どこの棚
美人局出会い系へと世の移り
屁理屈が通れる幅を読んでいる
キッチンに鼻歌が消え妻の乱
痴話ゲンカ原因よりも言葉尻
買いおきしひとり甘酒ひなまつり
古希すぎて心のひだに光みる
忘れずにつばめ飛来し巣がひかる
明日がない別れのつらさ老いの身は
こんにちはハイとでてるインコちゃん
ひとめみてはれたる嫁は我が宝
笑いごとですませるものか腹が立つ
私の手とりあいした子ババとママ

尼崎市 古川 正子

塗り小箱亡母の形見タンスの中
菓子箱のきれいな物は捨てきれず
編物の手の休まずにラジオ聞く
山土の香り懐かし甲山

三田市 辻 開子

春近い朝寝が恐いゴミ出し日
いっぽくのお茶楽しみで土いじる
ウィニーも株の世界も脳に距離
盛り上がる日本にひとつイナバウアー

三田市 阪本 藤朗

脳細胞気にしているが今日も酒
百均の湯のみで玉露泣いている
お見合いのキャリアで妻に負けていた
陋屋に忘れずに来る資産税

三田市 白井 二英

生活を指示してくれるカレンダー
咳払い一つしてから受話器とり
ボロボロにローテーションを考える
鬼つけるつもりで来たがつけられる

三田市 上垣 キヨミ

席に着きすぐに寝るのも芸のうち
待ちわびた春に出費の目白押し
買物に誘う娘の下心
支払いに追いたてられる五十日済む

宝塚市 河津 寅次郎

路地裏に昭和の匂い足止める
無味無臭の水も煮立つと匂い出す
頭垂れ真実隠すオジギ草
不祥事に並んで侘びるだけの役

西宮市 石野 照代

習い事誘った友が先にやめ
和を乱す人が休むと輪ができる
指の型似ていてやっぱり親子だね
化粧するだんだん他人の顔になる

西脇市 七反田 順子

ビッグニュース嬉しくなつて種をまく
酔いどれに妻の角笛高くなる
春雨に小鳥の会話弾んでる
口笛が吹けるまだまだ見込みある

兵庫県 永井 かほる

味噌作りこうじ作りに愛をこめ
満足の麴が出来て味噌仕込む
友も来て故郷さくらみて楽し
吊橋ではって通れる勇氣欲し

兵庫県 黒崎 美紗子

耕せば答えてくれる野菜たち
体操をすませゆつくりする日課
春よ来い並んだ夢よ苗売り場
車間距離あけずに停めて困らせる

加東市 岩 本 美緒子

暖かさ待つ気まま旅春景色
輪の一つ抜けて気ままの首を出す
こだわりを消してくれるは筆だった
これからはきれいな想いだけ胸に

奈良市 乾 春 雄

迷わない愛のレールは一直線
ブランコが風と遊んで夕暮れる
全力で負けたきれいな汗を褒め
万歩計要らぬ二人の散歩道

奈良市 矢 野 良 一

旅立ちも新幹線で素っ気ない
ブルースは雨と夜霧と港町
王ジャパンホットに燃えて世界一
ホーホケキョ心うさうき散歩道

京都市 榊 本 宏 子

去年は走ってバスに乗れていた
激しい雨止むと予報を信じて寝
あこがれたフリーの身にもある試練
虫どもが出番うかがう初夏の土

生駒市 小 西 稔

目にしみるいろりの煙なつかしい
男なら一度は見たい浮気ゆめ
拉致事件せつない別れ親心
旧友とせつない別れ今年また

和歌山市 根 田 よしこ

気がつくといれんげ畑が消えている
損しても田んぼを守る心意気
休耕田お花畑に変えたいな
入浴剤入れてゆつくり今日閉じる

和歌山県 村 中 悦 男

レベル差のあるはずがない母の愛
雨だれを聞きつつ二人ティータイム
今日生きる過去の誤算をのり越えて
レベル差があつて世間が生きている

和歌山市 田 中 す ず

山の向こうで受け止めてやる稔の私語
切り取り線跨ぐと楽になつてくる
踏切の真ん中辺で赦されよう
事の起こりは火口覗いたあとの悔い

海南市 小 谷 小 雪

きょう生きる命弾んで花ひらく
夢つかむ両手のなかにアベマリア
れんげ草遅咲きもみな群れになる
母の愛でんこ盛りした梅にぎり

鳥取市 河 田 のり代

花見酒外で黄砂が邪魔をする
買わないと言つても見れば買う土産
認知症時々使い世を泳ぐ
玉手箱空想しては夢に生き

倉吉市 前田 喜美子

こっそりと人の噂は派手に飛び
独居では喧嘩も出来ぬお月様
喜べぬ長寿こっそり生きて行く
教えたり教えられたり核家族

倉吉市 大森 孝 恵

取り敢えず相槌だけは打っておく
限界を少し残しているゆとり
煩惱は捨てて興じる花の宴
見栄張ったツケが忘れた頃襲う

境港市 遠藤 那珂子

貰い物私のそばで生き返り
ロマンスを流し浮かれて散るおとこ
海渡りロマンみつけて来るつもり
明るさを發揮しすぎて息が切れ

境港市 中井 虎 尾

美男子や美女が悪事をする異常
人のもの同じ品でも良く見える
春告げるためにうぐいす上手く鳴く
酒飲みが甘酒に酔う四月馬鹿

米子市 猪 森 スミエ

いい仲間人差し指に集まろう
こっそりと煙草を吸った換気扇
百葉の長と信じて疑わず
土壇場になって拝んだ百度石

米子市 小 塩 智加恵

何事も勝つ心意気捨てません
おみくじは凶でも今日は明るい日
草生える土地があるから幸せだ
打ち明ける最後の友も消えました

鳥取県 大田 勝 誉

母が近く手厚い看護されながら
辛抱か待つて得たもの手放さず
うなずけば自慢話がおどり出す
頭上に描いていつもまちぼうけ

鳥取県 飯 野 菖 子

耕した土に恵みの雨祈る
雑草も祈りかなって春が来る
たつぷりと想い出くれた星の空
春の陽をたつぷりもらう路のとう

鳥取県 岡 村 孝 明

お茶受けのケーキに意欲湧いてくる
宴会の鬼へ近づき手を結ぶ
健康な長寿を願うダイエツト
意を決し火の輪を抜けて運開け

鳥取県 橋 谷 静 江

後になり先になりつつ五十年
二度とない人生ですな平凡に
喧嘩にはならない夫は黙るから
春の花早く咲きたく競ってる

松江市 相見 柳 歩

湯を取らずあえて氷をつかむ道
独り者月に一度ははしやぎたい
新調はしません生まれ変わるから
通り雨けつして恋の邪魔はせず

松江市 福間 左 余

すたすたと山路に燃やす血糖値
見栄はまだ若いですよと紅引かせ
一言を話題にされて目の置き場
今年こそコンニャク作ると言い触らす

安来市 原 煩悩児

春めいてまだときめきがある老い達者
春燦燦まだまだ燃える男意気
飲むためにある酒などという理屈
戻り寒老いには都合よい炬燵

府中市 岩 本 雅 代

シルバー席涼しい顔で腰を据え
にぎり飯昔話が転け出る
金運の良い手で玉子つかみ取り
花見宴野仏尊に缶ビール

府中市 馬 場 利 子

好き好きと今なら言える遠き人
草笛と踊ってみたい影法師
紫陽花の青に溶けあう今朝の雨
気まぐれなわたしを許す砂時計

府中市 藤 岡 ヒデコ

この春も花は私をそそのかす
脇役にきんぴらごぼうなどいかが
くすぶりの煙は酒で消すことに
それなりに舞ういち日の時間割

宇部市 高山 清子

火の車運転苦勞の母の腕
本心を聞かず別れて寝つかれず
決めつけてくるから反発したくなり
ひめゆりの塔へ涙の同世代

第25年度 夜市川柳 (題と選者)

	(題)	(選 者)	(締切)
第1回	「歌」	鈴木 公弘 選	6月末
第2回	「顔」	播本 充子 選	7月末
第3回	「腰」	前田 咲二 選	8月末
第4回	「影」	高田美代子 選	9月末
第5回	「魚」	新家 完司 選	10月末
第6回	「力」	春城武庫坊 選	11月末
第7回	「煙」	平田 朝子 選	12月末
第8回	「海」	但見石花菜 選	1月末
第9回	「運」	三宅 保州 選	2月末
第10回	「馬」	天根 夢草 選	3月末
第11回	「銀」	大野 風柳 選	4月末
最終回	「天」	小島 蘭幸 選	5月20日

主幹・理事長の選任について

川 柳 塔 社

2005（平成17）年10月10日における同人総会の決定により、次年度以降、主幹・理事長の選任は投票制となります。

立候補者は期間内に事務所（06-6629-6914）へ申し出て下さい。

総 務 部

主幹・理事長の選任に関する規則

- 1 主幹・理事長を選任するための投票は、すべての代表役員・執行役員と相談役および参与によって行なう。ただし、会計監査は投票に参加せず、選挙を管理して投票結果を常任理事会に報告する。なお、主幹・理事長の選任に関する事務は総務部で担当する。
- 2 主幹・理事長を選任するための投票は2年ごとを原則とする。主幹・理事長の立候補がない場合は、現任者について第1項の投票権者による信任投票を行ない、投票総数の2分の1以上の信任を得なければならない。立候補者が1名だけの場合も同様とする。
- 3 主幹・理事長の立候補資格は、同人歴10年以上の者とし、立候補者の推薦は15名以上の同人によるものとする。
- 4 立候補の受付は、7月1日から10日までに必着とし、投票は7月中に所定の用紙によって行なう。
- 5 この規則は、平成18年4月1日から実施する。
この規則の改廃は、常任理事会の決定によらなければならない。

愛染帖

新家 完司 選

逝く春を惜しむ団子の串の数

和歌山市 木本 朱夏

(評) 時も花も幻の如く流れ去り、その痕跡を留めるものは、わずかに団子の串のみ。

堺市 奥 時雄

徴兵を病で逃れ卒寿なり

(評) 甲種合格の頑丈な身体は前線で散り果て、蒲柳の質は長命を得た。皮肉な運命。

八尾市 高杉 千歩

年金がもし余ったら欲しい服

(評) もし余らなかつたら我慢する。つつましい暮らしの中のベッソス漂う「もし」。

柏市 河野 桃葉

ばらばらに食べる家族の菜を洗う

(評) 帰宅時間も夕食も「ばらばら」ではあるが、必ず帰ってきてくれる大切な家族。

大阪市 前 たもつ

高速船にぶつつけられたのはクジラ

(評) 普通速度なら避けることができるのだが……。先住権から考えても被害者はクジラ。

橋原市 居谷真理子

支えられ吊りさげられて吠く桜
空洞も見せて古木のありのまま
口紅も塗らず男は嘘を言う

尾崎市 田辺 鹿太

花吹雪ふつと私が居なくなる
一万歩ノルマのあととは缶ビール

八王子市 播本 充子

机にも相性があり眠くなる
好きな事してると消える藤麻珍

三田市 堀 正和

福耳をはめるしかない新生児
三杯の酎ハイでなる認知症

弘前市 福士 慕情

悪友と呼ばれ嬉しくなつてくる
双方に参謀がいて抹める事故

唐津市 市丸 晴翠

やり残し積み残してもまずは寝る

枚方市 丹後屋 肇

廃校の跡に記念樹咲き誇る

シドニー 坂上のり子

花よりも胆石痛い春だつた

鳥取県 竹信 照彦

孫と見るさくらはだんご食べながら

大阪市 板東 倫子

いやな事ばかりですねが御挨拶

藤井寺市 高田美代子

この歳へまたかと思う誕生日

河内長野市 坂上 淳司

政治屋の資質その一鉄面皮

堺市 加島 由一

知恵もなく汗で勤める他はない
行員をほつとさすためマスク取る

交野市 田岡 九好

この時は仲が良かった古手紙
定年の時もこのよな春だつた

鳥取市 永原 昌鼓

日に三度同じ顔見て飯を食う
寝て起きてまた寝て起きて共白髪

寝屋川市 籠島 恵子

お花見に行つてないのに散るさくら
あんぱんを安定剤にする夫

枚方市 海老池 洋

空想としばらく遊ぶ珈琲館

引き出しのテレホンカード持て余し

米子市 中井 ゆき

木の芽たち拝む形で春を受け

焼肉の匂わぬ山に桜見に

尾崎市 春城 年代

イナバウアー自信ゆたかな美しさ

香芝市 大内 朝子

金ないが笑い皺ならんとある

三田市 阪本 藤朗

赤ちゃんの肌を私も持っていた

和歌山市 田中 すぐ

丁寧シルバー席と書いてある

和歌山市 福本 英子

どなたさんと母に言われて風邪をひく

唐津市 北村 松風

友の名を呼び読んどけと弔辞置く

西宮市 西口いわゑ

幾歳月行きつもどりつ一行詩

富田林市 池 森子

駄菓子屋が匂う男を好きになり

和歌山県 三宅 保州

地球から落っこちそうな地動説

島取市 土橋 睦子

花も散り緑地に休む老いふたり

和歌山市 楠見 章子

雨の日がだんだん好きになつてくる

東かがわ市 池内かおり

雨の日は雨に唄えば口ずさむ

大洲市 中居 善信

ネジ巻いて叩いてみても古時計

西宮市 牧瀬富喜子

ほめことばもう過去形になつてゐる

島取市 有沢せつ子

番犬の人なつこさ姉に似る

大阪市 奥村 五月

怠けずにもっと歩くと万歩計

尼崎市 春城武庫坊

困った困ったまた真夜中に眼が覚めて

倉吉市 松本よしえ

図書券を買った世界地図を買う

盆栽に癒しの土を入れてやる

島取市 土橋 螢

還暦すぎた子に叱られる心地良き

武蔵野市 亀井 円女

激論を交した後はやはり酒

藤井寺市 鈴木いさお

ウォーキングお馴染みになる人と大

八尾市 生嶋ますみ

テリトリア広けています散歩道

西脇市 七反田順子

旨そうに箸高高と麺する

三田市 北野 哲男

こっそりとサプリメントを飲んで

吹田市 大谷 篤子

小うるさい私に猫も寄り付かぬ

松江市 三島 淞丘

ダイエツトする気で無理な服を買う

堺市 山本 半銭

聞き上手いつか裸にされてゐた

京都市 都倉 求芽

信します明日はきっと私の日

米子市 小塩智加恵

筍を炊く日本酒をたっぷり

豊中市 安藤寿美子

タンバリン叩くと気分乗ってくる

藤井寺市 鴨谷瑠美子

傾いた小屋に玉葱干してある

大阪市 川原 章久

コンビニのおでんを食べて気張ってる

堺市 志田 千代

残雪を見にのんびりと旅に出る

吹田市 太田 昭

終章は散骨もよし花吹雪

大阪市 津村志華子

無料体験ただほど高いものはない

大阪市 小泉ひさ乃

旅艸句集ひとつを友にする

島取市 福田 登美

裏通り色んな匂いあふれてる

岸和田市 雪本 珠子

賑やかな孫を預けて通夜の席

唐津市 久保 正剣

癒される里の夕日と鐘の音

交野市 山川日出子

ヘソクリの楽しみ知らず一人住み

八尾市 中島 春江

閻魔でも騙すだろうよ金パツジ

唐津市 山口 高明

胃腸薬ちよつと遠出をするつもり

藤井寺市 太田扶美代

春つらら桜見がてら墓参り

奈良市 矢野 良一

雲のかたちが変らぬうちにタネをまく

鳥取県 佐伯 やえ

玄関でリフォーム詐欺と攻防す

熊本県 高野 宵草

敬老だなど優しく差別する
小林 妻子女作市

嫌な奴くるぞ自転車回れ右
桜井 千秀和歌山市

ささやかなオアシスでよい伍ビール
古久保和子和歌山市

金持は貧乏人と喧嘩せず
岸本 宏章鳥取市

自衛策だんだん人が悪くなる
徳山みつこ羽曳野市

どちらかが病んだらわかる夫婦愛
瀧本きよし高槻市

闘病で培ったもの夫婦愛
岸和田市 土橋 房枝

看取る身と看取られる身の紙一重
高橋 岳水弘前市

手抜きして今日はゆつくり本を読む
青戸 田鶴米子市

口下手な男の嘘に騙される
中島 志洋藤井寺市

外見で人を見るから騙される
川崎ひかり東かがわ市

フランスのように年寄りデモすべし
啓子高島 京都市

納税を終えてことしの花見酒
初山 隆盛大阪府

デュエットの調子も合って五十年
西川 和子鳥取市

予定表あると元気が湧いて来る
小栢こずえ大阪府

絵馬二つ夫婦で違う願いごと
宗 水笑唐津市

ペンを買い修正液も買ってくる
山口三千子和歌山市

居酒屋にある私の没句塚
三浦 強一札幌市

河内弁のこす川柳二句三句
吉内 福世大阪府

雑詠の中から拾う美味な唄
田口 虹汀唐津市

反省をしても三日で血が騒ぐ
石谷美恵子鳥取市

要予約ややこしい店おことわり
井丸 昌紀大阪府

大嫌いだけど憎めぬマルチーズ
森下よりこ和歌山県

途中でやめる勇気も要ると知る八十路
吉村 一風八尾市

屁理屈を通して三日まだ無言
福西 茶子鳥取市

呼び止めもせぬタクシーのドアが開き
森 茜寝屋川市

もう離婚出来ない歳で立ち竦む
桑名 孝雄香南市

老人手帳へ都忘れが咲きました
榎原 公子和歌山市

泣き笑いして健やかに老いてゆく
三浦千津子大阪市

化粧水びしゃびしゃ叩く春の肌
岩崎 和子鳥取市

左遷地で情けをくれたのは地酒
藤井 正雄茨木市

テレビ点ける一汁三菜指定席
星野きらり大阪市

早食いの特技も老いて七分粥
稲葉 洋泉佐野市

よく笑う財布で中身いつも空
黒田 茂代西子市

戦争を知らぬ輩がラッパ吹く
中宇地秀四鳥取市

輪廻とや一人生まれて一人逝く
若松 雅枝藤井寺市

五分五分の数です僕の敵味方
喜田 准一和歌山市

丸めた背伸ばして被る春帽子
宮崎ヒサ子弘前市

誰も居ぬ所で脳を鍛える本
矢倉 五月堺市

くやしくて懸命に床みがいてる
北村 賢子東大阪市

お出掛けの時間早めに妻に言う
金森 徳三横浜市

踊ることもうないだらう赤い靴
渡辺 富子奈良県

誹風柳多留——一篇研究 10

山口由昭・小栗清吾
伊吹和男・山田昭夫

増田忠彦

清 博 美

62 物もふに風をはしらへくくりつけ

山口 「物申（ものもう）」は「物申す」の略で、他人の家に行つて戸口などで案内を請うときの言葉である（『日国』）。

情景はもちろん庶民の長屋などではない。武家屋敷の玄關先などである。玄關番は仲間か小侍。「ものもう」の声にすぐ出て行くはずであるが、暇にまかせてか、子供に頼まれてか風を揚げていたらしい。あわてて風の糸を柱にくくりつけて、玄關にすつ飛んでゆくのである。柱があるから庭であらう。大人でもたこ揚げには夢中になるものである。

物もふのたびに風からかけ付る

八 19

清 賛

物もふに手間をとらせる真ッぱだか 三 31

63 かこつけの仕廻か市とむすこ行キ

山口 かこつける【託ける】は原因、理由、動機などを、他の関係のうすいものにむりに結びつける。（『日国』）

江戸の川柳や洒落本に登場する息子是比较的大きな商家の息子で、遊び好きの道楽者という設定になっている。この連中は、やれ謡講だ将棋だ俳諧だと家の者には告げて家を出、遊里で遊び廻ることになっている。本句の場合も、年末の歳の市（十二月十七日、十八日の両日、浅草大通りが有名）に正月用品を買いに行くと言つて、その実吉原へ遊びに

行くのである。これが今年のかこつけの最後。

市に無ものをむす子ハかいに行キ

安七 桜 3

ぜんたいむす子市といふ形りてなし

安七 桜 3

清 賛

64 馬の跡足ははねるかしうちなり

山口 しうち【仕打】は、俳優の舞台での表情動作。こなし。しぐさ。（『日国』）

歌舞伎芝居の舞台に登場する馬は二人で演ずるが、なかなか難しい役で、かなりの修業が必要なのである。「塩原太助一代記・青の別れ」ならずとも、時代物の芝居には馬が度々登場し、重要な役を演ずる。前で頭を受け持つ人間はそれなりの動作を演じ喝采を受けたりするが、後足は前に従うだけで見せ場がない。そこで、後足は跳ねるだけだ、とやや揶揄して詠んだのである。

小池章太郎氏によると、今日では馬の役は下級の役者が演じ、一口に「馬の足役者」などと言われるが、江戸時代、馬の役を演ずるのは大道具方、楽屋番の専任で、役者は演じない。犬、狐、猪などは「稲荷町」と呼ばれる大部屋役者の担当だったのである。

従つて下級役者をからかうのに馬の脚を扱った川柳が多いが、これは川柳子の誤認で、後に変化して役者もやるようになった可能性があるという。(考証江戸歌舞伎) 本当は馬の脚は重要だったのである。

顔見せに顔をみせぬハ馬の足 四二一九

長せりふせつなかつてる馬の足 七六六

跡下足ハへのこわ色でおちをとり

安七信五

清 賛

65 是切のこねとりぐつとさし上る

山口 こねどり【捏ね取り】は、餅を搗くとき臼のそばにいて、搗き手が杵で搗く合間合間に餅を捏ね返すこと。また、その人。

餅搗きの情景である。餅を搗き終わつたところで、捏ね取りが「これまで」とその餅を差し上げて、延したり丸めたりするところへ

持つて行くのである。「これきり」が一白搗きあがり、杵の動作が終わつたことをいうのか、永く続いていた餅つきが全部終わる、最後の餅のことを言っているのか定かでない。しかし、見世物の口上などで、「本日はこれぎり」などというから、その意も含めて後者

としておく。

こねとりハ尻のかゆいをもてあまし 九二四

こね取りの腰をのし餅か、み餅

ケイ一五六

旅送り江戸是きりの所迄テ

五三二一

小栗 バレ句だと思ふ。杵で搗くと、相手方が「もう是れで死ぬ〜」とぐつと差し上げ

るのである。

こね取りハ先きをぬらしてさあといふ

明七仁四

こね取りが上手でうまひ音をさせ

宝十楼三

の二句が、「最破札」ととられている事実は無視できぬと思う。「そもも読めるところが技巧の句で、あなたもひつかかったね」という批判は甘んじてうけるが、少なくともそういう連想は(否定するにせよ)触れておく必要があると思ふ。

山田 私は、本句の表の意はやはり礎の通りで、バレは裏事情とすべきと思つています。

清 餅つきの句には、どうもバレ味を連想させるところがあるようだ。どちらに解するかは個人の勝手、作者はそのつもりのはずである。

66 御局の病氣引とりての多さ

山口 御局は宮中や江戸城大奥で局を与えられていた奥女中のことだが、このお局は病氣になつても引き取り手が確定していかないらしい。「宿下り」という言葉もあつて普通は親元に引き取られていくのだがこの句は違ふようだ。あるいはなにか事情があつて、親元に引き取られてから後の看病をしてくれる場所や人を探しているのかも知れない。ともかく奥女中を長年勤めれば、沢山のお金を貯めていたり、着物なども持つているからそれを当て込んで看病の希望者が沢山出ることか。

落語の「たらちね」などでも、八五郎に「女として夏冬一通りのものは持つてくるから」と大家が元御局との縁談を勧めるせりふがあるが、庶民から見ると金持ちだったのである。

かたい金百も御局にぎつてる

案六礼六

ござの金御局そつとかりはじめ

四一〇

―放蕩による逆のケースか。

増田 賛。端女とはちがい一生奉公だから、下がる時には病氣ということにする。病氣は名目でしょう。

清 賛

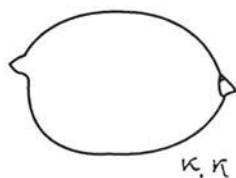
共選欄

檸檬

檬

抄

(薫風書、カットとも)



「懐かしい」

仁部 四郎 選

入社時の写真に出会う退職日
懐かしいタンゴを踊る丸い背な
懐メロのリストにあったはずわたし
懐かしい一本杉に虹が立つ
土いじり懐かしむのはDNA
懐かしい味で老舗は生き残る
懐かしい言いつ衣裳の勝負する
平手打ち受けた恩師と酒を酌む
先生がまだお元気で兄に還る
同窓会半分ほどの懐かしさ
みよちゃんもかず坊もいるクラス会
嫁にください言うた勇気を懐かしむ
二幕目がなかった恋の懐かしさ
単線の駅で出合った国訛
懐かしい人が住んでる通過駅
懐かしい人だが会わぬ方がよい

大阪市	伏見	雅明
吹田市	大谷	篤子
四條畷市	吉岡	修
砂川市	大橋	政良
京都市	榎本	宏子
東かがわ市	池内	かおり
大阪府	西川	冷子
唐津市	山口	高明
羽曳野市	徳山	みつこ
八尾市	村上	ミツ子
和歌山市	玉置	当代
大阪府	澤田	和重
茨木市	藤井	正雄
富田林市	中井	アキ
出雲市	岸	桂子
豊中市	田中	正坊

「懐かしい」

藤田 泰子 選

懐かしい地名を消した大合併
懐かしい人を連れ去る花吹雪
懐かしい写真をすてる時が来る
苦学した二階は確かこの辺り
おんな風呂空にしてたというドラマ
校門に懐かし二宮金次郎
ソロバンを置いてる小さい文具屋さん
春闘という懐かしいあの言葉
初めての転勤千里ニュータウン
懐かしい人だが会わぬ方がよい
憎かりし人も懐かしい花まつり
時々子供に返る母の下駄
捨てられぬ母の遺した鯨尺
母さんがいたらと思う木の芽あえ
郷愁の真ん中にある母の顔
今は昔口バのパン屋はもう来ない

神戸市	伊勢田	毅
堺市	西村	りつえ
境港市	遠藤	那珂子
八王子市	播本	充子
大和高田市	鍛原	千里
佐倉市	岡井	やすお
和歌山市	楠見	章子
吹田市	穴吹	尚士
寝屋川市	森	茜
豊中市	田中	正坊
京都府	稲葉	冬葉
日高市	根岸	方子
豊中市	水野	黒兎
西宮市	門谷	たす子
藤井寺市	太田	扶美代
奈良市	米田	恭昌

アンダーライン父の手垢の沁みた本
 アルバムの妻もしている真知子巻き
 鏡掛あげると亡母の小引出し
 路地裏でゴハンデスヨと呼ぶ夕陽
 ニツケ水時どき買つて飲んでいる
 駄菓子屋へ少年の日を買いに行く
 懐メロの軍歌少うし遠慮して
 軍歌しか吹かない父のハーモニカ
 懐かしい地名を消した大合併
 懐かしい人には夢で逢う特技
 地蔵さまあの泣き虫でございます
 春闘という懐かしいあの言葉
 懐かしいがやっぱ悲しい昭和の世
 神風を信じた若さ懐かしい
 青春は国防色と日章旗
 赤旗を振った若さが懐かしい
 今年また千島桜は咲くだろう
 今にして飢えた戦後も懐かしい
 長姉のちらしは母の味になる

秀句

軸吟

懐メロで二次会労使同期会

三田市	久保田千代
三田市	北野 哲男
大阪市	津守なきさ
池田市	北出 北朗
寝屋川市	籠島 恵子
弘前市	高橋 岳水
香南市	桑名 孝雄
尼崎市	田辺 鹿太
神戸市	伊勢田 毅
西宮市	秋元 てる
堺市	加島 由一
吹田市	穴吹 尚士
熊本市	永田 俊子
唐津市	吉富 節子
大阪市	柴本ばつは
鳥取市	岸本 宏章
札幌市	三浦 強一
高知市	小川てるみ
京都市	高島 啓子
豊中市	江見 見清
伊丹市	山崎 君子
佐渡市	高野 不二

アセチレン臭う夜店の鉋細工
 満州中支の地名を聞くと懐かしい
 はったい粉タイムスリップさせてくれ
 コツパン見ると自然に手が伸びる
 懐かしい白ツメ草の首飾り
 摘み草の匂いが若い手に戻す
 ふるさとの五右衛門風呂にほつとする
 帰省子の涙にかすむ津軽富士
 どの子がほしいあの子ほしいと遊んだ日
 懐かしい音で水車が回り出す
 ガス灯の匂い懐かしバーグマン
 古き良き時代の音を葦音機
 懐かしいタンゴを踊る丸い青な
 カチューシャの歌蘇る青春譜
 ニツケ水時どき買つて飲んでる
 地蔵さまあの泣き虫でございます
 懐かしい場所へはひとりだけで行く
 揺り椅子と赤毛のアンを読み返す

秀句

軸吟

喧嘩ばかりしていた夫が懐かしい

岸和田市	井伊 東吉
尼崎市	春城武庫坊
大阪市	中井 萌
枚方市	寺川 弘一
出雲市	伊藤 玲子
京都市	都倉 求芽
日立市	加藤 権悟
黒石市	相馬 一花
東大阪市	北村 賢子
大洲市	花岡 順子
島根県	伊藤 寿美
大阪府	米澤 徹子
吹田市	大谷 篤子
和歌山県	木村 徑子
寝屋川市	籠島 恵子
堺市	加島 由一
堺市	矢倉 五月
橿原市	安土 理恵
和歌山市	古久保和子
弘前市	高瀬 霜石
鳥取県	小西 雄々

蛙

須郷 井蛙選



疲れても姿勢崩さぬがま蛙
ジャンプした蛙いったい何処へ行く
哲学を持った蛙が動かない
雨女私の前世はあま蛙
井の中の蛙に重い答案紙
めかしてもどうにもならぬひき蛙
両手つく殿様蛙が見せる礼
蛙にも妻あり子あり家もある
殿さま蛙お前に家来いないのか
ほっとする神社の池に蛙住む
よく聞けば蛙の国は歌手ばかり
参観日れが吾が子と親蛙
食べ終えてあれは蛙と知らされる
井戸を出るチャンス狙っている蛙
無事田植すんで蛙は生き返る
拉致されたように蛙が居なくなり
後継ぎの嫁を心配する蛙
古井戸やその後カエルは街へ出た
住みにくくなったと嘆く蛙たち
好きな子の背中に入れる雨蛙
人生を楽しく生きて行く蛙
殿様になつて帰つて来た蛙

勝 巳 悦 子 重 人 シマ子 岳 水 朝 子 俊 子 一 花 俣 子 ヒサ子 半 覚 晴 翠 克 治 茂 代 典 子 九 好 一 知 美 義 百 合子 まみ子 敏 子 准 一

疎開地の蛙で飢えをしのいだ日
そのうちに跳ぶかも知れぬ痩せ蛙
とびはねる蛙を知らない都会の子
飛び込んだ訳は知らない芭蕉翁
紫陽花が好きでたまらぬ青蛙
保護色の好きな蛙の好奇心
六月だ合唱出来る雨蛙
噴水に打たれ蛙の春うらら
土じり夫と蛙お友達
高望みしない蛙の子は蛙
蛙跳びしてでも君を物にする
寄り道をせずに帰れと蛙鳴く
田植え頃夜は蛙のコンサート
工事完了カエルの棲める川がない
無人駅蛙の歌に迎えられる
住

蛙の歌もう聞かれない都市砂漠
休耕田ソロで唄っている蛙
蛙の子親子揃って公務員
合唱の蛙平和を人に説く
井の蛙飛んでみたいいな青い空
人
雪解けを待つて球児の蛙飛び
地
水涸れてダムも蛙も不眠症
天
跳びつかめ蛙になった現代っ子
軸
俺に似た蛙で語らぬ通信簿

あすま 登美代 照子 寅次郎 愁女 碧 銀波 美紗子 (岩)和子 みつこ 柳歩 キヨミ 徳三 霜石 幸雀 活恵 遠野 智加恵 花匠 千里 慕情 正剣 井伊東吉

湿 気

佐藤 治代選



湿り気のある君の手が大好きだ
青空へ湿ったところ捨てにゆく
定年晴れ間わたし丸ごと天に干す
つゆ晴れ間わたし丸ごと天に干す
ほどほどの湿気が欲しい愛一途
加湿器と仲良く暮らす冬の部屋
しめり気欲しい女の肌も苔寺も
子の巣立ち湿気を帯びてくる老後
湿り気がないとつっぱる顔心
春の野に心の湿気吐いてくる
喪服脱ぎカラリ乾かすピアホール
からからの心あなたの慈雨を待つ
愛という湿気がかたてゆくヒト科
菜種梅雨じとじと汗の独り言
湿っぽい空気を換えた孫の声
ババの靴明日も頼むと除湿剤
雨つづく手から足までカビ臭い
懐もこの増税じゃ湿りがち
お肌しっとり羨ましいね若い人
雑巾が乾いたままの主婦である
ユーモアがほどよい湿気呼ぶ会議
歯車が軋んで渦の中にいる

柳 歩 (奥)五 月 隆 盛 典 子 美代子 俣 子 富 子 (矢)五 月 敏 子 哲 男 たず子 朝 子 柳 弘 (吉)幸 子 晴 翠 英 子 修 いさお (志)千 代 悦 男 ゆきの

適当な湿気が旨い酒作る

貧富の差どうも話が湿っぽい

言い勝って心の奥が湿り出す

バラ抱いて胸の湿気を発散す

言い訳をしては空気を湿らせる

塩壺の湿気へ母の勤がやえ

開け放ち湿気もばくも追いだされ

六月の雨にバイブル徴くさし

不快指数また阪神が敗けよった

湿気とは淋しい妻が向ける背な

筆不精湿気のため返事する

楽天家ジメジメとした愚痴嫌う

愚痴を聞く耳が湿気を帯びてくる

六月の湿気に凜と花菖蒲

男でしよ湿気は嫌と言いなはれ

佳

洞窟の湿気妖怪できそう

豪快な笑いで湿気吹き飛ばす

ペンは進まず除湿器の軽い音

雨の日の満員電車みな無口

お湿りがちよつぱり欲しい倦怠期

人

泣き虫の僕を支える蕎麦枕

地

泣きすぎて湿ったマッチ火がつかぬ

天

ウエットな僕だと誰も見してくれず

軸

空はにやにや臍の湿気を弾き出す

圭一郎

日の出

碧

愛論

扶美代

妻子

ミツ子

ばっは

北朗

虹汀

公誠

武史

慕情

愁女

美義

雄々

栄呼

螢

幸雀

霜石

子

伊玲

時雄

奥

時雄

長 閑

西内 朋月選



頂いた命長閑な陽を浴びる

洗濯もハミングが出る外は春

方便の嘘もつけずに春のどか

まどろみの耳へ竿竹屋のマイク

昼下り竿竹売も間延びする

ケータイを切つて長閑な春に居る

今日もまた花屋の花と長話

老人の健康講座聞く長閑

過去忘れ長閑な笑顔見せる母

のどかなあ山も畑もみな昼寝

大空へ長閑に溶けるシャボン玉

春宵の一刻さくら愛で酌まん

蓮華咲く畦で雲雀の声を聞く

春風に乗つてピアノの声長閑

受け入れて心のどかに尊厳死

長閑さの暮しに欲しい句詠点

チャンバラを朝から見てる人と居る

約束をみんな果たした日の長閑

欠伸でるのどかを嫌う赤いバラ

魂をあずけていいよ春の風

天国へ長閑に行こう千鳥足

鶯の声聞きながら花の種

死ぬ日までのんびりすると決めてる

口ぶりは長閑で的をつく老母

郭公が相手新聞読み返し

のんびりとのどかな恋をしています

沖の船ひがな一日見た祖父

首飾り作るつめ草手に溢れ

窓際も左遷も無くて古稀の春

猫二匹とお喋りをするお留守番

莫應敷いて長閑に生きる花の下

口開けた日向ぼっこに蠅が来る

夫婦舟ゆつくり漕いで春長閑

役終り身軽くなつて日々長閑

子が巣立ち時計の針が遅くなる

どか雪消えて桜が咲いた城下町

独り居の部屋でのんびり飲んでいる

佳

暖かい陽差しに長い立ち話

盃に花びらが散る独り酒

窓際が長閑に雲と対峙する

花曇り紙ヒコキに乗っている

陽だまりでのどかな午後の花ばさみ

人

いい湯だな活断層の上に住み

春の絵へ安楽椅子を二つ置く

雨垂れと禪問答を繰り返す

天

散る花を眺めて飲んでいる長閑

軸

高瀬霜石

公誠

四郎

銀波

圭一郎

時雄

まみ子

藤朗

典子

順子

伊津志

猿沓

注湖

セツ子

順風

美代子

婦美子

一花

正雄

方子

かおり

俊子

慕情

霜石

高瀬

霜石

高瀬

霜石

高瀬

霜石

初步教室

題一齒

三宅保州

「ワンポイント・アドバイス」

一人一句を取り上げると句の批評のスペースがとれ難いので、二、三句に絞ってワンポイント・アドバイスをさせていただきます。

原 頑固もち煮ても焼いても歯が立たぬ 美恵子
説明をしただけのいわゆる説明句になっていて、発想も平凡な感が免れません。そこからの作者の思いや訴えを詠むことを習慣づけましょう。例えば「歯が立たぬその頑固さに惚れました」とでも詠めば、結語に作者の思いがうかがえます。

原 下あこの歯お役が済んで屋根に越す 乃りこ
この句も、誰でも知っている言い伝えを詠んだだけの句に終わっています。せめて「屋根越えてからが気になる私の歯」とでも詠めば気になる思いが伝わります。

原 姉歯さんそんなワルにも見えないが たん吉
「歯」と言う課題の場合「字結び可」と併

記されていない限り、口の中の歯を意味する句を詠んで下さい。例えば「月」という題で「字結び可」であれば、空の月でない「月給」「一月」等を詠んでも可です。

【添削・批評句】

原 念入りに磨いて抜きに行く歯医者 幸雀
佳句ですが「念入りにやがて抜かれる歯を磨く 三木ひろし」と既句があり残念です。

原 口開けているのに歯医者話しかけ 萌
この句も既に同想句があり残念です。

原 歯がたたぬ妻に黙ってついでいく 亜希子
原 口惜しいが妻の小言に歯がたたぬ 孔一

二句は殆ど同想句で相打ちとなります。

原 人の歯で話す言葉も控え気味 福世

読者に句意が通じるでしょうか。

原 おねえさん 歯が浮くようなるんるんで みち代

五・七・五毎の一字空けは不要です。

原 歯に衣包んで諭す母の胸 俊子

「衣」は「きぬ」ですから「歯に衣を」に。

次の五句は字足らずまたは字余りです。

原 九条は戦争への歯止めです (日) 信子

添 九条の歯止めを外してはならぬ

原 美しく老いたくまらず歯をみがく 利子

添 美しく老いたくまらずは歯を磨く

原 さし歯さえ嫌々したのに入れ歯とは サキ子

添 さし歯さえ嫌だったのに入れ歯とは

原 抜けた歯の処理に困った日の思い出 婦美子

添 抜けた歯の処理を教えてくれた亡母

原 独り言美酒美食で歯が痛む ミヨノ

添 美酒美食の付け回ったか歯が痛む

原 入歯する無くてはならぬ邪魔なもの 京子

添 邪魔だけど助けてくれている入歯

原 余見して段差で倒れて歯が欠けて 忠子

添 歯が欠けるほども段差で蹴躓く

原 孫の歯はモロコシのようつまってる 賢山

添 孫の歯はとうもろこしの如詰まり

原 母を呼び痛いを叫ぶ兄の虫歯 ただよし

添 子の虫歯母も歯医者も手こずらせ

原 歯がゆいと子には言えない孫のこと 藤朗

添 歯がゆいが孫の頬を子に言えず

原 眼には眼を歯にはやんわり包み込む 秀四

添 目には目を歯には歯を避け包み込む

原 歯並びの良さもついでにはめておく 百合子

添 歯並びのよさも褒められ買わされる

原 まっ白な入歯が齢をさばよまれ (高) 洋子

添 丈夫をそうですと入歯褒められる

原 歯の痛さ初めて知った七十四 冷子

添 古希すぎて初めて知った歯の痛さ

原 見合いでも歯車あつて共傘寿 松風

添 歯車が合った見合いでもう傘寿

原 歯が命いつまで生きるあと五本 早人

添あと五本になつてわかつた大事な歯

原歯に衣を着せぬ貴方と五十年 かずみ

添歯に衣を着せぬ貴方と共白髪

原念入りに自歯教えてる喜寿の春 智加恵

添丹念に残つてる歯を数え喜寿

原バックには歯間ブラシをなごし 御節子

添バックには歯間ブラシを潜ませる

原糸切り歯されぬ縁しをバット切る 那珂子

添糸切り歯如きで切れぬ深い縁

原お立ち台マイクに白い歯が笑い つよし

添白い歯が印象的なお立ち台

原歯心えがあり過ぎで居るふたり はじむ

添歯心えがありすぎ喧嘩するふたり

原歯の歯心えよくて夕の膳 みよ子

添歯の季節を噛み締める夕餉

原治療中ランク相談する歯医者 宏子

添保険適用しませんがと言う歯医者

原入歯して後から分る有り難さ 阿洋子

添だんだんと入歯に馴れるありがたさ

原心置きなく笑うため磨く歯 道子

添心置きなく笑うため歯を磨く

原歯の手入れ忘れた頃に痛み来る 稔

添痛みないときは忘れる歯の手入れ

原亡両親に感謝してます元氣な歯 千華

添両親に感謝してます丈夫な歯

原もう痛く無いのに歯医者まだ済み 千ヨミ

添もう痛くないのに終わらない歯医者

原親も逝きしくしく生えた親知らず 貞月

添親偲ぶ如生えだした親知らず

原あの秘密虫歯に詰めて墓場行き 弘子

添あの秘密虫歯に詰めたままに逝き

【少し工夫すれば住くなる句】

原イナバウアーたまに歯医者でやらされる 寅次郎

添イナバウアーもどきで治療される歯科

原分身になるため入歯格闘中 きぬ子

添格闘をしながら馴染みだす入歯

原美辞麗句ばかりと抜ける下駄の歯よ イセ

添下駄の歯が抜けた感じの美辞麗句

原大口を開けて笑えば入れ歯揺れ 益子

添笑つたら一緒に笑い出す入歯

次の十二句は傍線の部分が添削済みです。

添美人でも出歯があつてランク落ち 節子

添過疎進み歯抜けになった時刻表 賢治

添延び延びにして叱られる歯科の椅子 千代子

添イケメンの歯医者で縁がない虫歯

添貯金はいたいたインプラントを冒す 麗

添抜けた歯を天まで投げた日も昔 満子

添奥歯にもの溜めない嫁と仲が良い 幸

添親ゆずりの八重歯が家系継いでます こずえ

添親歯を見せて話す相手に気を許す 雅代

添歯を見せ話を相手に気を許す 孝明

添姑の入れ歯も浸けておく介護 宣子

添綺麗ねと褒められ入歯とも言えず 浩三

添ちつばけな歯車ですが欠かせない 武

【佳句】

歯が生えた立った笑った喜んだ

総入れ歯孫の不審な目に出合う 順子

噛み合わせ親子の会話聞く奥歯 和子

親知らず生えて未だに脛かじる 雅明

金婚式歯車合わせ日もあつた 起世子

歯の歯が欠け落ちていくクラス会 章司

年を経て馴れた入れ歯に助けられ 清

舌嚙んで弱弱と腹立てている 像山

人生の一こまだろう歯の治療 昇

【今月の推せん句】

自前の歯感謝しながら酷使する 木村 徑子

感謝しながら酷使というアイロニーが良い。

信号が変われば消える歯のいたみ 中塚寿々女

状況や思いようで変わるといふ示唆に富む。

歯を磨く暇がないのでリンゴ噛む 坂上のり子

シンドニーで伝統川柳を詠まれることに敬服。

歯車の数だけみんな生きている 相見 柳歩

人生を歯車になぞらえた比喩が利いている。

【私の句】

歯心えが欲しく六法全書読む

本人の決め手は歯型だけだった

秀句鑑賞

同人吟 高橋岳水

— 5月号から

告知せぬことを患者からぼろり

北野哲男

「解らない」という問題が付きまとう。

現代川柳は、個性の目覚めと価値観の多様化に伴い、叙情句への傾斜が強くなり、意味性を追求するものよりも、感性に訴える句が多くなって来ているように思われる。従って読者の共感度も一様には論じられない面もあるだろう。

先人の教えによれば、「鑑賞」の「鑑」は「かがみ」である。「鑑賞」とは自分の鏡に照らして読み味わうことであるらしい。

ひと度、作者の手を離れた作品は、どのように鑑賞されようと、読み手の自由に委ねられる。読み手の人生経験や言語体験によつては、作者の想いと重ならないこともあるだろう。

秀句とは、作者の感銘が鑑賞者の心の琴線に触れ、同じ想いを共有出来るものであろう。送られてきた一八九句の川柳に埋もれながら、独断と偏見のペンで「秀句鑑賞」を書き進めることをお許し願いたい。

医の倫理にもとるような事件が世の耳目を集めているが、患者の人權、自己決定権の尊重、インフォームド・コンセントの重要性が指摘されている。とくに終末医療や尊厳死に對しては、一家言を持ち書面にしたためて置くことをお勧めする。

国境も肌の違いもない夕陽

出口セツ子

太陽のエネルギーは、万物に対して平等に降り注いでくれるが、現実の地球上には、戦争・飢餓・疫病・民族間の不信感等が渦巻いている。平和を希求する祈りの句。

オクターブ上げた井筒だから嘘

加藤茶人

独善的な行為を指弾されると、やにわに責任転嫁をはかり、声高に自己弁護を展開する人がある。声を荒げるほど嘘の上塗りになり信用を失墜することとなる。時どきは、自分の感情や欲望をおさえることも必要。

純な芽でただひたすらに天を向く

政岡日枝子

ギリシャのエーゲ海にコス島という西洋医学の父と崇められるヒポクラテスゆかりの島がある。この島の中心地コス市の広場に「ヒポクラテスの木」というプラタナスの老樹があるらしい。この木の分身が多くの医療施設に植樹されている。私もお裾分けに与り、約二十年位経過し大木となっている。非常に生命力旺盛で、枝葉を丸裸の状態にしても、芽吹き春には葉が燦々と天を指す。人間の思考もかくありたいものだ。

ほろ苦い旬に五感が冴えてくる

松本知恵子

視・聴・嗅・味・触の五感が絡み合って、人間の存在を先導してくれる。旬の味を忘れ四季の変化に無頓着になれば、人間は退化の道を進むのではなからうか。

全身を触覚にする風みどり

山本希久子

初夏の頃ともなれば、全山若葉に覆われる。見渡すかぎり若葉の緑で塗りつぶされ、木々の精が全身の皮膚呼吸を賦活化してくれる。グリーンシャワーに身を横たえれば、日頃の鬱積した気分も、おのずと霧散して、明日への意欲を持ち帰ることが出来る。

プライドをかなり捨てた美味しい蟹

樋口輝夫

人間にとって、生存への第一義的本能は食欲であろう。プライドで食欲を抑え通すことは出来ない。座の少し乱れた宴会場に蟹が持ち込まれると、しばし沈黙の時間が過ぎる。

置いて転んで人間と戻す

原賢

記銘力の減退や足腰の衰えを、他人から指摘されたくないものである。自覚し、自制する人は実り多い老後を送ることが出来る。病識のない人は人間喪失のおそれがある。

一隅を照らしローソク燃え尽きる

高瀬霜石

敗戦の日本を廢墟から復活させてくれた団塊の世代こそが、一隅を照らし続けたローソクであろう。舞台から降りようとしているこの世代の英知と余力を、も一度社会に還元する術がないだろうか。

壁厚く自問自答を繰り返す

相馬銀波

わが国の食料自給率は約四十五%とされる。食の安全性からすると、値段が割高でも国産品を希望する国民が多いようだ。篤農家として、地域をまとめ、営農・流通・環境保全と八面六臂の活躍をされている。

不揃いに育ってみんな味がある

清原悦子

今日ほど個性が尊ばれる時代はないだろう。価値観の多様化に伴い、個の主張が尊重されていくと思われる。画一的美より、個性美が求められる。

余生より仕切り直してニューライフ

井上森生

時計の針に監視され続けた生活に、ようやく終止符を打つことが出来た。エピソードはあくせくとせず、心に余裕を持つて生きたいものだ。趣味の分野に時を割こう。

トラウマになる爪跡が胸にある

宮尾みのり

テロや不慮の災害に遭遇して受ける心的外傷は、身体的損傷よりも深刻なダメージを与える。予防こそ最高の危機管理であると言われて久しいが現実はどうだろう。

地下鉄サリン事件発生から十年以上経過したが、決して忘れ去ってはならぬ。

プログラム作り安心して眠る

津守柳伸

読みたくて読みたくて、とり寄せた本だったのに、掌中にあればいつでも読めると思い積読する次第となる。計画もさることながら実行に力点をおかねばならぬ。

目立たない心のおしゃれ忘れずに

星野きらり

外見も然る事ながら、心のおしゃれをしよう。イメージ脳の右脳が磨かれるという。何事にも好奇心をもって当たらう。

ブルドッグ神の妙技を見せられる

岩佐ダン吉

犬は家畜中で最も歴史が古く、旧石器時代すでに数種類あったらしい。バグやブルドッグの顔の造作に神のウイットを見てしまふ。守るべき家族があつて灯を点す

山本半銭

経済的には多少不如意であっても、団欒の灯を点し、家族の絆を確かめ合うことが出来れば幸福というものだ。妻や子のための踏み台となろう。

高いビル思えば怖い石の箱

井上照子

耐震強度偽装が発覚しなかつたらと思えばぞつとする。倫理の欠如をいかにして回復させるかが問題である。

お袋の味に計量器はいらぬ

平田実男

老母の目分量は実に正確だ。レシピは娘に伝承され、さらに孫へと受け継がれて、やがてはお袋の味と呼ばれるのである。

水煙抄

秀句鑑賞

—5月号から—

山口光久

追伸がやつと本音をしゃべり出す

二宮 栄子

本音は單刀直入に切り出し難いものです。色々と前置きが続いた後にちよつと本音を洩らす。追伸で効果抜群。本音ばかりだと誤解を招きかねないので注意が肝要。

意地捨てれば雨もやさしい音で降る

塩路 よしみ

自分の思う事を押し通そうとすると、とかくぎくしゃくするものです。一步引いて接すると和やかになり、心にゆとりが生れ、すべてに優しさが感じられるものですね。

良薬の苦さを忘れずにいよう

花岡 順子

人に忠告してもらうのは本当に有難いですが、「喉元過ぎれば熱さを忘れる」です。何時までも、良薬の苦さ、忠告の有難さを忘れずにいたいものです。同感。

いざ出番茶柱くつと飲み込んで

井上 つよし

茶柱は吉事の兆しとして元気をくれるもの。「さあ、これから出番だ!」という時の景気付けになります。茶柱を「ぐいっ」と飲み込んで事にあたれば結果はもう決まつたも同然。

想い出の中にモンベの妻が棲み

飯土井 健翁

若い人にモンベと言ってもびんと来る人は少ないでしょう。私の母もモンベ姿で元気よく働いていたのを思い出しました。なんと幸せな奥さんでしょう。

祝い酒無口な父がギャグとばす

布山 嘉信

寡黙な人は普段ギャグや駄洒落は苦手です。でも、吉事があつて祝の酒が入ると心底嬉しくなつて口も滑らかに。ギャグの一つでも自然と出るもの。いい雰囲気が目には浮かびます。

誤字脱字神もあきれる受験絵馬

中島 春江

受験生に限らず成人にも誤字脱字はいっぱい。神様に願ひ事の内容が伝わったか心配。啓蟄に老いの二人も顔出そう

辻 開子

寒気が緩むと年老いた二両親も散歩など。

生き方を変えてよかつた回り道

三浦 千津子

回り道には余分な時間と無駄があります。でも、その回り道の途中には色々なヒントがいつぱい落ちています。生き方を変えてよかつたですね。

生真面目が時に重たい枷になり

中井 萌

生真面目な人は皆から信頼され嬉しいことです。反面、融通がきかないことが欠点になります。時に、手かせ足枷になることも。

ブライドがあるから一人背をのぼす

堤 植代

ブライドは軽く軽くとタクト振る

七反田 順子

ブライドがあるから生きる力が湧いてくるのです。それが高すぎると困りますが……。

不覚にも妻の家に平和

木村 徑子

どのような不覚があつて家来になられたか知る由もありませんが、船には二人の長はいりません。亭主閑白か嬬天下か、どちらか一人の長の舵取りで平和になるものです。

気遣いを盛つて微笑む朝の膳

岩崎 和子

「気遣い」いい言葉ですね。私も大好きです。気遣いを盛つて朝の膳、一日が幸せです。



銀髪よ永遠に

——本間満津子さんを偲ぶ

神夏磯 典子

私が満津子さんに初めてお会いしたのは、三十二年前の城北川柳六月句会でした。故川口弘生先生から全盲の方とお聞きしていたのですが、それを感じさせない素晴らしい人柄に、すっかり魅せられてしまいました。その句会の夜、もっとお話したくて雨の中お宅を訪ねました。

それからデパート・旅行・句会など、こころ緒する事が多くなり、主人の夜勤日などは、夜十二時頃まで難解句など柳論をたたかわせたものです。本社句会でははつきりしたいいい声で呼名賞をもらわれ、句も毎回よく抜けました。お付き合いが深まるにつけ、色々の事を教わりました。

それから五、六年経った頃「いずも川柳会」で会場を移しての本社句会があり出席。葉先生の選で月間賞に輝かれました。

おしいゆうて少し哀しい活け作り
昭和五十四年には路郎賞準優秀作第一席を

受賞されました。

銀髪になったら着たい色があり
平成六年には川柳句集『銀髪』を出版。その中から私の好きな句を抜粋させて頂きます。

キリンにはキリンの皮がよく似合い
褒められてゐるばかりは淋しくて
すずらの香りを孫が手にくれる
よく売れて淋しくなつた風鈴屋

手袋をぬいで握手をもう一度
見えぬ手が背中を支えていてくれる

お茶一服飲めばなんでもない話

昆布煮る匂いの中に亡母と居る
あと味の良い終止符の打ちどころ

突然の別れスイツチ切るように
明日もまた会えると軽くさようなら

ひよっとして最後の一日かも知れぬ
後からの四句が、十年以上前に作られた句

なのに、満津子さんの最期と一致していて、
余計悲しくなりました。

いい息子さん二人。やさしいお嫁さんにも
恵まれて羨ましい限りでした。

次男さんは若い頃ブラジルに転勤され、結婚し永住されていました。その次男さんは毎年一回顔見せに帰っておられました。御家族一緒の時も何回かありました。その息子さんがこの度、一緒に暮らしたいとご長男に頼まれ、満津子さんの意志で承諾されました。

私がお話を聞いたのは、二か月ほど前でした。満津子さんは最初不安そうでしたが、最近ではすっかりその気になられ、浴衣や下駄を持つて行くと楽しそうでした。その息子さんが四月九日夜迎えに来られました。一緒に枕を並べて寝られどんなにか嬉しかった事でしょう。それが翌四月十日朝、眠つてうちに息を引き取られたそうです。朝八時頃お電話を頂き「嘘でしょう」と言い、涙が溢れてきました。あんなに喜び張り切つて居られたのに……。信じられませんでした。

満津子さんに出会つて人生観が変わつたと言えは大袈裟のようですが、そのくらい信念の人。長い間お友達にして頂いて有難うございました。

安らかに眠り下さい。

心から御冥福お祈り申し上げます。 合掌

病名 心不全 享年九十歳

本社 五月旬会

五月八日 (月) 午後五時半
ア ウ イ ー ナ 大 阪

栞忌の五月旬会は真夏日となった八日、一〇四名の参加を得て開催された。

まず四月十日、ブラジル永住を前に九十歳で亡くなられた本間満津子さんへ黙祷を捧げる。お話は板尾岳人理事長。栞先生のお話から急遽、満津子さんのお話に変更したと、その句と思ひ出を語る。人生半ばでの失明を乗り越え、最後まで矍鑠として、心の暖かさとして他人への思いやりを忘れなかったお人柄を、句を紹介しつつ、しみじみと偲んだ。

風のない十字路に立ち耳澄ます
銀髪になったら着たい色が有り

(五十四年度路郎賞準賞一席受賞)

栄光に戸惑い雲踏む二三日

手袋をぬいで握手をもう一度

突然の別れスイッチ切るように

(富美子記)

初出席は京都市の中野六助氏

月間賞は三宅保州氏 (海南市) に輝く。

(司会) 朝子・玄也 (記名) 月子・直樹

(受付) 寿美・義 (清記) 直樹

席題「迷子」

北野 哲男選

財布からすぐに迷子になる諭吉
梅田地下十年振りに来て迷子
ベアルックですと迷子の写真見せ
極楽に迷子が来たと思える
地図読めぬ妻が迷子にならず近く
迷子だと思うが声を掛けにくい
アナウンスわたり迷子にされてる
母の名はしつかり覚えてる迷子
迷子から見れば母さん迷ってる
迷子より親を叱っている巡査
こまごまなくてわざと迷子になって
デパートで妻にはぐれてうろたえる
八十三まで幾度迷い子今日生きた
まっすぐな道で迷子になっている
デパートで迷子になった娘も五十
迷子札つけたら花見連れて行く
ケイタイを持って迷子になっている
外国で迷子になって永住す
七十の迷子渋谷で腰抜かす
飽食で飢えを知らない子が迷い
良心が迷子になった事件事故
迷子札つけて青春続ける
探して不時々姿くらまされる
迷子ではないと胸張るちぎれ雲
泣きべそをかない親も子も共に
極楽へ迷子にならず近くつもり
赤い灯の街へ迷子になりに行く

弘 風 一 風 見 清 鐘 造 正 和 茜 萌 瑞美子 夕 胡 尚 士 楓 楽 冬 葉 ルイ子 篤 子 舞 夢 奮 水 はじめ 富美子 和 夫 扶美代 志 千代 鍾 造 完 司

日が暮れて迷子になりに行く夫
いずれなる宇宙の迷子地球号
妻の目を離れ迷子になりたい夜
鍵っ子は迷子になった事がない
悲しさは老母につける迷子札
世界地図日本迷子にならぬよう
かあさんの迷子わたしがさがす番
一人居に迷子の猫と住んでは
美しい嘘で迷子にされたまま
お小遣い持つと迷子になり易い

佳

迷い子のはなし聞かない渡り鳥
五歳の子母が迷子と言うて来る
雪女捜して迷子雪に舞う
父ちゃん僕ほつといてどこ見てた
目印がコロコロ変る戎橋

人

着メロに子猫の歌の迷子ちゃん
定年の駅で迷子になっている

天

泣く迷子お父ちゃんとは言わぬなり
見付かって迷子しつかり袖握る

軸

兼題「赤」

志田 千代選

お姉ちゃんになるのスキップ赤い傘
急ぐなと点滅してる赤信号
会いに行く赤信号は長過ぎる

見 清 利 昭 朱 夏 公 誠 楓 楽 耕 治 篤 子 柳 弘 完 司 正 昭 弥 生 耕 治 泰 子 公 誠 洋 文 子

過疎地にも赤いポストは凜と立つ
 梅に紫蘇ほどの赤な着られそう
 赤字でも父ちゃん一本つけてやる
 血色のよい爪カルテ異常なし
 途中まで御一緒しましょう赤い傘
 見つめると花はますます赤く咲き
 旅立ちの亡母へ最期の紅をひく
 墓石に赤字を入れて祖母達者
 台所赤ビーマンが手品する
 歯の痛み赤いリングも憎らしい
 エプロンの下で跳ねてる赤い服
 五月六日赤れで買うこののぼり
 別れの日の赤い靴で会え
 噴き出す血快感とみる子が増える
 医学書に赤線引いてあった亡父
 赤いのが似合い出したら年です
 赤飯をグラムで買つて祝う幸
 身体中赤信号が点き出した
 赤いべべ心に纏い折り返す
 好きですと言えぬ唇まだ赤い
 この夏は赤を効かせてクールビズ
 カーネーションは赤にしましたお母さん
 献血に参加出来ないまま果てる
 家計簿は決して見せぬうちの千代
 赤いバラみな幸せと限らない
 落書きの赤べつたりと世を掬ねる
 率直に言われ赤面しています
 もう何度赤恥かけば父の歳
 目が合っただけで耳朶もう真つ赤

富美子 茜 利昭 弥生 睦子 たもつ いさお 愛論 ルイ子 なぎさ 潤子 昌紀 アキ 求芽 保州 天笑 雅文 玄也 乃りこ 理恵 直樹 美代子 冬葉 遠野 洋 茜 美籠 たもつ 幸雀

究極の赤い糸です比翼塚

佳

赤を着て嫁の視線が目刺さる
 赤チンを塗った数なら僕の勝ち
 赤い舌今日はどなたを騙そうか
 似合っても似合わなくても赤が好き
 爪赤き女の捌くもんご鳥賊

人

そりやお前いくら何でも赤過ぎる

地

赤く咲くたつた一人に見せたくて

天

鴛鴦が赤の他人になる修羅場

軸

赤色に太刀打ちできぬ年となる

兼題「知る」

津守

柳伸選

出しやばつていてもアタクシ人見知り
 分別のゴミの日までも知るカラス
 ジャリタレのゴシップなんか知るもんか
 噛み合わない話年の差思い知る
 知らなけりゃ知らんで済んだお饞別
 知ったふり心貧しい僕になる
 姫鏡よ知っていますか淡き思慕
 知りすぎて抜き差しならぬハメになる
 知るほどにむつかしくなる習いごと
 飲んでから知った仲間もノーマネー
 知る権利役所相手に旗を振る
 お互いに触れてはならぬ古い傷

和夫 冬葉 和夫 月子 扶美代 文 いさお 泰子 幸雀 乃りこ 則彦 時雄 房弘 柳吉 義子 正房 淳司 正雄 朋月

各停で旨いお酒を知りました
 知るまでは軽口きいて居れたのに
 磨きすぎた鏡に老いを知らされる
 転ぶたび所詮独りと思ひ知る
 大海を泳ぐ知識を駆逐して
 デパートの化粧室だけ知っている
 友達元氣のもととは酒だった
 B面の君を知るまで有頂天
 優しさに弱いあなたを知っている
 今にして母に聞きたいことばかり
 本当の器量を椅子に見抜かれる
 知る権利それも程度よ嗜好き
 握手して君の遠さを思い知る
 片隅の鬼一部始終を聞いている
 その訳が知りたい捨てられたコップ
 妻と行く回転ずしで足るを知る
 知らん振りしてあげましょう好きな人
 置手紙見てから知った妻の乱
 明日よりも今日が大事と老いて知る
 家中の咳を知ってる母の耳

佳

新聞も読まない老母の知恵袋
 知らんふりしている深い思いやり
 蹟いやつと身のほど知りました
 雲行きで明日の天気を読む漁師
 人情の機微を知ってる笑い皺
 職終えて愕然とする妻の乱
 正念場こつそり妻の知恵を借る

かすみ 柳右子 恭昌 希久子 なぎさ 朋月 月子 修 阿キ 千代 尚士 求芽 真理子 文 阿キ 和夫 見清 淳司 一風 俣子 たもつ 好恵 理恵 章久 富美子 幸雀 萬的

天

限界を知っているから転ばない

軸

地獄耳ビッグニュースを暖める

兼題「タッチ」 藤田 泰子選

楓 楽

鬼ごっこ一番好きな子にタッチ

触るなど言うから触れてみたくなる

カシミヤのタッチに亡母という温み

古傷に触れないことが思いやり

名月にタッチをしたい露天風呂

唇で熱を計ってくれるママ

触診のタッチに熱も下がります

嫌いな人にタッチされると癌になる

口出しはしない気楽な孫のつもり

握手だけはいや抱きしめてほしかった

自分史を暗いタッチで書き進む

八十八夜春のタッチで摘む新茶

お仏壇バトンタッチがむつかしい

だんだんと悔しさが増すタッチの差

それからはタッチをしない花鉢

私に触れて感電した男

触れないで私のハートシャボン玉

自画像を軽いタッチで画いている

手袋をして触らせるルイヴィトン

魂の奥にタッチをする阿修羅

負けた時はいつもタッチの差と思う

削除キー風がタッチをしたらしい

触れないでワタシ崩れてしまいそう

修 一

鬼ごっこ心はタッチされたがる
 ワンタッチ安い傘に指かまれ
 タッチの差やつぱり汗の量やった
 明日の絵はラフなタッチで描いておく
 自分からタッチラインを割る策士
 タッチして眠れる獅子を起こさねば
 子へタッチした後何か淋しいな
 次世代にタッチするにも子がいない
 若者へタッチの民主もろかった

六 助
 柳 右 子
 ダン 吉
 楓 楽
 正 和
 森 子
 水 昇
 恭 昌
 柳 右 子
 美代子
 郁 夫
 直 樹
 昌 紀
 完 司
 ダン 吉
 美代子
 扶美代
 遠野選

兼題「悟る」

鶴田 遠野選

悟りには遠く泣きたい時に泣く
 もう年と悟りちんまり隅の席
 悟りには遠くそばんはじいてる
 衰えの影を共生する悟り

好 萬 的
 希久子
 はじめ

悟れないから人間を続けます
 悟りはった面白くもなくなった
 悟りきった顔でバリウム飲んでる
 一夜千し悟り開いたような顔
 窓ぎわの椅子が悟った裏の裏
 痛み消え悟り漂うデスマスク
 愚痴言わぬ妻は悟りか諦めか
 負け悟る想定内と自己弁護
 悟っても悟らなくても長寿国
 運命と悟りその気で継ぐ家業
 精進の悪さを悟る雨の旅
 小さくも働き抜いて得た悟り
 これ以上望みませんという悟り
 失恋を重ねて悟る恋の道
 悟り顔して聞いているお説教
 泣き笑いて人の世が見えてくる
 ありがたさつくづく悟る妻の留守
 娘の暮らして電話の声で悟る母
 浮き沈みしてから悟る世の情け
 悟られぬように息詰め蹴蹴く
 脳裏から女が消えた坐禅行
 何もかも悟った顔の昼の月
 悟りには遠く今夜も縄のれん
 結果論悟ったような事を言う
 押されるのと悟り歩幅を違えとく
 悟られぬように覗いた財布袋
 苦しみを悟られまいと母の笑み
 衣食住足りて人生悟りだす

幸 雀
 ダン 吉
 きよし
 昌 紀
 重 人
 一 歩
 正 雄
 哲 男
 章 久
 真理子
 希久子
 いさお
 玄 也
 尚 士
 弘 風
 淑 子
 文 夢
 舞 夢
 恭 昌
 篤 子
 みつ子
 ダン 吉
 舞 夢
 賢 子
 弘 一
 篤 子

川 柳 作品募集要項

～ 維新と川柳胎動のまち萩から ～

一、応募受付期間 平成十八年四月一日(土) ～ 六月三十日(金) (当日消印有効)

二、応募規定

(1) 作品 一人各題二句詠(未発表作品に限る)

(2) 応募料 一人につき一、〇〇〇円

(但し、海外投稿者、身体障害者手帳の写しを添付された方、及び小・中・高校生は無料とします。)

(3) 応募方法 山口県市実行委員会作成の「作品募集要項」をご覧ください、所定の応募用紙を使用してご応募ください。

(4) 応募先 〒758-8555 山口県萩市江向510 第21回国民文化祭萩市実行委員会事務局へ郵送

三、宿題・選者(事前投句) 高校生・一般の部

雲Ⅱ平山 繁夫(兵庫) 開くⅡ岩田 笑酔(静岡)

土塀Ⅱ井上 博(徳島)

走るⅡ黒川正之進(奈良)

(事前投句) 小・中学生の部

雲Ⅱ波多野五楽庵(青森) 開くⅡ安藤 紀業(東京)

走るⅡ小林由多香(鳥取)

(当日投句)

翼Ⅱ住田英比古(大阪)

きらきらⅡ渡辺 梢(埼玉)

夏みかんⅡ堀江 加代(千葉)

第二次選者

今川 乱魚(千葉)

柏原幻四郎(大阪)

木野由紀子(三重)

久保田半蔵門(大阪)

竹本瓢太郎(東京)

四、賞(予定)

文科科学大臣賞・国民文化祭実行委員会会長賞・山口県知事賞・第21回国民文化祭・山口県実行委員会会長賞
山口県教育委員会教育長賞・萩市長賞・第21回国民文化祭萩市実行委員会会長賞・萩市教育委員会教育長賞
(社)全日本川柳協会会長賞・山口県川柳協会会長賞

五、発表会場

川柳大会(当日投句受付、入選発表、選評、表彰式)

平成十八年十一月四日(土) 10時30分～15時30分 萩市民館

六、問い合わせ先と募集要項の依頼先

入選作品は、「作品集」として発刊し、応募された方(小・中・高校生は入賞者)に無料で配布します。

七、主催者

文化庁・山口県・山口県教育委員会・萩市・萩市教育委員会・(社)全日本川柳協会・山口県川柳協会

第21回国民文化祭山口県実行委員会・第21回国民文化祭萩市実行委員会

〒758-8555 山口県萩市江向510 第21回国民文化祭萩市実行委員会事務局 宛

TEL 〇八三八―二五―三三九〇

FAX 〇八三八―二五―三四二〇

わさけ

毎月24日締切・30句以内厳守

編集部

川柳塔みぞくち

小西

雄々報

点滴のリズム正しく辛願う

リズム感なくした頭喝入れる

金メダルリズムも味方背に受けて

リズムよく進まず辞書をまた開く

リズムよく石臼まわす祖母達者

春うらら生活リズム活気出る

心浮きマンボに乗れば膝笑う

家族の輪リズムに乗せて回したい

老いて今リズムに少しネジを巻く

古い服脱ぎ捨て春のリズム知る

川柳塔おっぱこ吟社

木村あきら報

悔しさを笑顔の中に閉じ込める

欲言わずこのままでいい人生路

約束を破って白い眼で見られ

ホコリほど溜ってほしい論吉さん

ご近所の噂集める日向ボコ

歳月に忘れる事を教えられ

生コンの水路ホテルも棲みつたぬ

智恵子

久子

豊枝

鈴枝

信雄

公美枝

和代

静江

正光

雄々

ひかり

よしみ

かおり

放任

八重子

賢

あきら

雑草に生きる力を教えられ
待合室物知り医師の多い事

満面の孫の笑顔が福の神

つい口がすべって膝をつつかれる

なぜなのか宝クジには嫌われる

婆ちゃんを抜いたと孫の靴踊る

高槻川柳サークル卯の花 龍本きよし報

出すぎる芽打たれて我慢強くなる

春の陽に芽吹き音が聞こえそう

愛芽生え娘は父親を遠ざける

隠し事はちぎれそうな胸三寸

失敗は胸に納めてくれた父

胸三寸開けて漂白剤かける

神様の胸三寸に賭けた絵馬

打ては響く器量を時に煙たがる

フラスコに入れてゆすれば直ぐ解る

笑ったら笑い返してくれました

花の山そっくり雪に被われる

まだ古希と思えば焦ることはない

年月の流れや八十路を焦らせる

米寿きて何を焦るか米のめし

たつぷりと持っているので焦らない

焦るほど脳がまわらぬ試験場

ライバルに焦る姿は見せられぬ

きのうのことばかり消えて焦りだす

子の未来信じて母は焦らない

焦るから優しい風に蹴蹴く

焦っても駄目だと沈んで行く夕陽

いさむ

寿々女

初恵

文仙

治延

貞月

佳一郎

美義

勲弘

(神)孝一

昭一

尚士

美籠

比る志

天笑

稲子

宏章

(井)照子

とし子

重人

宵草

庸佑

たもつ

石舟

きよし

萬的

春ですぬ鬼もあははと笑い出す
刺すやうなしびれるような足の冷え

どん底で妻の度胸にすくわれる

玄関で挨拶している脱いだ靴

冬なのに穴あきパンツ街を行く

愛のムチ打つ親の手が狂つてゐる

悪い癖皆遺伝子のせいにする

春だもの似合つてほしい淡い色

きつかけを求めて歩幅変えてみる

竹原川柳会

時広

一路報

ボクも地球もどんどん重くなるようだ

あたたかな母の背中にある重み

春の音重い体が脱皮する

ときどきは肩が凝ります我が夫よ

重いのはどっち夫婦はやじろべえ

優しいさこつこ男の罪は軽からず

重いのはいつも女がもつ火種

約束の確かな重き指にある

ばあちゃんの出番さうし紅を引く

ツアー宿譲りあつてゐる化粧台

釣舟の化粧直しへ光る海

横綱の化粧直しにある呼吸

化粧直ししても笑顔は忘れない

佐助の自己主張する紅ほのか

砂時計返して生きる事にする

満開の桜お祝いしてくれ

あなたとの出合いは桜香る春

水仙の漂う部屋の中にいる

活恵

泰雄

かおり

乃りこ

治三郎

公子

武史

葉子

求芽

蘭幸

規代

汎美

敬子

比呂子

静風

白狐

幸子

栄恵

輝恵

厚子

青居

半居

太虚

笑子

史子

千枝

寿枝

路のとうポツポツと春告げる
愛燦さん平和を運ぶ蟻の列
清流に見えて来そうな流し雛
美しい地球を守る平和の灯
戦争も平和も知らぬ孫を抱く
喜寿傘寿寄つて自賛の平和論
未来からピースサインが出ています
カッブ酒一つお地蔵様平和

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

石垣がいろいろな顔をしてみせる
振り返る夢中で生きた足跡よ
石垣へ汗染みこんだ苔のいろ
おだやかな顔長生きという宝
石垣の栄枯盛衰曼珠沙華
あのときの紹介があり雪月花
凜とした石垣を這う蟻の群
石垣はつわぶきの花抱きつづけ
石垣にチョッピリ見栄も積み上げる

川柳ふうもん吟社

夏目 一粋報

地下タビに夢の続きを言い聞かす
明日へとつながる今日の粘り腰
夫婦著喜劇悲劇をつまみ上げ
ケンカするしよから同士仲がよい
しよから白無垢つけて涙ぐみ
ふる里は旅人の目で回るだけ
粘り腰その内神も味方する
傷付いた蜂がホルモン焼に群れ

秀夫	雅女	美恵子	昌鼓	かをる	一瑤	無限	洋々
好栄	ちよえ	かつ子	伸子	聖子	はるみ	恵美子	博利
清泉							

夢ばかり追うてホルモン空になり
かあさんを囲んで温い輪ができる
ホルモン刑よりはあなたの愛が効く
卒業へしよから坊主泣いてる
しよからの姑がいちばん嫁びいき
一本の樹になるまでの粘り腰
海育ちしよからいのはあたりまえ
ホルモンの不足か脳が錆びてきた
ホルモンの煙にむせているさくら
叩き売りもう一声と粘り腰
粘り腰見せて八十路の坂登る
粘り腰孫の要求負けました
こも困い解いてわが家の庭に春
皿割って治まる喧嘩ホッとした
男性ホルモン白髪と共に抜けました
ねばり腰そこがきらいと妻が言う
六人の保護者一人の孫囲む
入賞の友を囲んで祝賀会
人生の正しい道を早回り
高根でも粘ればきつと手に入る
ホルモン焼脳に効くかと食つてみる
囲いとられて青くなる赤くなる

岸和田川柳会

原 さよ子報

顔見るとあほらしいことはかり言い
心こめ私らしさのプレゼント
貧乏くじ引いてやっぱ奴らしい
舶来の浅剣も混じる潮干狩
陳謝して逃げようなんて浅い知恵

志げ緒	一京	美雪	金祥	節子	諏訪男	あしび	信子	裕子	章子	茂登子	はつ江	孝男	春名	義徳	善夫	毅	宗明	益子	圭一郎	由美子	一粋
-----	----	----	----	----	-----	-----	----	----	----	-----	-----	----	----	----	----	---	----	----	-----	-----	----

佳句地十選

(5月号から)

小谷 集 一

馬鹿ですな時々神さまに挑む
生きているこんな愉快なことはない
おしゃれていそいそと行くディケアー
ひと休みしたいものもある蟻の列
無駄骨を覚悟で走るのも男
生き残るために敵とも手を握る
死ぬまでは元氣妻との合こば
妻に勝つ手品の稽古しています
平凡な暮らしどこにも敵がない
キッチンを変えても母は煮転がし

考えの浅い上司に胃が痛む
目をつぶり委細承知の悪巧み
お見合ひの釣書委細で目が点に
太つ腹委細聞かずに金を貸す
口コミで手造り豆腐へ客の列
浅い春何か浮き浮きする気分
かくしても委細承知のお小遣い
金で二兎追つてルールを踏み外し
可愛くて玉子の兎たべず観る
一兎をも追つたことなし怠け者
あれこれと兎角うるさい外野席
七十里越し選んだ夫とこれからも
選ばれてそして選んだはずなのに
選ばれてこの世に生まれ感謝する
一票で選んだ人に謝罪され

房枝	香夫	浅子	狸村	弘子	ふみよ	洋	植代	寿海	力子	和美	珠子	幸子	清	半錢	利昭	たもつ	楓楽	重人	庸佑	稚代	保州	アキラ
----	----	----	----	----	-----	---	----	----	----	----	----	----	---	----	----	-----	----	----	----	----	----	-----

もう一度選んで見ても今の僕
ホリエモン落ちて良かった選挙戦
選ぶなら母に似て良い人がよい
ペットシヨップ飼い主選ぶのは私
一票の重み世の中変えてやる
選んでる横からすつと手が伸びる
失格の議員選んだ町の恥

川柳ささやま

遠山

可住報

律義にも春を忘れず花開く
ビービーの合図に惑う老いの耳
平均のくらしと云うが金足りぬ
いぶし銀なぜか爺さん思ひ出す
衣食住便利に活かす老いの知恵
ベテランの風格出来きた帰省
年金で十人並みというくらし
ベテランの酌で上手に酔わされる
ベテランの鼻の高さに嫉妬する
春来れば装い軽く闊歩する
平均に波打つ稲の出来具合
経験が光る便利な知恵袋
平均寿命生かされ感謝先ず安堵
新式の便利なのは苦手です
誇るものないが人並みだと思ふ
スイッチONボタンに迷う老いの指

むらくも川柳会

毛利

幸報

笑司 守 美緒子 二英 文子 美紗子 靖子 多美子 開子 照代 かほる つや子 富子 哲男 芳郎 可住 信夫 美保

成績表にやにや顔で親に見せ
裏の手があつてにやにや気味わるい
宝くじ思わずにやにやしたくなる
にやにやも出来ぬ隣に妻がいる
にやにやと何かありそな顔をする
にやにやと昔のプレイボーイも孫を抱く
美男美女にやにやせずハイチー
菜を刻む何思い出しにやにやと
ライバルがにやにやとして挑戦状
宝くじ三枚買つてにやにやと
山はにやにや竹の子も頭出す
にやにやと自慢話をする準備
にやにやでこまかせられぬこれだけは
にやにやと隣の莫塵へ花見客
にやにやに叛く返事を聞かされる
言い合つてにやにや逃げる倍返す

川柳塔わかやま吟社

牛尾

緑良報

樹齢百年少女のように咲く桜
無駄遣い出来ぬカードが喋るから
君が樹ならわたしは花にならましよう
入学へ大樹を目指すランドセル
年輪の樹も息切れをする地球
樹上から落ちたサルにも意地がある
おおらかに主を見守る庭の樹々
聴診器で街路樹を診る元氣かい
うたた寝をするには丁度いい樹陰
生きるとはカードばかりが増えてゆく
人情も会話も消えたカード買い

ます美 惠美子 彰 愛子 幸 宣雄 瑞枝 玲子 かずこ 雨石 治代 静子 昌子 定子 秀夫 安男 登美代 英子 夕胡 和子 富美子 和香 よしこ 小雪 三喜夫 保州 精子

種あかしされたカードの裏表
占いのカードが並んでからの聞
払うこと忘れて浪費するカード
花見に行こうテレホンカードから春へ
切り札はこれしかない判を押す
結婚へ着地をします好カード
残り火を燃やす陽気な老母といし
陽気さが取柄オフィスの花になる
成るようになるさ陽気にいきましよう
母さんの陽気が空気と和らげる
回復期陽気な靴にしてくる
距離少しおこ温度差埋まるまで
わたくしの体温で書く一行詩
胸の扉ひらいて熱意みせましよう
子守歌うたいすぎたか熱を出す
正義派のあなたはすぐに熱くなる
熱意だけ買つときますといなされる
拉致の子を思う心が熱くなる
埋み火に熱いエールが点火する

京都塔の会

都倉

求芽報

感涙はスポーツにしか見当らぬ
力まずにリラククスして仲間入り
当人が留守だと言つて切る電話
掌に春を楽しむこんべい糖
こっからは先言うと崩れる脆い仲
理論家は苦手なフリーストリング
歳とると心の中もバリアフリー
消印もなく音も立てないフリーです

裕美 あきこ 東吉 さち子 順子 豊太 怜 雅代 克子 美子 輝輪 スミ 寿子 泰子 笑子 三男 よりこ 徑子 輝美 きよし 鹿太 篤子 ふりこ 則彦 満子 藤重

土踏んで母の匂いを嗅ぐ素足
 ペット犬これが土かとなめてみる
 親求め異国の土となる覚悟
 嘘つかぬ土の芽吹きを待つ軍手
 一粒の種へ応える温い土
 土踏まず今日の秘密を知っている
 極楽へ行くと勝手に決めてい
 決め事は息子に譲る代わり
 気持ちよく酔う割り勘と決めてから
 いざという出番待ってる白いシャツ
 訂正をされて傷つく自尊心
 訂正の多い男で信じゃない
 訂正はない機関士の無事故
 訂正があるたび手取り減っている
 予報士が訂正をする花の雨
 人生の訂正期限疾うに過ぎ
 今日の日訂正したい帰り道
 訂正をしてもまっ白にはならぬ
 後ろめたい訂正一つ消えぬまま
 訂正は効かぬボストの軽い音

川柳塔唐津

仁部

四郎報

とし子 福子 久留美 美義 昌乃 功一 尚士 宏子 牛延 葉子 典子 庸佑 欣之 克治 和友 弘之 益子 啓子 求芽 百合子 晴翠 勝視 實 正剣 蜂朗 水笑 四郎

脚線美男の視線揺れている
 日本一わたしのババはいい男
 西へ行く窓の夕日が美しい
 尼崎いくしま川柳会 春城武庫坊報
 わたしという土に忘れな草が咲く
 古寺の土塀の崩れ夢の跡
 土の道踏んでうれしくなってくる
 明かせない想いを詰める胸の函
 とろ箱であんこう無念さを見せる
 カラオケで縮んだ脳のストレッチ
 戻り寒予報通り桜咲く
 家系図のほろりほろりと欠けるなり
 悠悠と泳ぐ魚に学ぶもの
 友情も煮込んだくき煮送られる
 八十半は百人一首の筆はこぶ
 一望の桜満開人を吞む
 寒椿ボトリと落ちてそれつきり
 尼崎尾浜川柳会 山田 耕治報
 散り終えた時ばんぼりの荷が降りる
 遺産ない親父にもうう生きる道
 ちょっぴりの還付を当てに飲んでい
 荷物にはならぬとそつとのし袋
 お土産の宅配便が先に着き
 抜擢のあとの肩の荷すっきりと
 声の色イロイロ変えてオレオレ詐欺
 お荷物にならぬつもりの方歩計
 あれこれと荷物の隙間埋める母

輝夫 高明 虹汀 紀乃 宏一 年代 東園 久子 寛三 昭三 薫 守弘 純 千恵 武庫坊 しづ子 晴美 五月 朋月 里江 昭三 美代子 よし子 耕治 勝己

シヨパン流れレタスサクサク春の音
 レシビには無い雨の日の私流
 いろいろな椅子に座って今がある
 先輩にイロイロ学ぶ裏通り
 簡単に引き受けた荷が重過ぎる
 いろいろな母さんがいるクレヨン画
 お荷物にならないように生きてゆく
 今はもう時効いろいろあつたけど
 寄せ書きにまあ色々字が踊る
 悲喜交々いろいろあつた優勝旗
 いろいろな口も頭もある世間
 涙腺のゆるみか喜劇でも泣ける
 小賢しい風が桜の花散らす
 川柳塔鹿野みか月 土橋 螢報
 譲れないこの道真ん中を走る
 この道で恋を捨てたり拾ったり
 この道は大八車ひいた道
 この道で出征兵士見送った
 お祭りに帰った山の道は雨
 この道は花道らしい譲つとこ
 農作業父のコントが軽くなる
 五感研ぎこの道を行く人になる
 夕日いま雲の合間に垣間見る
 この道の先両手ひろげて待つ仏
 八十年この道人生まっしぐら
 二度と戻れぬこの道を詩で染める
 息巻いてこの道に終止符を打つ
 この道に近道はない汗をか

孝一 イサミ きよし 亀子 江美 桃花 ミサ子 求芽 全彦 正治 比ろ志 鹿太 美籠 螢報 みどり 八重 芳光 和枝 汲香 永子 幸枝 照彦 かつ乃 彩子 富久江 実満 弘子

この道を行ったり来たり怪しまれ
目をつむりや歩けないかなこの道を
負けて勝つこの道だけは教えない
この道は頭の黒いけものみち
ほのぼのとこの道一途ありがとう
驚のうたう声にも上手下手
踊るからあなたうたつて下さいな
君が代を唱い優勝者の異人
デユエットの調子も合つて老い進む
バス待ちに鼻うたもでる春うらら
春の歌うたつて春を手にうける
クスクスの声も楽しい席がある
クスクスとうおの目までも春よはる
この道は柳人が好き鹿野道
苦勞した男の道を振り返る
唇に歌を忘れぬ女が好き

川柳塔なら

坊農

柳弘報

折り紙の花壇の中の夢あそび
シクラメン一鉢僕の花壇です
花壇などやっぱり似合わぬ野の育ち
ふんわりとはめて上手に使つて
使い方知らず仕舞いで腕が泣く
ていねいな言葉使うと通じない
使い道知らず宝の持ちぐされ
貧しいが五体使つて生きている
洋菓子にいつも笑つて乗る母
母ジャムたつぷり塗つた妥協案
満開の母の答え美しい

公子 武子 きみ子 石花菜 菊乃 久枝 節子 諷人 和子 睦子 くに子 保子 孔美子 雅女 かつみ 螢

冬の恋冷めて苺青いまま
花壇から花粉私の鼻が泣く
春いちばん花壇多弁になつてくる
門弟に娘も芸も盗まれる
門のある小さな城を建てる夢
酷使した腕だメッキが剥けている
使わないと損をしますよ笑顔なら
朝の門出れば男の顔になる
子の門出祝うか青い青い空
桃の花ふるさとを出てゆく門出
一門が揃つて祝う師の卒寿
嘘ひとつ母の赤に預けとく
苺ジュース女多感な夢を盛る
くちびるは苺少女は脱皮する
虐待かも知れぬ苺をつぶして
いちご摘みひそかに恋を摘むように
使われる気持ちになれと母が言う
山門へ逢うてはならぬ母を訪う
私の限りを咲かせている花壇

川柳塔きやらぼく

福代

天雀報

プリモプエルと話していますうちの犬
立春は過ぎたかいナと雪が降る
飽食のつけおそろしい糖尿病
桃の花亡母に供えるひなまつり
優勝の汗と涙を盛る器
啓蟄に日溜まり求めて動き出す
行政の油断いつでも後手後手に
スケート靴持たぬ旅にと金メダル

良一 茂雄 道子 隆盛 朝子 完次 信子 寿美 直子 洋子 和夫 一風 秋雄 美千子 理恵 六助 ダン吉 國治 惠美子

大原川柳会

山本

玉惠報

梅だより友の誘いにつて見る
おふくろの料理ソフトで最高だ
花の中思いがけない初彼岸
油断すれば私は呆けになるだらう
時が過ぎおだやかに春を告げている
会う度に仁王の顔がちがつてい
春の海おだやかな顔母の胸
いちご大福仏と分けてお茶にする
立ち難がすつくり春の光うけ
敷布団のソフト背骨にひびきだす
あれ以来イナバウアーが広がって
幸せは帰る灯があり待つ娘
蠟梅も水仙も咲き人恋し
まだ旅の途中かと思う薬のむ
大山の竿雪やがて田植唄
丸くなつてきました老いの影法師

亜弥 晶子 春枝 玲子 雪江 てい子 那珂子 紫泉 恵子 ふみ 田鶴 富美子 日枝子 千代 千代 糸子 絹子 静子 たつ子 みさえ 美佐子 巴子 喜美子 悦子 妻江 辰江

楽しみは孫の愛車でお買ひ物

リハビリは気休めだった日が過ぎる

一句消し二句消しけた句も忘れ

影法師お前も背なが曲つて

我がままを見過す母で頼もしい

一言を煮詰めて握るボールペン

川柳茶しばし

板山まみ子報

相撲から野球に国技のれん替え

待ち切れず震えながらの花見酒

病院は嫌い痛いこととするから

お別れの花見もすぐダムの底

退院は花見のころと医者の言い

入学に似合う桜の花見頃

テンションを下げられそうなペンダー

一本の桜があれば足る花見

生き様はどうか摸索の中にいて

城北川柳

吉岡

美しき四季に生きてる幸思ふ

巡りゆく四季を流れている河童

飲兵衛は四季を肴に褒めて呑み

ありがたや四季こもに愁いあり

人生の四季の節目に背伸びする

夏来れば秋冬来れば春を待つ

七十歳だ今夏のと真ん中

食卓が赤字いちばん知つてゐる

大正のロマン抱いてる文机

どの傷も思い出がある古机

南花

地佳平

さちこ

敏夫

みづえ

玉恵

文男

百合

盛夫

かつ子

八木

幸子

美千代

まみ子

秀水

修報

高栄

朝子

順三

桂作

福世

倫子

たもつ

千歩

集一

十五歳そつとお化粧する机

せかせかと電車の中で化けている

自分さえ判らないのに化けられぬ

白鳥に化けて不幸が始まった

仏にも鬼にも化けて子を守る

増税の痛みそろそろ効いてくる

低金利そろそろ貯金底をつく

そろそろと刀の鐔に手をかける

そろそろと頃合い図る消費税

これでもな焦つてまだなとも思ひ

雑学を披露している通夜の席

許したら昔話が美しい

口論の湯呑み昨日に置いてある

ああしんど何ともないが言うてみる

花の香を総身に受けて万歩計

老い吾にバレンタインのチョコ届く

父を超す男にしたい母の賭け

猫までがそわそわ春へ嬉しそう

良い天気お花見たくて遠まわり

西宮北口川柳会

黒田

天空に消えゆく亡母の煙追う

禁煙が愛の証と言われても

禁口ひとつ火中の栗をひろう羽目

戻された手紙切手の跡がない

うっかりと生きた証と思うてる

うっかりと言つたジョークで座が白け

気づかず引いた雑草つく高値

とし子

弘風

たよし

和夫

千里

東吉

ルイ子

昭子

正

志華子

昭

あやめ

典子

郁夫

利昭

麗

春蘭

はじめ

達子

美智子

能子報

比ろ志

忠

嘉代子

正和

順子

たず子

開子

うかうかとしてたら平成十八年

うっかりもまたよしさくら見て帰る

うっかりミス母は黙つて肩を貸す

うっかりをしつかりせよと叱られる

やり抜いた成果自分にはわかる

雑念を抜いて無色の点と線

追い抜くと透かさずバトカー付いてきた

愛渦れて手抜き料理に馴らされる

改札を抜けると母と茜雲

抜きん出て咲いた花からほろり散る

大きな丸を空いつばいに描く余裕

何もかも妻に任せている余裕

赤を着る冒険心のある余裕

終章は余裕しゃくしゃくとは行かぬ

待つ余裕先手を取れた話し合い

連綿と古都の息吹きの花筏

襟足をそつとくすぐる柳の芽

十年の命と競うバスポート

鈍行の窓が切り取る里景色

春の雨おんな心のドア叩く

仏壇の仏が噓せている仏事

色変り黒光りした夫婦箸

花道を行きつ戻りつ華になる

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

口開かぬ浅蜷はスパイかも知れぬ

老集団桜の下で見開く眼

子の扉母のころろが開かせる

出合いからころろ開いてお付合い

てる

富喜子

光久

春蘭

求芽

孝一

奮水

萬的

美代子

哲子

和子

松煙

哲男

房子

貴代子

曙蝶

鹿太

文

折抗

美籠

朋月

五月

紀乃

ますみ

香住

能子

加津子

梅さくら一度に咲いて雨無情
札束で撫でると重い扉も開く
キユービッドに狙いはずされまだ独り
狙われるものなのいのも淋しかり
狙った靴はセールの除外品

はびきの市民川柳会 徳山みつこ報

桃だよりあまり聞かない摩訶不思議
ねこの春桃色吐息やかましい
過疎の地に静かに咲いた桃の花
桃源郷二合もあればすぐ行ける
王ジャパンあなたは矢張り桃太郎
水蜜も妻も大事に扱おう
桃太郎が生まれる桃を選っている
やとことさ集めた落ち葉風さらう
幸せな人が集まる同窓会
集まりも最後傘寿のクラス会
羨望の視線集めている辞令
葬列の長さ故人の徳を知る
あれこれと知恵を集めて生きている
どんぐりは背伸びしすぎて群れで浮き
日向ほこ来ぬと噂のネタになり
がたがたはあまり言わない事にする
へんねしが空気を重いものにする
ガタガタと春一番が戸をたたたく
ボロボロの体がたがた文句言う
大好きな日本がたがたになりました
がたがたの音に番大身構える
手足腰遂に脳までがたが来た

慶子 喜美子 シマ子 あずき 欣史子 章司 真一 アヤ子 六点 久仁子 重人 美代子 美喜 喜久子 天けし 庸佑 吐来 泰子 りつえ 猿查 昭平 栄一 ヨシ枝 光男 敏 志洋 いさお

がたがたと日本崩れていく予感
厨房にエプロン二枚定年後
竹槍を信じた老母の制筆着
母さんと揃いのエプロンウッキング
エプロンをつけてやる気がわいてくる
エプロンも均等法で忙しい
エプロンを譲った妻が翔びはねる
アルバムにエプロンつけた母ばかり

川柳藤井寺

高田美代子報

柳腰女の意地は隠れてる
動かぬぞこの席俺の指定席
染まるまい白には白の意地がある
こめんねと一言いえばすむ事を
言われる前にやつておきたい妻の意地
首出さぬ亀には亀の意地がある
お相撲さん日本に勝つてよね
意地のない背中が傷がたとある
意地の跡サンドバッグが揺れている
仲直りできぬゴメンと言えぬ意地
ハンストを貫く少女描く夢
回り階段を回らないで降りる
むき出しの意地をかわした遊び球
欲張りの計算二二が八になる
欲望が予算の道を踏み外す
御破算に出来ない過去の罪の数
算数が苦手同士で無二の友
これだけは覚えていますにんが四
まっすぐな目に見抜かれている打算

みつこ かつみ 一知 フジ 静子 一壺 恵勇 ダン吉 喜代子 武義 進 光男 登志子 みつこ 静子 弥生 淳司 六点 あかり 一筒 恵勇 志洋 アヤ子 鐘造 かつみ いさお 欣之

ほたる川柳同好会

水野 黒免報

改修の進んで川の無表情
川下の石の丸さにさとされる
支流でもやがては海に至る川
淀川もブルーテントで世相見え
川の面々宵一つの影映す
しがらみを絶つつもりがいつまでも
花のある暮しは絶えぬ花鉢
早蕨のはてなマークを皿に盛る
倦さるほど生きて今更はてなどは
絵文字にもはてなマークが多くなる
久し振りはてな同士が顔合せ
税金の使途にはてなが多すぎる
ほろ酔いはてなと思う時がある

シルク 龍一 悦子 栄一 井竿 絹歌 昭子 婦美枝 史郎 瑠美代 扶美代

長柳会

村上 直樹報

塗りたくり削りつつは隠す過去

直樹

踏みしめる花絨緞の足かるく
追つて来る古いへ気持のバリケード
護身術習つて敵を待っている
野仏も年に二回の彼岸花
過去はもう忘れなさいと天の声
過去去束ね火をつけ灰にしてしまふ
過去の女古希を越えても夢に出る
高慢な過去の肩書きハナにかけ
追いかける夢見た夜の月に哭く
格安の旅は追い銭たんと出し
八十路来てまだ面影追うている
君の過去どうでもいいよ今が好き
日の丸の強い絆で世界一
鬼こっこかくれ場所ない3DK
方言もやんわりひびく無人駅
追い風は我が家を少しそれで吹く
自分史を追えばそこには母の顔
追伸にいっぱい愛を入れておく
あの頃はよかった話春炬燵
過去捨てた男を泣かす里の唄
瞳を閉じて過去ふり返る風の中
類杖で夢と空論練る机
晩学へまだ追うものがある花の杖
五七五追つて挫折と喝采と
ひっそりと過去を集めた母の部屋

八尾市民川柳会

富西

弥生報

洋子 三和子 正博 靖博 靖子 靖子 輝子 明信 武男 明子 天けし 敬二 よしお みよ子 不二雄 マサ 史 正一 和代 芳野 英美 けい子 淳司 富美子 和子 一慧 直子 浩三

男一匹いま素うどんを食べている
まごころに包まれる人包む人
ブライドを捨てた男の影法師
点滴のしずくと春を駆け抜ける
道祖神の石から生れてくるドラマ
連れ添うて愛憎包みきれなくて
真相を語ると家が崩れだす
冬囲いはずして春の音をさく
散る花のひとりひとりにあるドラマ
愛がしつかり包む左手のほくろ
観客をじんわり泣かすお膳立て
万札が辿る旅路にあるドラマ
熱燗で冬の名こりを洗つとく
花咲いて散つて女の不整脈
不用品一旦捨ててまた拾う
花火上げわたしのドラマ終結す
少年の志つまつた夢枕
いずも川柳会
佐藤 治代報
草花の宴に出られない
こだわりを水に流して良く眠る
眠るもの眠らせておく花の森
耐えぬいて春を迎えに母子草
ライバルを呑み込んでから良く眠る
そこはかと大地も眠りから目覚め
甘酒を召され雛様眠たそう
草色の春がびゅんびゅん駆け抜ける
よろよろと心残りを生きている
裁判所の桜よろよろと咽ぶ

ダン吉 欣之 あり 加央里 シマ子 加津子 ますみ レイ子 春蘭 アキラ 柳伸 宏至 一風 民 きらり たもつ 弥生 多輝子 敬子 博子 佳子 桂子 律子 ちえ たえこ 治代 圭詩朗

草むしり出来るよろこびだつてある
踏まれても草はいきいき天を突く
眠るまでわたしの傍にいて欲しい
枇杷の木の死角で眠るカタツムリ
柿の種喋り出した止まらない
よろよろと見せまい象は列を出る
お仕事がないので今日も眠る猫
絵手紙のつくしやさしい匂いする
あれからはビルがよろよろ見えてくる
封筒によろよろを入れ切手貼る
一杯がほどよい薬よく眠る
右左よろめいている多情者
半分はあなたに上げる花の種
死んだらおしまい絶対種は腐らせぬ
のどかに土筆も真似るイナバウアー
種馬が啼いて出番を待っている
動けよと土筆明るい顔を出す
快眠と快食卒寿サバイバル
種にするさかな元気にする生け簀
今一度眠つて時を待っている
川柳塔打吹
野口 節子報
偽メール噂とデマと首が飛び
花粉飛びマスク美人にうっとり
黄砂飛びさなかな車で句会行くと
飛び込んだ部屋は上座で失がさる
大学で遊んだつけがきつと来る
ばあちゃんの遊び上手は年季入り
夜遊びがすぎて冷たい風が吹く

富恵 幸 多喜 歌子 寿美 玲子 満江 昌枝 久子 すみこ 蘭水 まこと 房子 文子 きみえ 茂美 叮紅 多賀子 章峰 ちかし 節子報 茂夫 紀美恵 和子 京子 かつみ 孝恵 芙美子

遊ぶ日をきつちり付けるカレンダー
遊ばせて貰った恩は倍返し
年金の範囲で遊ぶと云を掘る
歌麿にモデル所望と言わせた
整形し美人に変わら貴女だれ
心美人自然に滲み出るしぐさ
我が家には自称美人が胡坐かく
酔ったかな美人に見えぬ茄子かぼちゃ
春おほろみか月が描く美女の眉
大仏は薄目を開けて美女を待つ
家の中金婚過ぎた美女が居る
女人みな親世音なり我れ爺や
老いこまぬ嗜みという薄化粧
梅という美人さくらという美女
強く高く人目に触れぬ滝の音
泣くさくら笑うさくらも春の音
蜜蜂の羽音もたのし花畑
不吉な朝から茶碗割っちゃった
音信がなければ元氣あれば銭
人間がいびつな音をたてている
遠ざかる足音あれば福の神
十の者が振り向く銭の音
豪傑も銭の音には弱かった

川柳塔まつえ吟社

三島

浜丘報

美代子 幸子 照彦 玲子 富枝 龍枝 清 美知江 克枝 滋 善江 石花菜 螢 完司 玲子 きみ子 重忠 睦元 禎元 芳光 三津子 和枝 節子

柳歩

玄関のチャイム鳴らしたのは誰だ
まんねりの音に飽きたら浮気する
産卵に愛の巣の中雛を待つ
スパーの卵客寄せ売り出した
卵焼き母の童話が聞こえる
オムレツが上手に出て嫁にやる
雛になる卵ひとつが手に重い
黄身抱いて一途な想いゆで卵
ハラハラもびつくりもした世界一
深夜ベル飛び起きたのは大だった
お喋りをびつくり水で落ち着かせ
三度目もびつくり顔で聞いてあげ
ユーモアの解るびつくり箱を買う
半世紀生きてびつくりにも慣れた
三姉妹美人遺伝子あるらしい
条件は揃っているが来ない嫁
ただいまの声が嬉し靴揃う
ランドセル親も足並揃えてる
不揃いのリンゴが籠で客を待つ
皆揃い夕餉を囲む笑顔の輪
酒の所為回れば癖が笑い出し
少子化に回転木馬が欠伸する
風車やさしく回る子守歌
犬と猿ふたりの話空回り
指輪が回るみんなあんなのせいですよ
花の下時間ゆつくり回ってる

三幸川柳教室

古久保和子報

ひと目惚れ恋の動機は理屈ぬき

螢 治代 和歌子 小生 紫見 蘭 知恵子 きみえ 邦代 桂子 玲子 昌枝 芳山 注湖 多喜 ちえこ 幸子 たえこ 幸 政子 多賀子 静恵 浜丘 茂美 叮紅

一步

尻理屈を控ねて墓穴を掘っている
後味の悪い理屈をつけている
負け犬が遠くで吠えている理屈
理屈より現場の汗が物を言う
理屈など知らずに癒えた王子酒
理屈抜きたで食う虫と添い遂げる
自信の句たんと控えている手帳
覚えては忘れ手帳が重くなる
宝です土の匂いのする手帳
逢引きの手帳が懐で騒ぐ
スケジュール書く元気のである手帳
ゴミ出し日妻の手帳に書いてない
スローライフ手帳も薄くなるばかり
さりげないポーズで彼をいつも見る
身についたポーズで敵をさげている
ポーズとるピエロの涙赤い鼻
幸せのポーズお面をとり替える
新生児どのポーズにもある力
安心の形で眠るママの胸
ポーズ取ることも覚えて大人びる
胡蝶蘭君はポーズを取りすぎる
結跏趺坐やがては風になるポーズ
妻を待つロビーで湯冷めして終う
こたわりがゆるりと溶ける終い風呂
湯タンポのかわりに孫を抱いて寝る
余りにも長湯で声を掛けてみる
鍋料理まずは湯気から食べてゆく
湯を沸かすことを覚えた定年後
いい湯だな明日へリセットする手足

三千子 章子 幹子 町子 起世子 智三 孝義 かずみ 昇 当代 次根 イセ 桂香 信子 靖子 宏夫 徑子 幸 みね 千秀 和子 朱夏 准一 登美代 武 美子 保州 公子

富柳会 池 森子報

恋人は達者でしょうか桃さくら
合わせれば棒一本の底刀

森子 欣之

人の情嬉し涙の一人旅
冬物を出したり入れたり春近し
影法師背中を押して勇気くれ
意に反す言葉意外にあたたかい
新人生ビチビチしてる春の影
冴えわたる空いつぱいに描く春

いつわ 照月 芳香 美籠 一步 善純

川柳大阪 長井 善純報

重人 孝一 まつお 珠生 彦太 かよこ いわお 柳昌 宏

病人の勘が気になる千羽鶴
自然体で進めとボクの影が言う
四面楚歌意外な人の応援歌
忘れ物意外なところで見つかった
意外に距離をおいたら見える影
影法師泣いているよな雨上がり
影踏みで走り回ったあの時代
頬冴えて青いりんごは恋を知り
影追った人も今では孫連れて
末席の下戸が意外なかくし芸
星影のワルツで終るクラス会
鬼の面はがすと涙もろくなる
浮気バレ意外と短い妻の角
ランドセル本より重い期待の目
定量の酒に明日の夢を追ひ
叱られて旅してみたい雲の上
安く済む病気でこの冬乗り越えた
春風に私の足が外に向く
人脈と金で絵を描く永田町
ガセネタでないぞほんまの金メダル
功名を急ぎはまった怪メール
どの国も使えぬ核を持ちたがる
挫折から始まり努力で金メダル
浮き沈みあつて親父と慕われる

吉川 寿美報

南大阪川柳会

吉川

雅文 朝子 なきさ 遠野

ピアノ弾く華麗な指に満ちる汗
出産の汗はいのちの匂いする
注文は大声だった上まむし
注文はトイレ戻った妻が決め
奥さまの御注文ですまた届く
注文を聞く娘の笑顔ティタイム
グレー景気ばちばち春のピンク色
グレーとはおさらば春はバステル調
白黒をはつきりつけて狭く生き
灰色に染めてはならぬランドセル
ふる里は淡墨さくら咲く季節
白黒をつけずグレーで生きてゆく
こつてりとわさび効かして食べるウニ
厚化粧約束とは薄つぺら
こつてりと反省色に塗る夕日
ビフテキの脂身食べる妻の分
こつてりと塗るからよい目立つ皺
こつてりな味へニンニク利いている
手放した株が騰つて悔しがる
遠雷に心の迷い解き放つ

利昭 福世 東吉 とし子 弘風 志華子 直子 祥昭 弘子 たべよし

よいしよ出る僕もそろそろ古い気配
初対面すぐ友達になれそうだ
夢の戸が開いて歩幅を広くする
妻つける一番怖い面素面
錯覚に浮かれています春うらら
悪知恵が春風感じ動き出す
母送るかすかに揺れる父の背
裏切りの気配に春が冷えてくる
人それぞれ違う眼鏡で生きている
余り字で寒いところを埋めている
反省のかたちは猿の方が上
樹々たちよ僕の心も萌えてきた
梅一輪雨の気配の風連れて
浮き草は気楽なように見えますか
絶対調荒ぶる神とうまが合う
今少し女でいたい冬の戯画
文豪の眼鏡は遺稿とともに生き
定年後男は浮遊物になる
浮ついた本音カラスに見抜かれる
企みの気配冷たい語尾である
わらべ母の浮輪はもう尽きる
花の語へ少し蛇口をゆるめよう
見逃せば二度と戻って来ない波
茶柱に今日の気配が吉とする
隣国も怖い隣人も怖い
手のくばみ人の温みを受け止める

隆彦 冬虹 一慧 淳司 和子 彦次 伸雄 浩子 鐘造 扶美代 巳代一 正典 深雪 アキラ アキ 紅紫朗 初太郎 奏子 信子 ひろこ 鬼焼 萩乃 澄子 よりこ 宏至

喜楽 ひろゑ 東吉 五月 福世 隆司 良幸 洛醉 川童 功 信醉 利昭 鉄心 宏

いつふみ

更紗

ジーバンで若さを放つ長い足
正論はひとり異彩を放つて
抱きしめても突き放しても親の愛
大空へ放つ希望の奴隷
放たれたつもりが妻のたなごころ
放たれた自由に乗った竹とんぼ
見つめれば和音を放つ花あやめ
注文もせんと閉店までねばる
注文を色々つけて値切る妻
放物線翔んでくれよと子を放つ

川柳塔みちのく
小寺
花菱報

涙腺を締めて旅立つ子を送る
コオロギが女々しく泣いている通夜
花影で咲こうささうと競る蕾
つばみのまま散った妹七回忌
散り際に蕾にバトンタッチする
リハビリに一日一羽鶴を折る
女女しくも四月の雪に悲鳴あげ
年ごとに涙もろくなる私です
競りにかかる牛の涙を見てしまっ
まだ蕾赤いピアスが揺れている
女々しさも雄々しさもみなとける酒
こつこつと大器晩成夢が咲く
涙腺にガムテープして生きて行く
帰省子に頑張りなさいしか言えず
女女しさを虚勢で隠す酒がある
屋上の隅で涙腺干してくる

章久
ダン吉
三男
柳伸
たもつ
千里
柳弘
栄子
弘泰
寿美
きよし
一呑
嵐蝶
柳子
誠子
洋子
てる
隼人
ヒサ子
愁女
順風
花匠
井蛙
ふさふ
銀波
黙人

長かったゴールが見える蝸牛
涙腺に響くひばりの唄が好き
お色気と涙で彼を物にする
女女しさは決して見せぬ鬼瓦
涙腺もうなじもじつと喪に耐える

川柳さんだ

北野

哲男報

観桜会さくらさくらの琴響く
花見した帰りに嵌る落し穴
満開の桜に雨が嫉妬する
アバウトだふらりふらりが性にあい
ふらり来た儲け話に迷い出す
吉報がふらり舞い込む夢覚める
出るだけの涙流して消した過去
厚化粧遠目で勝負しています
軽すぎて医院の椅子に坐れない
無料バス使い初めはお医者さま
過去になる今日をせいっぱい生きる
目や鼻によく聞えてる春の歌
成長をさせてもらった過去の傷
不死鳥と思えた母に要る介護

豊中もくせい川柳会

江見

見清報

勇気ある撤退打つ手練つてある
出歩けぬストレスはかす五七五
頑張れと軽く言うてるのは他人
大地震さつと地球のストレスだ
老いてなお少しときめく洒落たチョコ

花峰
慕情
一花
五楽庵
雅司
朋月
キヨミ
順子
正和
光久
開子
宣子
二英
歳子
章子
藤朗
忠
哲男

髪染めて心機一転青い空
無利子でもいいからストレス預けます
恋の予感もなく萎む菜種梅雨
悪友とわかつているが傍へ寄る
母さんの手料理弾む晴れ予報
年ごとに空白多い予定欄
ストレスの溜る間もなし桜散る
迷うてうちは決め手のない証拠
手のひらへ今日の予定を叩きこむ
好きなだけ関白宣言させておく
スイーツでさつとストレス捨ててくる
読むほどに心打ちます師の句集
勝負師の囲碁打つ指のおもむろに
予め考えといたイケズする
豊かさかストレス生んでるらしい
ストレスに負けまい大正生れです
打ち水がいちげんさんを寄せ付けぬ
ストレスにまだ耐えている棺の顔
いい予感あんなにきれい陽が沈む
許さぬと言う父の目が笑ってる
気分変え環状線を反対に
得るものも失うものもなく生きる
一度だけ浮気の罪は起訴猶予
フルムーンストレス倍になりました

岬川柳会

八十田洞庵報

通勤へ自転車弾む春の風
通勤のルート車列の下見する

春
夢
寅次郎
玲人
早人
肋骨
比志
求芽
美義
石舟
見清
郁子
都代子
寿美子
啓生
タミ
正坊
則彦
萬的
幸雀
巴子
満寿巳
尚士
勇治
みやこ
和香

引出しのすき間に欲しい知恵袋
花の下うかれていても死を思へ
姑が聞き耳立てるわれざくら
人生のスタート切れぬニート族
入れたはず要るとき出ない貴重品
どこからか諭吉引き出す妻は魔女
風呂あがりの生薑湯あしたへの元氣
優しさの書体に母の匂いする
増税はレジャー施設の無駄遣い
イヤリング胸のとときめき知って揺れ
苦も楽も追った通勤ながい道
七光り背負いスタートして潰れ
心の渴き癒してくれるみつをの詩
おだてにも乗って陽気な君が好き
椎茸の菌打ちしつっ人相む
花に寄せ人を変えてまたはな見
相性へ努力寛容つけて良し
あったあったおどろしてる小引出し

翠 洋 会

谷 口

富美子 鉄男 信博 東吉 とも 俣子 年子 房枝 里子 珠子 令子 蛙城 芳子 和美 桜琴 洋平 茂庵 洞庵

義 報

捷也 満作 すみ子 みつ子 舞夢 日の出 叡子 富子

孫の友招いてはあちゃんはいでる
入学の知らせ祝の逆指名
こそこそと渡った橋は落ちやすい
深海魚底引網は大きらい
結局は息子に任せよう遺書破る
髪染めてうしろめたさと嬉しさと
何もかもうまく行く日が稀にある
背の荷物いつ下ろせるか糞散る
独り膳嫌いもまずは栄養素
葉桜の下で里恋うホームレス
少子化を働く女性のせいにする
はつきりと大きな声がありがたい
ピンクから浅黄季節もわたくしも
小沢代表もついていたんだ笑い顔
打ち水をして招く風薫る日に
生き甲斐を見つけたらしい顔の艶
白壁に龍馬残影なぞめいて
さりげなく少し微笑む菜の花忌
街道をゆく続篇黄泉路執筆中
あいまいな服脱ぎ捨てて風に立つ

岩美川柳会

石谷美恵子報

れんげ 正雄 蕉子 千梢 千歩 照子 桃花 義子 絹子 志華子 尚士 春 理恵 さと美 義 美龍 水昇 孝一 恭昌 昭

散る花を川なめらかに受け入れる
なめらかに喋れないけど歌は出る
なめらかに書けない筆のせいにする
なめらかな道にもあった落し穴
なめらかな返事の裏にある打算
温かい訃りに出逢う田舎道
愛一途逢えば話も途切れがち
我が一族指短くて貧しくて
あいさつは短く要所だけいい
虹を追う夢は短い方がいい
幸多き太く短い人生譜
短足を悩んでいます親ゆずり
人生が短いなどと百寿言う
鉛筆の命キャップでつないでる
短くてよいから札はすぐに言う
短命の桜惜しんで満席に
めし風呂せんたくゴミ出しの練習
練習もせずにかぼちゃを真つぶたつ
逆上りがよくやくてきて撫でられる
練習をしても納豆食べられぬ
よい人になる練習はくたびれる
いい噂七十五日短過ぎ

倉吉川柳会

竹信

よしえ 和子 幸枝 雅女 かつみ 睦子 公乃 完司 圭一郎 茶子 公子 裕子 たぬ 菖子 石花菜 季芳 蟹郎 和枝 美恵子 照彦報 龍枝 由紀子 和枝

球春というのに雪が舞っている
 勝ち抜いたイナバウアーの始球式
 地球儀と地図とビデオで堪能す
 動かない男の知恵は無量大
 知恵のある人から先に有難う
 騙される知恵は有情かも知れん
 馬鹿で無知解らん時は手をあげる
 狼知恵で作ったビルが使えない
 悪知恵を隠してみんないい笑顔
 老い先を生き抜く知恵を絞り出す
 ゴンベエとカラスと狼の知恵くらべ
 農作業教える老人力瘤
 経験を肌で教える母だった
 嫁に来て手取り足取り教えられ
 教科書にないもの学ぶ親の背
 暮教えた孫に白石うばわれる
 川柳を教えた孫が指を折る
 入社して酒の飲み方教えられ
 温めてまた氷らせて春がくる
 ひと言で張ってしまった薄氷
 氷山の一角徐々に舐まれ
 水河いくつ流れただろう泣きぼくろ
 戦すむまで氷温で待っている
 表面は氷に見えて温い人
 怯えます心に氷張ってきた
 パンドラの箱開けるのも人の知恵

わたの花

井尻

鬼一 萩江 康子 鈴子 季芳 玲坊 次男 瑞子 悠子 賀寿恵 睦子 和子 前喜美子 日出子 京子 泰輔 石花菜 芳光 幸子 さみ子 ひろこ 西喜美子 修 照彦 民報 八寿子

ストレスを発散させる泣き笑い
 路地裏の子らの賑わいとんと見す
 親になったあのよろこびは忘れない
 鍋の底見せてお開きそれつきり
 裏を読むメガネくもって来た老後
 路地の中夕餉の白い和らぐ風
 いたわりは受けぬぞ介護ロボットの
 イナバウアーじいばあひ孫踊り出す
 菜の花の黄色に染めて雨が降る
 いたわれ過ぎでニートになることも
 細々の脈を繋いで老いふたり
 これ以上望むと罰があたりそう
 絵の中の桜の艶に酔ってます
 真相は神のみぞ知る時効前
 美しく化けて目深の冬帽子
 脈ありと見たのかセールスよくしゃべる
 心労の友をいたわる愛の歌
 それつきり娘に貸した頭金
 来し方と共に過ごした日を思う
 路地裏に咲いた梅の香春の風
 誕生日セットで来たよ定年日
 歳月へ誓いの指輪外れない
 真相の追求しない方がいい
 誕生日祝ってくれた親にせず
 誕生日母の時代はひっそりと

堺川柳会

河内

月子報

君江 宏 一風 幸枝 晴美 俊子 浩三 本たえ子 赤妙子 ますみ いっふみ 義明 ふりこ 知佐子 民 宏至 愛子 和子 博子 正晴 耀一 はじむ ミツ子 莊治 克美 時雄

妥協点探り合つて水面下
 いくつもの節目をくぐり花になる
 節約でないぞよ母の千里眼
 節約の本が六百元もする
 核と拉致触わると関節がきしむ
 晩節に川柳の友たんと増え
 すべらせ舌が騒ぎのよになる
 騒ぐほど違和感のこる淋しがり
 きっかけは七転び目に肩を借り
 聞き役になって私を隠しとく
 競い合う仲間ができて開花する
 教室で習わなかった教え唄
 米騒動率いた人の塚に花
 氣に入って長生きしてる片田舎
 幸せは愛があればと早合点
 つくしんぼの音符で春が唄いだす
 責任をとらない口が騒ぎ立て
 一人ならとても静かな少年だ
 商いの節度保っている揉み手
 昭和史のものさしになるひばり節
 苦勞した跡だと思ふ竹の節
 心にも春一番が吹き騒ぐ
 おばちゃんが騒ぎ規制が布かれだぞ
 雑草の騒ぎさわざわ春の土手
 柔らかい節目だきつと美人だな
 点てんをたどりモノリザ浮き上がる
 妻として合格点に程遠い
 百点の人と結婚したはずだ

玄也 アキ 俣澄 真月 朋月 惠勇 鐘造 つづや りつこ みつこ 五月 和夫 深雪 よりこ 萌 かりん 幸雀 千代 潤子 好 扶美代 文 半銭 なぎさ 公誠 篤子 八千代 さくら

嫌いやと何度も言うて堪忍な

川柳エスボ

山本

三郎報

ルイ子

寒椿ボトリと落ちて春となる
 爪弾きの三味の音聞けば唄が出る
 水仙花なぜかあの人想い出す
 いっ見てもとなりの花は美しい
 あいまいに書けないカルテに医者の仁
 あいまいな返事は誤解身をせめる
 揺れる橋揺れる心と同調し
 無心の美銀盤に舞う金メダル
 老いたとて心の鮮度落ちてない
 猫安らかに癒しの日々を有難う
 火事無念防火対策なきホーム
 仏前に今日を祈って茶を捧ぐ
 長いことあいまいにした付けがきた
 ハンサムに会釈をされていい気分
 幸あれと親心のせ飾りびな
 ビラチラシ調べ尽くして貰いに行く
 アメリカの犬と近所で嫌われる
 パトリール終えて交番紫煙の輪
 月末で屋台の前を通り過ぎ
 定年後屋台のはしご久しぶり
 友と会い熱き想いが伝わって
 児を育てはじめて知るや親の恩
 調べないでそつとしておくから魅力
 うす紅の見えかくれして花間近
 花の苗買つてベランダ春にする

三郎 大豊 文好 とし子 ゆき子 だんよし 団地 三枝 はつよ 高栄 ルイ子 恵美子 一炊 さとし 純甲 晩翔 昭一郎 よねぞう 星花 任宥 一幸 さち子

川柳塔のぞみ6月句会

日時 6月27日(火) 13時から

場所 人形町区民館(地下鉄人形町A1出口)

宿題 「成り行き」「バケツ」「もしかして」

以上2句 自由吟1句

欠席投句 6月24日必着 播本充子宛

〒193 0832 八王子市散田町2-31-3

第27回竜ノ口寮川柳まつり

日時 6月25日(日) 10時~15時半

場所 身体障害者療護施設竜ノ口寮

会費 出席二〇〇〇円 投句一〇〇〇円

課題と選者 各題2句

「犬」植原 条二・「内 助」山本主恵

「泣く」牧野ねえね・「変わる」尾高水陽

「ハッピー」安東千世子・「詩集」江尻谷子

「忘れる」久本にい地・席題・清水青彦

出席希望者雑誌1句6月15日迄ハガキに

投句方法 22×4の句箋使用・雑誌1句も

6月15日締切

連絡及投句先

岡山市祇園地先旭川荘 竜ノ口寮

川柳まつり実行委員会事務局宛

電話086-275-3216

第十一回全日本川柳誌上大会

(太字は本社同人)

平成柳多留賞 秋田 猿田 寒坊

子の宇宙父の背丈を超えて行く

川柳大賞 岩手 鈴木 六羊

反対を叫んだままの休耕田

NHK会長賞 東京 石川 雅子

乳母車の寝顔にあどけない宇宙

日本青少年育成協会会長賞 兵庫 堀 正和

安いのがいい母さんは哲学者

全日本川柳協会会長賞 滋賀 福井 啓二

知らぬ間に翔べなくなった川の幅

全日本川柳誌上大会賞 青森 田鎖 晴天

哲学をやさしく包む紙おむつ

札東で開く鍵穴だつてある

山形 菊地 克二

反対は今だ 軍靴の音がする

香川 田村 道明

ふるさとの川でゆつくり魚になる

静岡 藪崎千恵子

だんだんと童話が消えていく宇宙

(秀句)波多野五楽庵・西出楓案・

土橋聖

柳界展望

川柳句集。発行「美研イン

ターナショナル、B6変型

判、32頁(紹介97頁)千円。

▽柳界往来△

○奥田みつ子副主幹は、文芸アート誌「華音」2号で、俳人遠藤千舟氏と対談、川柳をアビールした。

○ふあうすと川柳社は、泉比呂史氏の死去にともない、赤井花城氏が主幹に就任。

▼計報▲
□本間満津子さん(同人・大阪市)は、心不全のため4月10日逝去。90歳(追悼

記事は93頁に掲載)

▽訂正とお詫び△

5月号1189頁下段13行目、春先→春光 101頁上段18行目と102頁上段10行目、賢子↓順子

常任理事会115月8日出席

20名 ①950号誌上大会進行

状況 ②主幹・理事長選挙

制について ③第12回川柳

塔まつり選者・題決定、お

はなしの件 ④選者交替、

檸檬抄・二賞・一路賞・各

地柳壇賞 ⑤その他

次回116月7日(水)13時半

新同人紹介

(前月承認)

伊

達

郁

夫

―岳人・直樹推薦

大

崎

侑

子

―天笑・瑠美子・正雄推薦

池

上

清

治

―天笑・瑠美子・正雄推薦

杉

本

義

昭

―岳人・直樹推薦

関

本

か

つ

―天笑・盛夫・まみ子推薦

金

子

美

千

代

―天笑・盛夫・まみ子推薦

吉

田

幸

子

―天笑・盛夫・まみ子推薦

子

子

―天笑・盛夫・まみ子推薦

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

句会名	日時と題	会場と投句先
高槻川柳 サークル 卯の花	15日(木)午後1時半締め切り 理不尽・思案・いらち・脱む 自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1118 高槻市奥天神町1-26-17 瀧本きよし
倉吉会 川柳会	17日(土)午前10時開場 白・3(三)・祝う・ほろり 折り折り・あのこと	会報打吹300号記念大会 4月号P.128参照
岸和田 川柳会	17日(土)午後1時半締め切り 余り・位牌・裏表・収まる	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-586 井伊東吉
川柳 ねやがわ	18日(日)正午から 誕生日・一致・無茶・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
岬川柳会	18日(日)午後1時半締め切り つかむ・意外・さっぱり	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
川柳 藤井寺	18日(日)午後2時半締め切り 録・つくづく	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市藤井寺公園1-105 高田美代子
もくせい 川柳会	19日(月)午後1時から 貰う・親切・マニア・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2-8-4 江見見清
川柳クラブ わたの花	23日(金)午前9時半から 表札・鞭・悟る・かくれる	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
東大阪市 川柳会 同好会	24日(土)午後6時から 釘・便利・ニュース・忍者	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
はびきの 市民会 川柳会	25日(日)午後1時から 痛い・安心・こつこつ・ 「ドラマ」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川柳 ふうもん 吟社	25日(日)午後1時から 炙る・ゴジラ・水虫	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
川柳塔 みぞくち	26日(月)午後8時開催 カルテ・苺・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々
京都 塔の会	26日(月)午後2時締め切り 恥・足す・反対	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
南大阪 川柳会	26日(月)午後6時半締め切り ふにやふにや・欲望・乗る・ 広い	住まい情報センター(会場が変りました) 地下鉄谷町線・堺筋線下車③号出口 〒540-0004 大阪府中央区玉造1-16-13-304 前たもつ

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6629-6914)へご連絡ください。

6 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
尼 崎 いくしま	2日(金)午後2時締め切り 夢・手・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
富 柳 会	3日(土)午後1時から 探る・勝手・自由吟	富田林中央公民館 (近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m) 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
城 北 川 柳 会	3日(土)午前11時集合 時計・つつこむ・つるつる 自由吟	吟行句会 城北菖蒲園
川 柳 塔 唐 津	5日(月)午後1時半から ポーズ・紙・投げる	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517-13 宗 水笑
川 柳 塔 な ら	8日(木)午後1時から 従う・面・連続	奈良市立中央公民館4F (近鉄奈良④出口歩5分) 〒636-0311 奈良県磯城郡田原本町八尾62-6 渡辺富子
堺川柳会	10日(土)午後1時から たたく・駄目 と・く・こ(折り句)	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3 河内天笑
川 柳 塔 打 吹	10日(土)午後1時から 箱・気分・放す	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光
川 柳 塔 ま つ え	10日(土)午後2時締め切り 雲・ロマン・ぼろぼろ・抜ける	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9-23-22 三島松丘
川 柳 塔 みちのく	10日(土)午後4時から 散財・隠す・とほける	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53-1 小寺花峯
八尾市民 川 柳 会	11日(日)午後1時から イベント・無理・汲む・雑詠	山本コミュニティセンター内3F学習室(近鉄山本駅) 〒581-0086 八尾市陽光園1-3-12-305 宮西弥生
川 柳 塔 わかやま	11日(日)午後1時から 奇跡・活ける・コップ・ 「擬音語」	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川 柳 会	12日(月)午後1時から おっとり・古い・返信・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩3分 プレラにしのみや 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子
尼 崎 尾 浜 川 柳 会	13日(火)午後1時から 仲間・慣れる・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 事務局 〒661-0976 尼崎市潮江5-2-47 田辺鹿太
ほたる 川 柳 同 好 会	13日(火)午後1時から 旅・囲む・ていねい	豊中市立螢池公民館 阪急・モノレール 螢池駅駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎

編集後記

☆「平成柳多留」第11集の受賞句は、112頁に発表しているのをご覧下さい。2万句近い応募の中から、10人の選者に選ばれた秀句30句を、5人の二次選者が投票した上位の10句は、どれもオーラを発している。

☆発表される日の近い日川協常任幹事会で、受賞句

各々について雑談形式で批評した。そのうちの川柳大賞の「反対を叫んだままの休耕田」について、
うこうでん、と下六になり、受賞句として相応しくない、との意見が出た。

☆このような大きい賞になると、柳界のみならず文芸界全般に知れ渡るので、主催者は慎重にならざるを得ない。すると「当地方ではききゅうこうだ」と読みま

す」と九州の幹事からの発言があり一同は納得した。

☆この一件で、選者たるもの森羅万象に通じる努力をしなければならぬ、と改めて感じ入った。これまで選者の認識不足のために、日の目を見なかった佳句がどれほどあるだろう。「いい句を落しているかも知れません。好きな句を選びました」と言う逃げは許され

ない。
☆本間満津子さんが亡くなられた（追悼文93頁）。4月20日頃ブラジルへ移住予定で、準備を整えられた矢先のことである。

☆44歳でペーチェット病のため失明されてから、川柳を心の杖としていい句を沢山発表しておられた。かの地で新しい句境を開き「川柳塔」に発表して下さることに、楽しみにしていたのに残念でならない。（あ）

ひとこと

殺し文句

「川柳塔なら創立句会のお知らせ」を新聞の片隅に見つけ、ふと行ってみる気になったのは神のお計らいというものだろう。

百人もの出席者に驚きながら席につく。さてそれからどうしていいかわからない。隣に座られた女性に教えるを請うと、彼女は満月のように微笑んでこう言った。
「そう、初めてですか。では句

会を好きになって帰って下さいね」
わあ、川柳する人はこんなに温かくて行き届いた言葉を使えるのか！ 私にとつてまさに「殺し文句」であった。

その方に句会終了まで面倒をみて頂き、幸運にも一句抜け、私は句会が好きな人になって帰途についた。

あれから八年近かつた。あの時の女性、河内月子さん、私は今も句会が大好きです。（居谷真理子）

○買物のついでに寄る本屋はちよつとしたオアシスだ。新刊の匂いはアロマセラピーかも。

○最近夢中になっているのが「山本周五郎」。

朗読の先生が好んで発表会で読まれる。先生が読まれると小説がより盛り上がり、他のものも読んでみる気になる。

○「日本婦道記」なるふるめかしい本は、誰でも想像

してしまう通りの本である。主人公の女性は周五郎の理想としか思えない。主君を立て家を立て夫を子を立て、男性からは言うこと無し

の女性だろう。確かに私もこんな心根の女性になれたらとも思う。が、しかし、ちと気ままに暮らしたきたか……憧れだけにしておこう。

○本を選ぶいきさつは色々、表紙のタイトルに惹かれたり友人がよかったと言えは読んでみたり、新聞の広告に読む気になったりとか、そんな中で、「書店ではお求めになれません」という雑誌がある。とりあえず一冊読んでみたいのに、ズボン三本、下着五枚組とかいう、あの手みたくではないか。とても買う気になれないでいる。（恵）

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(8月号)

地名

都府道市
県
姓
雅
号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようにお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒545-0005 大阪市阿倍野区三好町2-10-16 ウエムラ第2ビル202



檸檬抄投句用紙

「引く」 (6月15日締切)

8月号発表

藤田 泰子 選 — 共選 — 仁部 四郎 選

B A

--	--

B A

--	--

地名

市都
県道府

姓
雅号

地名

市都
県道府

姓
雅号

切らないで下さい

左右に同じ句を書いて下さい



川柳塔誌新規購読申込書

年 月 日

氏名	住所	電話	紹介者	☐ ☐
	〒 —	 		年 年
	月から半年 月から一年 5000円 9800円 振替			

該当の方に○をつけて下さい

〒545-0005

大阪市阿倍野区三明町2-10-16 ウエムラ第2ビル202
川柳塔社 (電話 06-6629-6914)

振替 009801533368

◎この用紙は新規購読申し込みのみにご使用下さい



作品募集

川柳塔 (8句)
水煙抄 (8句)
愛染帖 (3句)
檸檬抄 (2句)
一路集 (3句)
初歩教室

河内天笑選
板尾岳人選
新家完司選
仁部四郎共選
藤田泰子選
神原由美子選
猪川耕治選
山田保州選
「投げる」
「紙」
「ポーズ」
「ころ」(3句)

8月号発表 (6月15日締切)

9月号
檸檬抄「法律」
一路集「募う」宿題
「ま」
初歩教室「長い」

本社6月句会

とき 6月7日(水) 午後5時半開場・6時半締切り
開催時間、締切り時間に御注意下さい。
ところ アウィーナ大阪 4階 金剛
天王寺区石ヶ辻町19-12 電話06・6772・1441
おはなし
兼題 「つんつん」
「降る」
「待つ」
「テープ」
「顔」
席題 1題 当日発表 (各題2句以内)
会費 1000円 投句料 500円
寺川弘一選
吉川美選
坊農柳弘選
奥田みつ子選
河内天笑選
木本朱夏選

路郎忌本社7月句会 7日(金) 午後5時半から

兼題 「子」「罌」「嘘」
「恋」「鳴る」

第25年度 夜市川柳募集

第1回「歌」鈴木公弘選
ハガキに3句 6月30日締切
投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い扱い)、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお問い合わせいたします。

定価 八百円(送料76円)

半年分 五千円(送料共)

一年分 九千八百円(同)

二〇〇六年(平成十八年)六月一日発行

発行人 河内権治

編集人 西出楓楽

印刷所 美研アト

〒545-0005 大阪市阿倍野区三好町二一〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話(06)六六二九一六九一四番

振替〇〇九八〇一五二三三六八番

第30回 全日本川柳2006年岩手大会

日時 六月十一日（日） 午前10時開場
会場 岩手県花巻温泉ホテル千秋閣

〒〇五〇三四 花巻市湯本第一地割二二五
TEL〇一九八（三七）二二五〇

宿題 第一部 締め切りました

第二部（当日投句、十一時十分締切）

「もてなす」 ふじむらみどり 選

「鬼」 森中 恵美子 選

「匠」 大野 風 柳 選

各題二句当日配布の句箋に記入

第二次選者

磯野いさむ・植木 利衛・塩見 草映

福岡 竜雄・米島 暁子

会費 四、〇〇〇円（昼食、記念品含む）

表彰 文部科学大臣賞・参議院議長賞・川柳大賞・

大会賞 ジュニア部門は賞状とメダルを予定

問い合わせ先

〒〇八三〇九 岩手県紫波郡紫波町北日詰

大日堂十八二一

熊谷岳朗方 日川協岩手大会事務局 宛

TEL・FAX〇一九（六七六）三七五一

*

（社）全日本川柳協会大会委員長 磯野いさむ

全日本川柳岩手大会実行委員長 佐藤 岳俊

医療法人社団

湯川胃腸病院

・日本医療機能評価機構・ISO9001-2000認証取得

健康保健取扱 看護2A・緩和ケア病棟

・消化器科・内科・外科

・放射線科・ホスピス

・デイサービスセンター

診療時間

月～金 8:30～16:00

土 8:30～11:00

JR桃谷駅徒歩3分

<http://www.yukawa.or.jp>

電話 大阪 (06) 6771-4861(代)